

---

# エンジェリック・ブルー

みくも

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エンジエリック・ブルー

### 【コード】

N3816N

### 【作者名】

みくも

### 【あらすじ】

マチルダは敗戦を地下牢で知らされる。そこに現れた男、占領軍の将軍であるヴィンセントは彼女だけが知るある秘密を聞き出そうとするが……。

(一)

(一)

十年目の秋だ。

珍しい事に……。いや、恐らく初めてだろう。取り乱したバツカスが、慌ててあたしの元に駆け込んで来た。

壁に掛けたランプの明かりが、ゆらゆらと文字を照らす。あたしは読み掛けた本に眼を遣ったまま、格子の向こうの男に問うた。

「どうかしたの」

彼は左の足が悪い。特徴のある足音だから、姿を見なくても誰だかすぐに解るのだ。

「お逃げ下さい」

返事と同時に、ガチャリと鍵を開ける音。

視線を上げると、やはりそこにいるのはバツカスだ。三十を少し過ぎた男で、枯れ草色の髪と眼を持つ。

よく知った顔だ。あたしがこの十年を生きて来られたのは、彼が見捨てなかつたお蔭だと言っている。

朝な夕なに食事を運び、粗末でも清潔な衣服を用意した。それだけでなく、父や兄達の耳に入ればきつと厳しい罰を受けるだろうに、城の書庫からあたしの手元まで本を運んだ。

今この手にある本も、数日前にバツカスが差し入れてくれたものだ。

親切な男だ。よく尽してくれる。けれどもこの十年、決して犯さなかつた禁忌がある。

牢の鍵を開けない事だ。

あたしは、手の中の本を閉じてバツカスを見詰めた。

「鍵を閉めて」

「姫様！ ……どうか」

鉄格子の扉を開け放ち、その場で土下座せんばかりに枯れ草色の頭を下げた。その様子を見ながら、あたしは閉じた本で自分の肩をトンと叩く。

どうも、おかしい。バツカスがあたしを逃がそうとした事は、これまでなかった。

考えられる心当たりは、処刑の日取りでも決まっただろうかと言う程度だ。でもそれは、いつかそうなると思っていた事じゃないか。それなのに？

ふと、天井を見上げる。

揺れている気がした。端に寄り、長い袖の先から覗く指先で石を積んだ壁に触れる。やはり微かに、振動を感じた。

ここは、地下牢だ。それも捕虜や囚人を捕えて置く場所よりも、ずっと奥深い位置にある。外の事は、ほぼ影響しないと思っ  
ていい。あたしの知る限りここよりも堅牢で、ここよりも隔離した場所は城内にはないだろう。

「バツカス」

呼ぶ。

返事がない。

「バツカス？」

顔を向ける。

と、バツカスは跳ねるように立ち上がり、鉄格子を閉めながら牢の中に素早く体を滑り込ませた。鍵を閉め、さっと離れる。

ボロ布みたいな服に包まれたあたしの肩をぐいぐい押して、部屋の隅に追い遣った。そして庇うように、背を向けて目の前に立つ。その間にも、足音がしていた。複数の硬い靴が、石畳を蹴る音。これが、石を積み上げた牢全体を揺らしていたのだ。

あり得ない。

ひと目見て、そう思った。

けれども、何を根拠に？

自国の王とはとっくに道を違えてしまったが、それでもどこかで

信じていたと言う事だろうか。

硬い足音と共に姿を見せたのは、敵対するリシェイド国軍の兵士達だった。

十人程の武装した兵が鉄格子の外にばらばらと散り、中央を少しだけ不自然に空けた。

コツ、コツ、と。ゆっくりとした足音を響かせ、そこに現れたのは獅子の紋章を身に付けた金髪の男だ。酷く若い。

その背後にぴったりと寄り添う赤髪は、護衛だろうか。もしそうなら、獅子の男は重職の軍人と見ていいだろう。

だとしたら、思い当たる事がある。

「バツカス」

背中を叩いて、離れさせる。彼の背中と壁に挟まれ、身動きができなかったのだ。

戸惑うふうのバツカスは放って置いて、寝台の下に押し込んだ本を引つ張り出す。最近読んだ一冊を選び、ぱらぱらと捲る。

「若干十八で騎士となった、ヴィンセント・L・ハーディー」

金髪の男が、ピクリと眉を動かした。

「が、何も言わない。あたしは再び眼を落とし、本の文字を声に出す。」

「以降数々の武功を上げ、リシェイドでも異例の出世を重ねて二十一で最年少の将軍に。その戦いぶりと紋章から、北限の獅子と讃えられる」

本を閉じ、格子の向こうに問い掛ける。

「あなたの事ですよ。この本は正しい？」

「年齢以外は。騎士になったのは十七です」

「ああ、そうなの？ でも、どっちでもいいわね。充分若いから」

「もう二十四になりましたよ」

「ほら、若い。あたしは確か、三十になったと思うわ」

いつの間にか年を取った。何だかがっかりしてため息をついていと、ヴィンセントは背後の赤髪と困ったように顔を見合す。

それが意外で、あたしは少し首を傾げた。

こんな事で困っていて、將軍職が務まるのだろうか。

「素直な人ね」

「それはどうも。では少し信用して、出て来ては頂けませんか」

「残念ながら、決めるのはあたしではないの。鍵を持っているのはこのバツカスだし、牢から出るには王の許しが無くてはね」

「王？ それは、この国の支配者と言う意味でしょうか」

「ヴィンセントは、わざわざその定義を確かめた。」

「……そうね。何が言いたいのか」

「では、許します。私が、この地を治める総督として」

余りにさりとらったので、それを理解するのに時間を要した。

その沈黙に、ヴィンセントは言葉を続ける。

「貴方の王は斃れました。現在このアイディームは、我がリシエイドの属領です」

反射的に、バツカスを見る。

逸らされるかと思っただが、彼は枯れ草色の瞳でちゃんとあたしを見詰め返した。そしてその表情が、今の話は事実だとあたしに教えた。

王が斃れた。

それは、国が斃れたと言う事だ。死んだと言う事だ。

あたしの祖国。あたしの家。アイディームが、滅んでしまった。

静かな声が、ピリリと刺して耳を打つ。

「アイディーム国王ハワード・アルプライの娘、マチルダ・A・アルプライ」

それはあたしの名前だった。

ゆっくりと、声の主へと眼を向ける。

「この地を治める総督として、またアイディームの土地を勝ち取ったりシエイドの将として、正式に命じます。出なさい、マチルダ」

はっと息を飲み、バツカスが慌ててあたしの前に出た。不安げな眼で、こちらを見下ろす。そんな顔をする事はないのに。

城に仕えてはいても、バツカスはただの下男だ。命を懸けて、あたしを庇う義理はない。

なだめるように、その腕を軽く叩く。

「開けて、バツカス」

「姫様！」

「昔話を知らないの？ 魔物でさえ、正体を見抜かれたら負けを認めるものよ。人間なら、尚更ね」

それに地下牢で籠城したって、結局は出て行く事になるのだし。

そう諭すと、バツカスはこの世が終わりでもしたかのような暗い顔で渋々と鍵を出した。

「もつと抵抗なさるか」と

「どうして？ 亡国の民はか弱いものだわ」

両側から武装した兵士に挟まれて、回廊を歩きながらあたしは答えた。

庭に面した柱の間を、心地いい風が通り抜ける。数年ぶりに頬を撫でる風は、ごわごわに痛んだあたしの黒髪も少し揺らした。

いい季節だ。

「私は貴方の父上と兄上を殺し、国を奪ったのですよ。罵られるくらい事は、覚悟していたのですが」

「敵対国とは戦うものだわ。負ければ死に、奪われる。その程度の事は、父も兄達も知っていたはずよ。それに」

自分の言葉に、あたしは足を止めた。少し前を歩いていたヴィンセントは、それに気付いて振り返った。

立ち止まろうとした訳ではなかった。

負ければ死に、奪われる。

そんな事を言っただけで、不意にあの夜を思い出した。その為にただ足が動かなくなったのだ。

落ちて砕けた毒の杯。

人肉を裂く、剣の手応え。

揺れる灯火の明かりを受けて、ぬるぬると光る血の塊。

国とは、奪い取ったもので富んで行く。

正義はまるで仮面のように、上っ面だけでしかない。その下はいつしか朽ち果てて、醜く崩れて骨さえも残らない。

正直に言っていると、立っているのもやっとなかった。けれども、この胸の内に気付かれる訳には行かなかった。急いで口を開く。

「考えて。あたしは確かに王の娘だったけど、どうして地下牢なんかにいたの？」

「自分を牢に繋いだ王を、恨んでいると？」

「残念。違うわ」

そつと息を吐いて、あたしは再び歩き出した。

「この身は血の一滴まで祖国のもの。ただ、その血はもはや枯れ果ててしまったと言っただけの事よ」

「……なるほど」

今度は、ヴィンセントが動こうとしなかった。振り返ると、金色の髪の下からアイスブルーの瞳がこちらを見ている。

薄青いそれは、光の中で不思議に輝く。凍えた夜空のオーロラみたいだ。

まるで、何より美しいあの石に似ていた。

「にわかには信じ難い、ただの噂だと思っていたが……」

あたしは、侮っていたのだろうか？

相手は、北限の獅子と呼ばれた男。

残酷な程、怜悯な人間に違いないのに。

「アイディームの末姫が一夜の内に一個小隊を惨殺したと言う話は、事実ですね」



(11)

(11)

アイディームの場合、一個小隊は十三人で構成される。

兵士三人で一組とするが、それを四つ合せたものに小隊長を加えて十三人。

これが十年前のあの夜に、あたしが奪った命の数だ。

「マチルダ？」

気遣うふうな、男の声。

不思議だ。

北の民は雪のように白い。厳しい寒風に鍛えられた肌は、一片の赤みさえ持たずに冷たげだ。なのに、頬に触れた手の平からは温かな体温が伝わって来る。

それが何だか、妙な気がした。

どこか作り物めいた皮膚の下にも、真っ赤な血が脈打っているのかと。

「総督」

呼ぶと、ヴィンセントは何かと問うように髪を揺らし、わずかに頭を傾げる。

「このお手は、問題です」

「……失礼」

わざと堅苦しく指摘すると、やっとその事に気付いた様子であったしの頬から手を引いた。

彼は先に立ち上がり、腕を差し出す。回廊の途中でうずくまってしまったあたしを、引き起す為だ。

「気分が優れないのなら、話を伺うのはまたにしましょう」

「……ええ、ごめんなさい。ずっと地下にいたのに、急に太陽を浴びたものだから少し眩暈が」

ヴィンセントは頷くと、兵士を残して立ち去った。

あたしの言い訳を、信じた訳ではないだろう。なのにこうもあっさり引き下がる事が、その余裕を示していた。

虜囚の、しかも女など、いつどうなるか解らない。向こうにすれば、どうとでもできると言う事だ。

それにしてもあんなふうには水を向けておいて、何もなかった顔で立ち去るなんてどうかしている。

あたしが石畳の床にへたへたと崩れてしまったのは、ヴィンセントのせいだ。彼が、あの夜の話題に触れた為に。

十年前の夜、十三人の男を殺した。

あたしが、自分の意思で。

後悔はない。

だが今も、その罪には胸を潰されそうになる。

優れた兵士達だった。

小隊を率いていたのはテイラスと言う騎士で、よく知った男だった。年が近く、父のお気に入り、あたしの護衛に付く機会も多かった。

けれども、殺さなくてはならなかった。

その理由を知る者は、あたしの他には誰もいない。知っていたのは、あの夜に死んだ者達だけだ。

それどころか、あたしが十三人の兵士を殺した事実さえ、父は葬ったはずだ。

娘を守った訳ではない。あたしの凶行を葬る事で、王家の威光を守ろうとした。

そして同時に、あの石を守ろうと。

あの事件の一端は、エンジェリック・ブルーに繋がっていた。それだけは誰の眼にも明らかだ。

だからこそ、あの夜の事が噂になどなるはずはない。そんな事、父が許さない。

そうして血に塗れてしまったと言うのに、父や兄はどこまでもあ

の宝石を惜しんだ。殺人を葬り去ったのは、あたしではなく石の為だ。

なのにそれを、ヴィンセントは知っていた。

どうやって知ったのか。その噂は、どこまで広がっているのか。そしてどこまで正しいのか。

あたしは、確かめなくてはならなかった。

けれども、何の皮肉だろう。国が滅んで父や兄から解放されたと思ったら、代りに現れたのがあんな男とは。

ヴィンセントは苦手だ。他ならぬあの眼が。

あの人の薄青い瞳は、何よりも美しく、何よりも呪われたあの石に似ていた。

まるで責められているようで、見詰められると気がふれてしまっそう。

無意識の内に、あたしは自分の頬を撫でた。ヴィンセントが触れた場所だ。

彼から移った温もりが、そこにまだ残っているみたいに感じられた。

\*

リシエイドは、大陸の端にある。

アイディームから見て北の国境を接する隣国。万年雪と、溶ける事のない凍土の国だ。

その向こうには凍て付いた外海があるばかりで、故にリシエイドを以って北限と言われる。

国境を接する隣国ではあったが、こちらとあちらでは所有する国土面積からして全く違う。リシエイドは気の遠くなるような大国で、対するアイディームは驚く程に小さかった。その為に、象と蟻に例えられる事さえある。

元々、リシエイドは好戦的な国だ。確かに広いが、その殆どが氷

に閉ざされた厳しい環境にあるからだ。故に彼等は近隣国から領地を奪い、そこで利益を得て本国の民を養う。

戦を生きる糧としているのだ。

かの国から送り込まれた北限の獅子。ヴィンセントはアイディームに入るにあたり、二個師団と、その司令官でもあるふたつの牙を伴っていた。

牙とは、北限の獅子が持つ腹心の部下だ。ひとりの名はコーネリアス。もうひとりをワイルダーと言う。

今は室内にその片割れ、コーネリアスが同席していた。

しかしこの男については師団長と言うより、参謀とでも呼ぶべきだろう。長く垂らした灰色の髪は戦闘には向かないだろうし、何よりこちらを観察する翡翠の瞳は理的だ。さつき兵士に伴われて入室する際、中から返された返事はこの男の声だった。

あたしを室内に残し、兵士が去る。

高い天井。それを支える、美しく配された柱。滑らかに磨かれた様々な石で、緻密な幾何学模様を描く床。一方の壁には大きな書架が作り付けられており、書名の箔押しされた本の背中がびっしりと並んでいる。

王の部屋だ。

ここはかつて、王の為の執務室だった。

テラスに通じる硝子戸から、ヴィンセントが姿を見せる。傍に赤髪の護衛、クライヴが控えているのが見えた。

「気分はどうです？」

「ありがとう、大丈夫よ。昨夜は久しぶりにまともなベッドで眠れたから」

それは何より、と。ヴィンセントは唇だけでわずかに笑む。

昨日、牢を出されてから、あたしはまるで賓客の扱いを受けた。

無論、見張りの兵士は付いていたが。

城内で最も上等なゲストルームに案内され、バスタブ一杯の熱いお湯まで与えられた。入浴の後に袖を通したのは、絹の寝間着だ。

おまけに、クローゼットには美しく繊細な錦と、うっとりするよ  
うなビロードをたっぷりと使ったドレスがあつた。胸元はすつきり  
と大きく開き、袖はあたしの手よりも長い。しかし肩まで入ったス  
リットの為に、それはきつと歩きたび優雅に揺れるだろう。

今朝、ヴィンセントからの呼び出しに、けれどもあたしはそのド  
レスを着なかつた。

「お気に召さなかつた様ですね。ドレスの方は」

「お湯は有難く使わせて貰つたわ。もう、夢心地」

「コーディーが困り果てていましたよ。女性は美しいドレスを好む  
のに、一向に袖を通して下さらないと」

言いながらヴィンセントはあたしに椅子を勧め、自分もテーブル  
を挟んだ向かい側に腰掛ける。

コーディーと言うのは、今朝あたしの身支度を手伝つつもりで遣  
つて来た若い侍従だ。顎までの黒髪と、明るい茶の眼を覚えている。  
まだ十代の子供だ。それに強情を張るのは気が引けたが、仕方ない。  
「それはきつと、十年も地下牢に閉じ込められた事のない女性の話  
ね」

言いながら、あたしは服から飛び出る手を隠して擦り切れた袖を  
引つ張つた。

「口の減らない人だなあ」

「若いから、知らないのも無理はないわね。有名だったのよ、あた  
し。誰も手を付けられなくて、結婚できなかつたの」

横で、コーネリアスがぐすくすと笑う。彼はあたしと年が近いよ  
うだから、風の噂くらいは聞いた事があるかも知れない。

十年前、あたしは二十歳だった。町娘でも貴族でも、とつくに婚  
姻を結んでいて当然の年だ。王の娘なら、尚更。早々にどこかの国  
へ嫁がすか、有力な重臣に降嫁させるか。とにかく、十五を過ぎて  
遊ばせて置くのはあり得ない。

でも、あたしはそうだった。

少し困つたようにあたしとコーネリアスを見比べて、ヴィンセン

トは息を吐く。

「それがどうして、ドレスを着ない理由になるんでしょうね」

「さあね。まあ、いいわ。本題に入りましょ？ あたしが考える通りなら、その事にも追々触れる事になるだろうから」

そう告げると、少し細めたアイズブルーの瞳があたしを見詰めた。視線をそのままに、片手を上げる。合図を受け、灰色の髪をさらりと揺らしてコーネリアスが席を立った。壁際のチェストから小箱を取り出し、テーブルに置く。

ヴィンセントはそれを手の中で転がして、しばし遊んだ。でもその顔は、何かを迷うかのように見えなくもない。

「私にもまた、考えている事があります。この考えが正しければ、恐らく貴方は命を賭してその秘密を守るでしょう。違いますか、マチルダ？」

「その考えとやらによるわね」

あたしはテーブルに頬杖を突き、真正面の男を見ながらクスリと笑う。

この男が間違っ事はあり得ないと、そう思ったからだ。

かの国で、北限の獅子と讃えられるヴィンセント・L・ハーディ。破格の若さで將軍職を与えられた彼が、尋常な男の訳がない。

だとしたら、答えの得られない質問を投げ掛けようとしている。その不毛さを承知の上で。

ヴィンセントの白い指先が、小箱を開ける。磨き込まれたテーブルの上を滑らせて、あたしの前にその中身を示した。

「この石の鉱脈を、教えて頂く」

箱の中では真綿に包まれ、エンジェリック・ブルーが幻のような儂さで美しく輝いていた。

(三)

(三)

それは、奇跡の宝石と呼ばれた。

または憐れみの涙、とも。

発見されたのは十年前で、現存するのはその時に発見隊が持ち帰った五十二個。以来、新たな石の発見はない。

まるで石の中にオーロラを閉じ込めたかのような、幾重にも重なる不思議な輝き。薄暗く橙を帯びた灯火の中でも、自ら発光するかのように薄青い光をとろりと含む。

そして付けられたのが、エンジェリック・ブルー。

まるで天使の落した憐れみの涙が凝ったようだと、そう名付けられた。

今となつては、皮肉でしかない。名に反して、呪われた宝石となつたのだから。

王はアイディームの国土からこの石が採れた事を喜んで、発見から七日の内に幾つかを友好国の長に贈った。

そして七日目に、あたしが事件を起した。

発見したのは騎士であるティラスと、彼の率いる小隊の兵士。

あたしが殺した、十三人だ。

そんな状況では、考えなくても解るはずだ。あの石の為に、ティラス達を殺したと。

にっこりと笑い、あたしはヴィンセントを見る。

「そうね、あなたの言う通り。当たり前よ。誰にも石の事を教えるつもりはないわ」

「でしようね。この為に罪を犯し、十年もの沈黙を守った貴方だ。簡単に口を割るはずがない」

「よく知ってるわね。なら、秘密は秘密のままに」

「私にも立場があるんですよ、マチルダ」

「知らないわ」

「アイデュームを落としたのは、この石のためだ」

大きく荒げた訳ではなかったが、鞭で打つような声だった。

あたしは反射的に、背筋を伸ばしてびくりと震えた。

石の為？

この十年が、あたしには解らない。

あたしの知らない十年で、石がそこまでの価値を持ってしまった  
と言うのか。

一國を滅ぼしてしまう程？

男を、血に狂わせてしまう程？

「下らない」

言った声が、我ながらぞつとする程冷たかった。

「……マチルダ？」

「好きになさい。ご推察の通り、石の発見者を殺したのはあたしよ。  
ひとり残らず殺したわ。あの人は自分の功を守ろうと、誰にも鉞  
脈の場所を教えなかったの。だから今、石の場所を知ってるのはあ  
ただけ。でも、残念ね。あれはあたしのものなの。誰にもあげな  
い。あなたにもよ、ヴィンセント」

言うだけ言うと、あたしは席を立つ。

眉を顰めたクライヴが、剣の柄に手を掛けながらさつと主に駆け  
寄った。

「諦めて」

テーブルの小箱を、突き放すように手で払う。と、勢い余って箱  
から石が転がり出た。青い輝きが床に落ち、硬い音を立てる。コー  
ネリアスが、ぎくりと一瞬息を詰めた。

どれだけの価値があるのだろう。彼の反応についてそう考え、忌々  
しくなる。

けれどもヴィンセントは、石を一瞥さえもしていない。代りに、  
じつとこちらを見詰めていた。この胸の内を覗こうとでも言うふう



に。

それが何だか、恐かった。

王の執務室から勝手に出て、廊下を歩く。

すると揃いの鎧を身に着けた兵士が二人、慌てて後ろを追い掛けて来た。そりやそうか。捕虜を勝手に出歩かせては、拙いはずだ。

けれども叱責される事も、強引に止められる事もなかった。どうやら、ヴィンセントがあたしを賓客扱いにしたせいらしい。将軍が篤く保護しているものを、一兵卒が勝手にどうこうもできないのだらう。

そんな事を考えながらずんずんと歩いていると、庭に出た。芝生が太陽の光を一杯に浴び、爽やかな匂いを辺り一面に漂わせている。懐かしい、と言いたい所だが、残念ながらそれは無理だ。

よく見れば、庭の手入れはしばらくされてないらしい。隅では立ち枯れた木がそのままに放置されていたし、伸び放題の芝生には雑草が小さな花を咲かせている。それはそれで可憐だが、王城の庭には相応しくない。

簡単に言えば、荒れ果てている。

あたしが知っている頃は、隅々まで手入れの行き届いた美しい城だった。落葉の一枚さえ許さずに整えられた庭を、季節ごとに咲き乱れる花が絶えず絢爛に飾っていたのだ。

けれども、これはどう？

雑草の他に花らしい花はなく、カサカサとすら寂しく枯れた枝葉が風に揺れる。昨日今日でこうはならない。まるで、滅んで久しい廃墟の庭だ。

あたしは石の回廊から芝生の上に足を降ろすと、庭を囲む石垣に駆け寄った。絡み合った蔦を掻き分け、背丈よりもずっと高く積み上げた石に触れる。横に移動しながら、扉を探した。別の庭に入る為の、小さな木戸があるはずだ。

ふと、石に這わせた手の上に影が射す。真上に顔を上げると、秋の陽光に眼が眩んだ。

細めた視界の中で、黒い人影がチラリと動いた。後ろにくつついた兵士達には、梢が邪魔で見えない位置だ。逆光の影はさっと右に手を振ると、石垣のあちらに姿を消した。

右。

視線を下ろし、そちらに進む。と、程なく指先の感触がザラリと変った。石でなく、乾いた木の感触だ。

扉を見付けた。そう思った瞬間に、分厚く重なる蔦の下で木戸が開く。

唐突に、ぱっくり開いた空間からこちらに向かって腕が伸びた。大きな手の平はあたしの手首を素早く掴むと、あつと言つ間に木戸の中に引き摺り込む。

すぐに慌てた兵士達が体当たりでもするようにドンドンと激しく戸を叩いたが、しばらくは開かないだろう。内開きの扉だ。閉じると同時に手近の鍬をドアに噛ませ、つかえ棒の代りにしていた。

そして手首を掴んだまま、男はあたしを見下ろした。あたしも、その男を見る。

「何をしているの、バツカス」

「お逃がし致します、姫様」

その言葉に、はつと息を飲む。胸を突かれた。

牢獄の中で、一度言われた言葉だった。けれども、それは失敗した。あたしも拒否した。それで終わったと思っていた。

だがバツカスは、諦めた訳ではなかったのだ。

あたしは、眉を顰めた。

不愉快でそうしたのではない。

我が身を恥じ、そして同時に誇りに思った。

全てを懸けた。この身の全てを。あたしが許される事はないけれど、引き換えに稀有の民を得た。

風のように現れたこの男は、庇おうと言つ。

国が敗れ、自分さえどうなるか解らない。そんな時に、王族であ

りながら罪人のこの身を。

けれどもその情けに縋るには、あたしの罪は重過ぎた。  
零れそうになる涙を堪え、どうにか笑う。

「できないわ」

「姫様！」

「バツカス、あなたは逃げなさい。死んでは駄目」

枯れ草色の眼が、憂えげに見下ろす。

「姫様も、死んではなりません」

「いいえ。あたしのような人間が、生きようとしてはいけないの」

この言葉に、男は微かに肩を震わせた。恐れるように、初めて何かを悟ったように。

そして呆然と、バツカスは呟く。

「……それは……間違えておいでだ」

間違う。何を？

明らかだ。あたしは許されない。

「こんな所で秘密の逢瀬とは。隅に置けませんね、マチルダ」

わずかに笑いを含んだ声が、頭上から降る。

上から？

見上げようとしたが、それより先に声の主が目前に落ちる。本当に目の前だ。鼻先が背中に触れるかと思っ、思わず反射的に後ろへと下がる。

抜き払われた剣先を避け、飛び退いたバツカスが直前まで立っていた位置。そこに、抜刀したヴィンセントがいる。

背後の木戸は、まだ開かない。となると、石垣を越えて来たのだらう。

驚いて、声も出ない。

冷たく輝く金色の髪に、恐いような薄青い瞳。間違はなくヴィンセントだ。

……だが、誰だこれは。

青銅の剣を無造作に構え、獲物を前に舌なめずりでもしかねない

好戦的な表情。そして笑う。浮かべているのは、今まで見た中で一番解り易い笑顔だった。

この状況と言うのが、理解に苦しむが。

「我が軍が幾重にも守るこの城内から、貴方を逃がそうとするとはよい臣下をお持ちですね」

「そうかしら。王の血筋は、国と共に滅ぶもの。それを解さず、よい臣下と言えるかしら」

「お蔵しい」

「救われたいとは思っていないの」

あたしの言葉に、バツカスはさっと顔を曇らせた。傷付いたように。

わずかに翳った、枯れ草色の瞳が見詰める。

「必ず、お迎えに参ります」

言い残し、悪い足を巧く庇って身を翻す。

茂みに飛び込み逃れようとする男を、もう一人の剣を持った男が追う。あたしは更にその背を追って、ぶつかる勢いで飛び付いた。

まさか、背後から襲われるとは思ってもいなかったのだらう。ヴィンセントは思いの他にあっさりと倒れた。

「マチルダ！」

地面からがばりと顔を上げ、信じられないものを見る眼であたしを責める。

ヴィンセントに縋り付いて、こちらも一緒に地面に倒れた。今だつて、がっちりと胴に腕を回したままだ。下手に離すと、まだバツカスを追って行き兼ねない。

「この地の民を虐げるつもり？」

「抜き身の剣で脅す程度、国境を越えてから散々やった。今更、そんな事を仰るとは」

二人の体を離そうと、ヴィンセントはあたしの肩に手を掛ける。負けじと薄青い眼を見返して、思い切り不機嫌に言っただった。

「あたしの前で、と言うのが問題よ。許さないわ」

はつとしたように、肩の上でヴィンセントの手が強張った。

布越しの感触でそれを感じ、あたしは却って戸惑ってしまう。さすがに、気分を害しただろうか。まあ、それこそ今更だろうか。

秋の陽光に、上等の錦より美しく煌く。ヴィンセントは金に輝く髪の下で、眩しそうに眼を細めた。そしてその白い手は肩から頬に移動して、油の抜けた肌を包む。

壊れものでも愛でるように触れられて、あたしはやはり戸惑う事しかできなかった。

(四)

(四)

惜しい事だ、と。呟いた気がする。

ヴィンセントに、しかしそれを確かめる事はできなかった。

ぱつと頬から手を離れたかと思うと、あつと言つ間に自分の上からあたしを退けた。そして大きな声を張り上げて、部下の名を呼ぶ。

「ワイルダー！」

いきなり何事かと思つたが、すぐに解る。そこにいたのだ。

「スマン、邪魔したか」

「冗談は嫌いだ」

「安心しろ。オレはいつでも本気だぞ、ヴィンス」

どう見ても茶化していると思えない顔で、トンと軽く地面に降りた。石垣の上からだ。

驚かされる。現れたのは、三十半ばの大男。なのに、この身の軽さは何だろう。

肩まである茶色の髪を頭の後ろでひとつに束ね、鎧の上に擦り切れた革の上着を引っ掛けている。上級軍人と言つには、余りに無頼この男が、もうひとりの獅子の牙か。

大男は木戸に噛ませたつつかえ棒を取り除き、石垣に背中でもたれる。

ヴィンセントに助け起こされながら盗み見ると、剣の柄に腕を載せてニヤニヤとこちらに視線をよこした。

やっと戸が開き、慌てた様子の兵士達が雪崩れ込んで来る。それにあたしを任せ、ヴィンセントはこっそりとワイルダーの傍に寄つた。隅だから誰も気付かないが、拳で厚い胸を叩く。そして潜めた声で。

「仮にも相手は一国の姫だ。不躰な真似は止してくれ」

「そりゃ失敬。でもな、ヴィンス。その姫さんを勝手に触るのは、不躰じゃないのか？」

泣く子も黙る北限の獅子。

そんなふうにしていたが、どうだろう。

吹き出すように笑った男を、ヴィンセントは止められずにいる。

追い詰められてやっと出たのが、「うるさいな！」の子供染みた抗議の言葉。

あたしは首を傾げながら、木戸を潜って庭を離れた。

\*

母から受け継いだのは、この黒い髪とグレーの瞳。

あたしは早世した王妃の産んだただひとりの子供で、だから父はあたしを甘やかした。

王家を継ぐのは王が側室との間に儲けた兄達だと決っていたが、食卓で父の隣に座るのはあたしだった。狩りで弓の腕前を褒められるのもあたしで、外交の席で他国の客人をもてなす事さえ許されていたのだ。

兄達には、さぞや疎ましかっただろう。

王族の女は他国の王家に嫁ぎ、子を成す事でやっと安寧を得られる。でなければ、国内の有力な臣下を繋ぎ留める道具とされる。そう言うものだ。

けれどもそうしなかったあたしの存在は、ただひとつ、父の寵愛によつてのみ許されていた。

それがあの夜、全て終わった。

あたしはベッドの上で膝を抱え、自分の肩に腕を巻き付けた。

窓を一杯に開いて外気を取り込んでいたが、室内は決して寒くはない。けれどもひとりしていると、そうせずにはいられなかった。ずっと冷たく暗い地下牢にいた為に、骨の中まですっかり凍えてしまったのだろうか。

と、そこにノックが響く。ゲストルームのドアを開いて、遠慮がちに顔を覗かせているのはコーディーだった。

「ハーディー将軍が呼びなのですが……」

あたしは首を傾げる。窓から外に眼を遣ると、太陽が真上にある為に木々も人も影が短い。昼食の時間だ。こんな時分に呼び出すなんて、余程急ぐ話だろうか。

囚われの身分では、急用と言われても悪い考えしか浮かばない。

だが、この子にそれを言っても仕方ないか。ベッドから降り、平静を装う。

「そう。じゃあ、行きましょ」

「あ、あの、マチルダ様」

部屋を出ようとドアに向かうと、コーディーは慌ててあたしを呼び止めた。

「どうかそろそろ、お召し替えを」

この囚人の服は脱げと、そう言っている。身分としては、今も囚人。合っていると思うのだが。どうやらあたしの世話を命じられているコーディーは、そのあたしがいつまでもみすばらしい格好でいるのが我慢ならないようだった。

幼さの残る顔で、世話係は必死そうにこちらを見詰める。

その様はいじらしくて、あたしは少し、心が揺れた。

ほんの、少しだけ。

「コーディーはまた負けた様ですね」

王の執務室を訪ねたあたしを見るなり、面白がるようにヴィンセントは言った。ドレスを着ていなかったからだ。

いじらしいからと、願いを聞き入れて遣る義理もないだろう。にべもなく断られ、肩を落とした若い侍従は眼に涙を浮かべていたかも知れないが。

あたしは唇を尖らせ、ささやかな反論を試みる。

「知らないの？ 女に負けられるのは、いい男の条件よ」

「そう言うものですか。なら、この国の男とは話が合いそうにない



な

ただ気に入らなくて、嘯いただけだった。

なのにヴィンセントが真面目そうに答えたりするから、あたしは堪え切れずに大きな声で笑ってしまった。切れ者の將軍とそれに従う赤髪の護衛は、困り果てたような奇妙な顔であたしの笑いが治まるのを待つ。

お腹が痛くなる程に散々笑って、何とか息を整える。自分でも白々しいと思いつながら、一応の謝意を見せた。

「ごめんなさい。でも、気は合うと思うわ。この国の男も、女に負けるのは善しとしないから」

「そうですか」

ヴィンセントは、ふとした様子でそれを言った。

くるりと背を向け、テラスのほうへ移動しながら。実に何げなさそうに。

「なら、貴方は随分と疎まれたでしょう」

これは本当にその通りだったから、あたしは少しばかりの驚きを以ってヴィンセントの背中を見詰めた。

理解されたいだなんて、望んではいないのに。

「マチルダ」

テラスから呼ぶ。

声に従いガラス戸を潜ると、色付いた庭を背景に小さな食卓が用意されていた。ワインと料理と、向かい合せて椅子が二脚。

「なあに？ ランチのお誘いって訳じゃないでしょ？」

「いえ、そうですよ。どうぞこちらに」  
意味が解らない。

促されるままテーブルに着いたが、疑念めいたそれは薄まらなかつた。あたしの顔に、それが見えたか。

席に着いて、しばらくの沈黙。

その後でヴィンセントは手にしたワイングラスをテーブルに置き、頭を抱えた。

「やはりどうかしてますね、これは」

「やっともな事を言い出したので、ほっとしてそれに同意する。

「そうねえ。普通、虜囚をランチには誘わないわね。何を考えてたの？」

「牙の入れ知恵だろ」

「あら」

その声に、視線を上げる。脇に控えたクライヴが、呆れたように口を挟んだのだ。けれども元来、口数の少ない男なのだろう。そのひと言を発したきり、黙ってしまふ。

言葉足らずな説明に、首を傾げる。

「牙と言つと……」

「ワイルダーですよ。女性と話をする時は、まず食事に誘うものだと」

「それ、間違つてるとも言切れないけど、正しくもないと思うわ何だ。部下に担がれただけか。

妙な意図がないと解り、肩から力が抜けて行った。

水のグラスを口に運び、しかし考えると面白い、と思う。

ヴィンセントの迂闊な一面も意外だが、北限の獅子と恐れられる上司を担ごうとする部下も相当だ。笑みが堪え切れず、口元に滲んでいるのが自分で解る。

「ワイルダーが相手だと、随分と無防備になつてしまふのね」

「無防備と言つか……つい信じてしまふんですね。あれは私に武芸を仕込んだ師ですから、その頃の癖が抜け切っていないのですよ」

「そうなの？ だからね、きっと。ワイルダーが一緒の時、あなた少し子供のようよ」

そう言つと、苦虫を噛み潰したような情けない顔を見せた。思わず笑つてしまつてから、あたしは席を立つ。

一瞬きよとんとこちらを見上げ、ヴィンセントは問う。

「どうされました？」

「失礼するわ。ランチは間違いだつたようだから」

「いいえ、どうぞこのまま」

立ち上がり、テーブルを回り込むとあたしの座っていた椅子を引く。この一連の動作は、もう一度座れと促していた。

「どうして？ 意味がないわ」

「確かに、最初は間違いかと。しかし、悪くないと思えましたよ。信頼を築くのに、食事を共にするのは悪くない」

「信頼？」

驚きの余り、あたしはヴァインセントの顔を真正面からまじまじと見てしまった。

「信頼が必要？ あたしと、あなたに？」

「そう思います。貴方は、信頼しない者に秘密を明かしますか？」

ヴァインセントは事もなげに、当然のように言う。それをあたしは、信じられない気持ちで聞いた。

何が違うのだろう。

あたしと、この人は。

「さっきの言葉、撤回させて」

「どの言葉でしょう」

「父や兄達は、あなたと致命的に相容れないわ」

呟くように言いながら、あたしはみすばらしく擦り切れた袖を捲る。顕わになつた腕を見て、ヴァインセントは息を飲んだ。

「この国ではね、情報は信頼ではなく、苦痛と引き換えに得るものだからよ」

あたしの肌には、古い傷が幾つも残る。

稀有な宝石、エンジェリック・ブルー。

その情報を引き出す為に、父や兄があたしに与えた度重なる拷問の痕だ。

(五)

(五)

父はあたしを愛していたのに？

けれども、それは関係ない。関係なくなった。

十三人の男を殺したあの夜で、父の中であたしの価値は皆無になつたからだ。

母を愛していたのだと思う。だから父は、あたしに宿つた母の面影を溺愛した。けれども、それが裏切つたら？

最も愛しい者の姿で、王の権威を脅かす反逆者になったとしたら？ それはたちまち絶望に変わり、やがて深い憎しみになったに違いない。

だから、腕だけではなく。あたしの体には、隙間もない程のおびただしい傷跡がある。数え切れない程の傷が。

父の事を考えていたら、あたしはふと思いつた。これは、あり得ない事だろうか？

捲り上げた袖を戻し、手の甲までを隠しながらヴィンセントを見詰める。

「王は、本当に斃れたの？」

あたしの視線を受けた彼は、戸惑うように瞳を揺らした。

「え、ええ。捕えて、即座に処刑を」

「本当に？」

「何か、不審が？」

「そうよ。父は、あの石を欲しがったわ。兄達もね。どんな手段を使つても、手に入れたがつたの」

この言葉の中に、軍人である彼は血腥さを嗅ぎ取つたらしい。

一瞬だけ、あたしの手の上を視線が掠めた。服で隠れていたけれども、薄青いその眼には生々しい傷痕が映っているのかも知れない。

「……解ります。余りにも価値のあるものですから」

「そうかもね。あたしには理解できないけど」

どんな犠牲を払ってもいいとは、到底思えない。

ただ、父や兄達はそう考えなかった。それだけの事だ。

「だから、もう一度訊くわ。この国は、本当に敗れたの？　そもそも、戦争なんて本当にあつたの？」

「それは……、どんな理屈です？　現に私はアイディームを制圧し、事後は総督としてここにいます。敗れていないなら、戦争がなかったなら、これはどう説明を？」

「だから、父よ。父が、あたしの口を割らせようと仕組んだ事では？　自国を占領されたと聞かされて、脅されれば、さすがに白状すると考えたのかも」

「つまり、これらは全て芝居だと？」

頷くあたしに、ヴィンセントは心底驚いたように眼を見開いた。

テラスの縁までそのまま下がり、腰の辺りで手摺りにもたれる。腕組みし、問いを投げた。

「だとしたら、余りに危険な賭けですね。敵国の人間を、国の根幹に招き入れるとは。根拠のある推測でしょうか」

「危険な相手でなければ、あたしが信じないもの。でも、静か過ぎるわ。敗れたのでしょ？　滅んだのでしょ？　だったらもつと荒れているはず。確かにあたしが知ってる頃より、城の中は酷くなつたわ。でも、血の臭いも、家や死体の焼ける臭いもしない。まるつきり、日常よ」

「酷くなつたのか……」

ひとり言だつたのだろう。眼を伏せて小さな声で言った後、上げた視線をあたしに合す。

「では、リシエイドが協力する動機は何です」

「鉄よ」

他にない。即座に答えた。

何が面白いのか、ヴィンセントは口元に手を当ててクツクツと笑

う。

「なるほど」

アイディームは鉄の国だ。

だが、この国に鉄鉱石の鉱脈はない。鉄鉱石とは精錬前の鉄の原料だが、それさえ他国から輸入している。では何を持っているか。

それは加工技術だ。我が国の技術で鍛えたもの程、強く美しい鉄はない。

特に鉄剣は、命や戦の勝敗を左右するだけにとっても高価で、そして需要がある。アイディームはこれら鉄製品を輸出する事で、国を豊かに栄えさせて来た。

だから鉄の精錬技術は、当然ながら国家の秘法だ。その技術を持つ鍛冶師は、全て国の管理下に置かれていた。

その為に鍛冶師は全て世襲制で、外部からの弟子は取れない。自分の血筋でない者に技術を伝えれば、即座に処刑。他国の人間は鍛冶師の家に立ち入るだけで、罪に問われる。

そうして手厚く守られたアイディームの鉄は、だからどの国に取ってもあらゆる利害の動機になるはずだ。

ふと、ヴィンセントが庭で剣を抜き払った事を思い出す。珍しい、と思ったのだ。

「あなたの剣は青銅ね。魔剣ではなさそうだけど」

「ええ。ごく普通の剣ですよ。アイディームの兵士は鉄剣ですからね。今回の戦いで予備の剣まで折られてしまって、これは軍の備品です」

なら、本来は魔剣を帯びていたのだろう。

青銅はやわらかい。鉄剣と打ち合えば、すぐに折れてしまうのだ。だが代りに、青銅の剣には魔剣と言うものがある。呼び名の通り、魔術で鍛えた剣の事だ。これは青銅の弱点を補う為に施されるが、高価なものになると魔術師を伴ったように不思議な力を持つ剣もあるそう。

だが、鉄の魔剣は存在しない。魔術師を輩出するのは遠い西方の

ハルディンマゴと言う国だけだが、アイディームの鍛冶場に他国の民が立ち入る事はあり得ないからだ。

だから身分のある軍人は鉄の中でも最高の鋼か、青銅の魔剣を腰に帯びる。

「戦いで、ね。まあいいわ。それで、あたしの質問には答えてくれないの？」

「貴方は賢い人ですね、マチルダ。面白い仮説でしたが、残念ながら事実ではありません。戦いは、ありました」

手摺りを離れ、ヴィンセントはテーブルの席に戻る。皿の手前に肘を突いて、軽く曲げた指先で顎を支えながらあたしを見た。

座るのを待っているらしい。仕方なく、向かい合って腰を下ろす。「貴方の兄上とも剣を交えました。お望みなら、首を運ばせましようか」

「いえ、結構よ」

そんな趣味はない。

「ですが仰る通り、王都に入ってから戦闘はありません。この城に入るのは容易でした。抵抗がありませんでしたからね」

「まさか。あり得ないわ」

「最も激しい抵抗があったのは、国境でした。私の剣を折られたのも、国境での戦いです」

国境の守りは重要だ。そこを突破されたら、そのまま国境線を後ろに下げなくてはならない事だつてある。国土を失うのだ。

だから国境の砦には、優れた軍人を配置する。でも、それにしたつて。王都を無抵抗で明け渡すなんてあり得ない。

「私も不審でした。簡単過ぎると。ですが、あなたの話を伺って、少し納得しました」

「あたしの？」

「王は、囚われてしまったのかも知れません。この国は私達が攻め入る前に、既に滅んでいたのかも」

あたしは、それをすぐに否定できなかった。

思い当たる事があった。

手入れのされない王宮の庭。

王の眼に触れるのだ。そんな場所が、荒れているなんてどうかしている。

王に、父に、何があったの。

「あの石は美しく、途方もない価値がある。手に入れたいと願う余り、他の事に構えなくなつたとしても無理はない。だがそぞろになるのが王の心なら、それは国事にも及ぶでしょう」

そうして、緩やかに滅んだと？

あたしは瞼を閉じ、胸の息を全て吐いた。そうすると、込み上げて来るものがある。慙愧とでも呼ぶべきものか。痛いような、苦しいようなそれ。

開いた眼を、風に揺れる草木に向ける。

信じないのは、信じたくないと思つていると言つ事だろうか。

この滅亡は、だとしたら、あたしが招いたに他ならない。

「信じて頂けましたか？」

「さあ……。でも、どちらでもいいわね。あたしはどうせ、石の事を話すつもりがないんだから」

「……そうですか。それも、いいかも知れませんか」

石の為に戦争まで起しておいて？

ヴィンセントの言葉に驚いて、その顔を見た。けれどもそれは横顔で、彼は直前までのあたしと同じに庭へ眼を遣つている。

遠くを見るような、心の底で何かを憂えるような表情に見えた。

「あなたの王が、父と同じにならなければいいわね」

余計な事だとは、言ってから思った。

それが正鵠を射ていたと、ヴィンセントの妙に優しげな笑顔で知つたからだ。



(六)

(六)

男が妙に優しいのは、都合が悪いか何かを隠している時だ。ヴィンセントはその証拠に、とびつきり優しい顔で笑ってから、少しだけ話題の方向を変えた。

「実は先程、庭まで貴方を追って行っただんですよ」

大きな手に支えられたグラスが、とろりと傾いてワインを口に流し込む。

「ああ、それで止めに入るのが早かったのね」

あたしを助け出そうと、バツカスが現れた時の話だろう。

「伺いたい事があつたのですが……。疑問はもう解けました」  
疑問？

その言葉に、首を傾げる。と、真正面に座つた男は金の髪を揺らしながら、意地の悪い含み笑いを浮かべた。

何だか、イメージにない笑い方だ。もしかして彼は、酒に強くないのだろうか。

「ドレスです。サイズが合わないのかと伺いに」

「冗談はお嫌いなんですよ？」

「ええ」

「嫌いでよかつたわ。センスもないみたいだから」

切り分けた肉を口に運び、さらりと皮肉で返して遣つた。女に服のサイズを尋ねようと言うのもふざけた話だが、冗談としても笑えない。

結局ランチをご馳走になって、部屋を出ようかと言う頃だ。ヴィンセントがあたしの耳に顔を寄せ、そつと囁いた。

「次は、肌を出さないドレスを用意します。着て下さいますね？」

「いよいよあたしは、この男が解らなくなつてしまつた。」

すっかり敵將の居室となった王の執務室を退出し、監視の兵士達に付き添われながら与えられたゲストルームまで早足に歩いた。

別に急いだ訳ではない。考え事をしていると、いつの間にかそうなってしまうのだ。

何かが引つ掛かる。ヴィンセントの事だ。確かに変わった人だが、何だろう。

どこか納得できなくて、彼と交した会話をひとつひとつ思い返す。そしてあたしは、自分の失態を知った。

あたしがドレスを着ないのは、体中に傷痕があるからだ。そしてその傷痕は、石の情報を引き出そうと苦痛を与える為に付けられたものだ。

けれども、ヴィンセントはそれに触れなかった。わざわざ話題を避けたようにさえ思う。

問えばよかったのに。ドレスを着ないのは何故かと。この傷は何かと。情報の為に、王があたしに拷問を許したのかと。

そうしなかったヴィンセントに、却って戸惑いを覚えたのだ。

どうして、あの人はあたしを痛め付けないのだろう。そうしたほうが、きっと効果的に違いないのに。きっと彼は、そうすべき立場なのに。

それなのに、氣遣うように守られてさえいるのだ。あたしは。

そして芝居だと疑う根拠はもうひとつあったと、今更気付く。

王族が敵の手に落ちれば、早々に処刑されるものだ。ヴィンセントの言を信じれば、父が丁度そうだったように。下手に生かして置くと、反乱の種になり兼ねない。

石の為にあたしを処刑しないのは仕方ないとして、だが何も礼遇する事はないのだ。ドレスを用意したり、ランチに誘ってみたり。

これが芝居でなくて本物の侵略だとしたら、心底どうかしている。

\*

そしてそれは牙の主とランチを共にした翌日の事で、朝でも昼でもない頃合の事だ。

あたしの前に、牙が現れた。

「コーネリアス様」

ドアを開いたコーディーが、思わずと言ったふうに驚きの声を上げる。

その声で、更にあたしまで驚かされた。当然だ。灰色の牙から訪問を受ける覚えはない。

コーネリアスは昨日と同じ格好のあたしに眼を留めて、苦笑するように薄く笑った。

「別のものに着替えては頂けませんか？」

「あら、いけない？ あたしは囚人だもの。相応しいと思うわ」

学者か文士と言った風情に似合って、コーネリアスは片手にペンと紙の束を抱えている。空いた手で口元を隠して優雅に笑うと、いえ、とやわらかに否定した。

「仕立て屋が待っていますよ、姫君。採寸して、ドレスを仕立てるそうです。閣下のご意向ですから、従って頂きます」

雰囲気だけは優しかったが、逆らうのは許さないと言わんばかりだ。生粋の上級貴族に違いない。この強引なまでの慇懃さは、きつとそつだ。

思わず舌打ちしそうになるのをぐっと堪え、あたしは尖らせた唇で反抗する。

「この服でも採寸には問題ないと思うわ」

「そうですね。ドレスを仕立てる事には異論ない様子で、安堵しました」

灰色の男はにっこりと笑う。

しまった。そこから拒否すべきだった。

どうやら巧く乗せられたらしいと、気付いて今度は本当に舌打ちした。

「あなた、真剣にどうかしてるわよ」

この苦情をやつと本人に言ったのは、夕刻になつての事だつた。あたしはすっかり疲れ切つていたが、一言でも文句を言つてやりたかつた。

採寸にもやたらと時間を取られたが、仕立て屋はドレスの生地やデザインまであたしに選ばせた。選んだら選んだで流行は違つと言ひ出して、決める気がないかのように長引いたのだ。

「酷いな、いきなり」

制止する兵士達を振り切つて、執務室に飛び込むなり言つたあたしに驚きはしたようだ。だがヴィンセントは、すぐに薄い唇だけで笑つて見せた。

丸めた書状を隣のワイルダーに手渡し、短い指示を与えて席を立つ。そしてあたしのほうへ向けた足を、すぐに止めた。こちらから彼へと歩み寄つていたからだ。

正確には、ヴィンセントに近付こうとした訳ではなかつた。傍にある、大きなテーブル。

それに一歩一歩近付くたびに、自分の血が冷えてざわつくのを感じた。

王の執務室では、時に軍事会議も行われた。それは小規模で、密議に近いものではあつたが。しかしその為に、この部屋には沢山の地図と、それを広げる大きな机が用意されている。

今、ヴィンセントが着いていた席は密議の際に王が腰掛ける位置だつた。大きな机には国内の地形を記した地図が何枚も広げられ、何事かを検討した跡がある。

「何を、しているの！」

責めるように言ったのは、恐ろしかったからだ。

この部屋の様子を見て、あたしの頭には予感が芽生えた。薄暗い予感が。

そして答えたヴィンセントは、この予感を裏切つてはくれなかつた。

「エンジニアリック・ブルーの搜索を」

「やめて」

「できません」

「あんなもの、探さないで」

ヴィンセントは何も言わず、腕組みをしてあたしを見下ろした。足に力が入らず、あたしが床に崩れたからだ。

苦しい。苦しい。苦しい！

あんなものの為に、命の価値さえ軽くなる。

きつく締め付けられるようで、思わず押えた胸で浅い呼吸を繰り返す。身を守るように丸めた背中に、どこか厳しい声が落とされた。

「解りませんか」

見上げると、呟くヴィンセントの眉間には訝るふうな皺がある。

「解りません。貴方は最初、あの石を独占するために人を殺したのだと言った。なのに今は、忌むべきものだと言っているように聞こえますよ」

金色の髪が、酷く近い場所で揺れた。まるで唇でも重なるようにあたしの顔を覗き込んで、男は囁く。

「どちらが本心です？ マチルダ」

ああ、あたしはもう、この男に嘘はつけないだろう。

冷たげな薄青い瞳を見ながら、何故だかそう確信した。それとも諦めてしまったと、言うべきだろうか。

若く、恐ろしく、美しい男。それを前に、自分がとても小さく、とんでもなく無力な存在に思えたのだ。

泣きたいような心持ちで、ようやくと開いた唇は少し震えた。

「……あなたを殺せば、秘密は守れるかしら」

「守るに値するのなら、この命も懸けましょう」

甘い言葉を吐く男だ。

それは閨を共にする男女の甘さではなかったけれど、間違いなくあたしを誘惑する言葉だった。

(七)

(七)

「略奪したのよ」

あたしの吐き出した言葉に、ヴィンセントはさっと顔色を変えた。これの意味する所を、瞬時に察してしまったようだ。勘のいい男は、話が早い。

「奪い取ったと？ あの石を。では、鉋脈は……」

「少なくとも、あたしは知らない。発見隊も知らなかったはずよ。持ち主を惨殺して、奪って手に入れた石なんだから」

「貴方は、どうしてそれを知ったのですか」

発見隊を率いていたのはティラスだが、その下にフィニアンと言う兵士がいた。

彼は善良な男だった。兵士と言う職業が酷な程。それがただ欲にまみれた殺戮の罪に、耐えられるはずがない。

石の発見を祝う宴が連日開かれ、友好国にも幾つかの石が贈られた。その後だったのだ。あたしがフィニアンの告白を受けたのは。

「逃げ惑う人々を殺し、血の中から幾つもの石を拾い上げたそうよ。男も女も、子供も老人も区別なく殺したの」

「何故、そんな真似を。殺さずとも、それこそ鉋脈の位置を聞き出せばいい」

あたしは首を振る。

石を持った人々が、鉋脈を明らかにする事はありませんでした。

「同じだったのよ、その人達には。死ぬ事も、秘密を明かす事も。きつと同じ」

「ちょうど、貴方が命を懸けた様に？」

困惑だろうか。ヴィンセントは恐いような、そしてわずかに悲しげな顔であたしを見た。

「……いいえ」

否定するのに、少し迷った。

あたしが彼等を殺したのは、鉋脈が存在しないからこそその事だ。もつと多くを差し出せと王が命じれば、ティラスはすぐにも取って返して殺戮を繰り返すはずだった。石を手に入れる為に。

それは極めて恐ろしく、耐え難い辱めだ。王は危うく、自らの玉座を血腥い宝石で飾るところだったのだ。

そしてティラスがこの罪に手を染めたのは、他ならぬあたしの存在が理由だった。

頭を振って亡霊達を振り払うと、ヴィンセントに向けて言う。

「命を捧げたのは殺された石の民と、あたしが殺した十三人よ。善くも、悪くもね」

秋の夕陽はすっかり落ちて、室内には灯火が揺らめいていた。

金色の髪と真白い肌がその中で、橙に染まる明かりの為にわずかに温かな色を帯びて見える。

あたしは眼を背けた。

薄青い眼が真実を探り、いつまでもあたしを責めているように思える。

真相を知られるのが恐かったのだ。胸の内まで射るように見られて、その場を離れてもヴィンセントの瞳が頭から離れなかった。

そのせいだろうか。あたしは真夜中になっても眠れずにいた。

シーツを跳ね飛ばし、ベッドから降りる。ひやりとした石の感触が素足に触れた。

明かりは落としてしまっていたが、降り注ぐ月影に窓の格子が床にくっきりと映し出されている。お陰で何かを蹴飛ばす事なくテラスに出られた。

どこまでも広がる夜空を見上げ、ヴィンセントの事を考える。

石の搜索を諦めてくれただろうか。

そうしてくれたらいい。

あたしは願ったが、同時に頭の反対側ではそれは無理だろうとも

思っていた。

ヴィンセントは、王の代理でここにいる。この侵略の目的がエンジェリック・ブルーである以上、將軍といえども搜索を打ち切る権限は持たないと考えるべきだ。

そんな事は解っていたのに、一部とは言えどうしてあたしは秘密を打ち明けてしまったのだろうか。

これが信頼？ ヴィンセントが欲しがると信頼を、あたしはもう与えてしまったのだろうか。そしてそれが、判断を狂わせたのか。

ずっと地下牢にいた為に、夜を感じるのも久しぶりだ。これ程月が明るいと言うのに、夜と言うだけでこんなに心細いものだっただろうか。

冴え渡った月影の中で、あたしは凍えたように震える息を吐いた。そこに。

「よオ」

男の声。

悲鳴を上げなかった自分を褒めたい。

実際は、声も出ない程に驚いただけだが。それに後から考えれば、思い切り大きな声を上げるべき状況だった。真夜中に、自室で男の声を聞く。未婚の身にはあり得ない。

それに唐突に掛けられたその声は、酷く近くに感じられた。あたしはすっかり狼狽して、慌てて部屋に飛び込もうと踵を返す。

そこを捉われた。

背後から抱き締めるような格好で、あたしの腕を掴み、口を塞いだ。せめて姿を確かめようと体を擦るが、がっしりとした肩が見えただけだった。肩の位置があたしの背丈程に高いのだ。

だが、その肩に掛かる擦り切れた上着には覚えがあった。

「頼むから、騒ぐなよ」

冗談でしょ？ と、態度で示す。

あたしは狙いを定め、男の足に勢いよく踵を落とす。こちらは裸足で、あつちは硬い皮のブーツだ。大して痛くもなかっただろうが、



反撃されるとは思わなかったのだろう。驚いたのか、反射的に緩んだ手を強引に引き剥がす。

「ワ……」

「頼むよ！ ヴィンスに殺される」

振り返って開き掛けた口を、慌てて塞ぐ。そして情けなさそうに眉を下げ、男は潜めた声で懇願した。

何をしているんだか。

あたしは大きな手で口を塞がれたまま、ワイルダ―を睨み付けた。「テラスをよじ登ってまで、何のご用？ それも、こんな真夜中に」

解放の条件が大きな声を出さない事だったので、囁くように問い掛けた。ワイルダ―は悪びれた様子もなく、にっと笑う。

「逃がしてやるうかと思つてな」

「……はっ」

失笑か、嘆息か。

自分でも解らない。不意を突かれて短く吐き出した息は、しかしワイルダ―を傷付けたらしい。拗ねたみたいに念を押す。

「本気だぞ」

「信じる訳ないでしょ」

こんな事を言う為に、わざわざ登って来たのだろうか。三階まで、外壁を。

「いい加減な人ね。北限の獅子を支える牙はどんな人かと思つていたけど」

「ガツカリ？」

「ええ」

言い切ると、前屈みに伏せた頭で束ねた髪がぴょんぴょんと揺れる。笑いを噛み殺しているらしい。

「でも、コーネリアスもイメージと違うわね。あの人は、武官と言うより文官みたいだわ」

「何だ。アイツは強いぞ。いつつも手紙なんか書いてるから、軟弱か？」

不思議そうなワイルダーに、あたしも首を傾げる。確かに、コーネリアスはいつも紙とペンを抱えているが。

「あれってお仕事じゃないの？」

「違う、違う。故郷に残した婚約者に、手紙書いてんだ。それも毎日」

「まあ、そうなの。誠実な人ねえ」

「さア、どうだかな。さつさと嫁にしちまえばいいのに、ずっと婚約したまんまだぞ？ 誠実か？ それに誰もその女に会わせねエから、よっぽどの醜女だろうって……」

「ワイルダー？」

呼ぶと、慌てて口を噤んだ。声に含んだあたしの怒気を感じ取ったようだ。

「気まずそうに頭を掻いて、短く謝る。」

「すまん。怒らせに来たんじゃなかったな。さア、姫さん。どうする？」

「何を？」

「呆れたな。もう忘れたのか？ 逃げるかどうかって話だよ」

「呆れたのはこっちだった。」

「だから、何であたしを逃がすのよ。筋が通らないわ」

「通るさ。こっちは、アンタに邪魔されちゃ困るんだ」

時間が止まったのかと錯覚する。

テラスの手摺りにだらしなくもたれ、月を背負っているせいで表情は影に沈んで見えなかった。

あたしはそれを見詰め、ワイルダーも口を開かない。どれくらいそうしていたらどうか。不思議な事に、黙っているとふつつつと腹の中に怒りが湧いた。

邪魔？ あたしが？

この国に取って、占領軍である彼等以上に邪魔なものなんてあるはずなのに？

邪魔なのは、そっちでしょ。そう思ったら、もう止めるのは無理

だった。

「何が邪魔よ！ 冗談じゃないわ。言って置くけど、あたしがねだつた事なんてひとつもないわよ！ ドレスも、ランチも、この部屋も！ 何なら、今から地下牢に戻りましょうか？」

そこまで一息に言ったところで、我に返る。ワイルダ―は困つたように笑って見せて、さつと手摺りの向うに飛び降りた。三階だ。こつちが青褪める。

急いで下を覗き込もうと、テラスから身を乗り出す。と、あたし  
の声は部屋の外まで聞こえたらしい。異変に気付いて部屋に飛び込  
んで来たコーディーが、蒼白になってあたしを止めた。

「早まつてはいけません！」

どんな誤解を受けたのか、考えるのもうんざりだ。

(八)

(八)

翌朝になつて、ヴィンセントから直々のお説教を受ける。

こう言つては何だが、正直飽いた。前夜は前夜で両目に涙を滲ませた若い侍従に、半分怒つたみたいなお説教を受けていたのだ。

誤解を解こうにもこつちの話は聞いておらず、困り果てた末、あたしにできたのは「はい、はい」と真剣な顔で頷く事だけだった。

因みにあたしが今身を包むのは、あのボロボロの服ではなく、ドレスでもなく、裾と袖の長いワンピースにベストを合わせた一般的な町娘の格好だ。コーディーが用意した。はいはいと適当に頷いていたら、これを着る事になつていた。謀られた、かも知れない。

昨夜の内にコーディーが報告していたらしい。朝一番に呼び出されるなり、あたしは落ち着く間もなく直立で叱られる事になった。不本意だ。あたしのせいじゃないし、飛び降りたのもあたしじゃない。

余程ワイルダーの訪問を告げ口してやろうかと思つたが、思い留まる。ヴィンスに殺される、と言つた顔を思い出したからだ。あれはちよつと、冗談と思えないものがあつた。

この状況の元凶はしかし、ヴィンセントの少し後ろに素知らぬ顔で控えている。ワイルダーは怪我もなさそうで、それもまた気に入らない。不利益をこうむっているのは、あたしだけじゃないか。

あなたが無事でいられるのは、こうしてあたしが黙つて上げてるからなのよ。解つてるでしょうね？

せめてそんな視線を送つてみたが、届いているかどうかは怪しかった。飄々とし過ぎて、表情が読めないのだ。

実際はただの親切心で黙っている訳ではなかったから、恩義を感じて貰えないと少し困る。一方的に売つた恩を盾に、何とか聞き出

せないかと考えていたからだ。

ワイルダーが、何故あたしを邪魔だと思うのか。

この人は多分、自分なりに理屈があつて、それで納得しなければきつと指一本動かさない。そう言う男だ。

それが、あたしを排除する為に動いた。邪魔だからと、殺すのではなく逃がしてしまえと。

その理由を訊いてみたい。

「とにかく、もう二度と危険な真似はしないと約束を」

最後に、ヴィンセントは強く言った。

それはもつともな言葉だったが、果たして侵略軍の将が、亡国の王族に向けて言うべき言葉だろうか。

まるで、親が我が子に言い含めてでもいるようだ。お互いの立場として絶対におかしいと、少し悩む。釈然としないまま上げた視線が、ワイルダーの藍色の眼にぶつかった。

その瞬間、昨夜からのあたしの疑問はすっかり溶けてなくなった。

……ああ。

ああ、そうか。

あの気ままな男が、翳った瞳であたしを見ていた。すぐにその暗い表情は消えてしまったが、理解するには充分過ぎる。

ヴィンセントだ。

ワイルダーの理屈の基準。行動する動機は、全てヴィンセントに帰結する。

そう言う事なのだろう。だから彼があたしの身を心配した時、ワイルダーは疎ましげな眼を向けた。あたしの存在が、ヴィンセントを躓かせるとも言うように。

あたしをヴィンセントの傍に置いてはいけないと、ワイルダーは考えているのだ。

「マチルダ？」

「……ごめんなさい、何だったかしら」

訝しげに呼ばれて、やっと自分がぼんやりと立ち尽くしていた事

に気が付いた。

ヴィンセントは探るふうな眼をこちらに向けたが、問い質そうとはしなかった。代りのように、執務室のドアを開く。

「途中までお送りします、と言ったんです」

部屋の隅では憂える牙が、主の言葉に密かにため息をついた気がする。

「庭に寄りたいわ」

ふと思いついてそう言った。

回廊を支える柱の間に、庭が見えたからだ。

ヴィンセントは、用事の手いでに送ろうと言ったようだった。そしてあたし達の後ろには、赤毛の護衛と鎧の兵士が二人いる。だからあたしはここに残り、ヴィンセントはクライヴと行ってくれればよかったのだ。虜囚を一人にするのは拙いだろうが、監視役に兵士を残せば問題ない。

なのに、彼も一緒に庭に降りた。

高い位置にあるその顔を、あたしは眉を歪めてポカンと見上げる。理由がさっぱり解らなかった。

朝のやわらかな陽光の中、秋風がふわりと頬を撫でる。

それはグレーの生地で仕立てたヴィンセントの上着に入り込み、膝程までの裾を緩やかに揺らす。

背中で腕を組み、わずかに首を傾けて男はこちらを見下ろした。

解らないと言っよりむしろ、どうかしたかと問うかのようだ。

彼は腰に剣を帯びてはいたが、鎧は着けていない。上着と揃いのズボンと黒の長靴にきっちり収め、黒いベストの上に緩くタイを垂らしている。

戦場に出るべき装いではない。その為だろう。まるで自国の貴族と庭の散策にでも出るようだ、あたしは錯覚してしまいそうに思った。

何か言いたかったが、何も思い付かない。短い息を吐いて喉まで出掛かった罵倒を捨てると、石垣にあの木戸を探した。

「ここは、特別な場所ですか？」

木戸を潜った先は、小さな庭だ。外と同様に荒れており、特別と  
言う趣ではない。

なのにヴィンセントがそう訊いたのは、あたしがこの庭を訪れる  
のが二度目だからだろう。

「母の庭よ」

ゆっくりと答える。

と、庭に向けた眼の端で金色が揺れた。あたしの隣で同じように  
庭を眺め、男は陽の光を眩しく受けてそつと眩く。

「そうでしたか」

眼を閉じれば、父が母の為に整えさせた美しい庭の風景が見えそ  
うなのに。どちらに眼を遣つても、生きた植物は雑草しかない。

「あたしには思い出があるけれど、あなたには詰らないでしょう」

「確かここは、先日貴方が救出され損ねた庭ですね」

「救出つて言うのかしらね」

牢から出て、一度目に庭を訪れた時の事だ。突如現れた腕に引き  
摺り込まれたが、元々あたしはこの庭に入る為のドアを探している  
ところだったのだ。

「バツカスと言いましたか。あの男の事を、少し調べさせました」

「ただの下男よ」

警戒する必要はないと、そんなつもりで言った。すると、ヴィン  
セントは驚いたふうに薄青い瞳をあたしに向ける。

「ご存知ないのですか」

「バツカスの事？ 何を？」

「あの男は、足が悪いでしょう」

「ええ」

それはよく知っている。

バツカスは左足を庇うから、左右で足音の歩調が違った。

ヴィンセントはあたしから眼を離し、言葉を続ける。

「足を悪くしたのは、この城に上がってからだそうです。地下牢に

閉じ込められた姫に同情的で、その度が過ぎると軍から厳しい調べを受けたとか」

代りに、あたしが隣の男を見詰めた。

淡々と語るその横顔を。

「……初めて聞く話だわ」

「本当に？ 足を潰されてからは隠していた様ですが、彼は最初から貴方に好意的だったらしい」

そんな話は知らない。

バツカスからも、一言だって。

「知らないわ」

横顔から逸らした視線を、足元に落とす。

あたしの表情が険しくなった事に、ヴィンセントは気付いただろうか。

「バツカスが城に上がったのは、あたしが地下牢に遣られてからのはずよ」

あたしを知っていた訳はない。そんな下男が、軍が疑うような事をするはずがないのに。

「足を潰すなんて……」

そうした人間はこの場にいないが、あたしの声には非難の響きの色濃く滲んだ。

「ですが、疑わしいのは事実でしょう」

意外な言葉に、あたしは再び眼を上げた。

疑わしい？

「事件以降、誰もが貴方を恐れていたはず。あらゆる意味でね。女性の身で、戦い慣れた一個小隊を一夜で殺し尽したのだから無理もありません。しかしだからこそ、何の関わりも持たない者が貴方に同情するとは考え難い。そうは思われませんか？」

「いいえ。それは違うわ」

それは、事情を知った者の考え方だ。

城内の人間は、確かにあたしを恐れただろう。この城の中で、あ



たしは余りに多くを殺したから。

けれども父は、全てを隠した。それが石に関わる事だった為に、あたしが臣下を殺した事実は隠蔽されたのだ。

だから事件の後で城に上がったバツカスに、それを知る術はない。地下牢にいるのは殺人者ではなく、さしたる理由もなしに幽閉される憐れな姫と、彼の眼には映ったのかも知れなかった。

この考えを述べると、ヴィンセントは呆然としたように、驚きを隠さず再びあたしに視線を合せた。

「そう信じておられるのですか？ 事件の噂は一切、城郭の外に出ていないと」

「そんな事、父が許さないもの」

当たり前だと答えると、ヴィンセントは黙り込んだ。

しばらくして、彼は口元に遣った手の中にため息をつく。

零すように小さな声で言ったので、聞き間違いだと思った。

「余り、愛しい事を仰らないで下さい」

そして、自覚はしていないだろう。

ヴィンセントはこの言葉を言い終えるまでのわずかな時間、心臓が止まりそうな程に優しい顔を垣間見せた。

あたしは、眼を逸らす。

「……違うと思うのね」

「事実、秘密が守られていたなら私は今ここにはいなかったでしょう。噂と言うのは、御する事のできないものです。それが金や醜聞に繋がれば、尚の事」

では、バツカスはあたしの事を知っていたのだろうか。だとしたらヴィンセントの言う通り、その好意には理由があると考えるべきだ。

「私でも、彼を疑います」

「そうね」

「リシェイドの兵が完全に制圧した城内に忍び込んでまで、貴方を連れ去ろうとした。これは尋常な事ではありません。余程の理由が

あるのでしょっ  
「

その余程の理由と言つものに、あたしは心当たりがひとつしか  
ない。

バツカスもまた、石の為にあたしに近付いたのだろうか。

(九)

(九)

数日して、ドレスの仮縫いの為に仕立て屋が訪れた。

コーディネーに引き摺られるようにして彼等の待つ部屋に向かっていると、赤毛の護衛と灰色の牙を伴ったヴィンセントが通り掛かる。「仮縫いですか」

「そうよ。どこかの將軍の道楽に付き合されてね」

こちらはうんざりと、不機嫌に言った。それに対し、白い顔は片眉を持ち上げただけで変化に乏しい。そのはずだ。

なのにどこか、嬉々として見えるのは気のせいだろうか。

「何が面白いのかしら。そちらはずっと貴族だろうけど、あたしは十年も虜囚だったのよ。今更ドレスなんて、うざったいったら」

ぶつぶつと文句を言うと、ヴィンセントとコーネリアスは意味ありげに視線を交した。それは張り詰めたものでなく、苦笑しているかのようだ。

婚約者への手紙だと言う紙の束を抱え直し、灰色の髪を揺らしてふふと笑う。

「お褒めの言葉を頂きましたね、閣下」

「その様だ」

あたしを促して歩きながら、ヴィンセントはさらりと語る。

「私は庶子ですから、ずっと貴族と言う訳では。十五の年で父に引き取られるまで、母と一緒に宿屋に住み込んで働いていましたよ」  
「下級貴族の妾腹など、そんなものです。と、大した事ではないように彼は言葉を続けた。」

この話は、あたしを酷く驚かせる。

庶子と言うのは本妻ではなく、妾の子と言う事だ。

貴族が外に女を囲うのはよくある話で、珍しくない。驚いたのは、

十五と言つ年齢だ。

遅過ぎる。その年から学んだのでは、教養や礼儀作法を身に付けるのも容易ではないだろう。本来、貴族の教育と言つものは産後すぐ乳母に手渡された瞬間から始まるのだ。

しかもヴィンセントは、十七で騎士に取り立てられた。貴族の家に入つて、たつた二年で抜擢を受けたと言つ事になる。

足を運び、彼は頷く。

「ええ。ですから、ワイルダーが師なのです」

働いていた宿屋の客で、武芸で世を渡っていたワイルダーに教えを乞つたのは幼い頃の事らしい。ならば引き取られた時点ですでに、武芸の素養はあつたのだ。

「父が私を引き取つたのは、血を絶やさなためでした。家を継ぐはずだつた兄達が、相次いで亡くなつたのです。私は最初から、期待されてはいなかつた」

「そう……」

漠然と思ひ込んでいた。

生まれた時から貴族の家で大切に、そして厳しく育てられたのだと。何の疑問もなく。

この内心を知つてか知らずか、ヴィンセントは薄い唇をほんのわずか微笑ませて言つた。

「だから、貴族らしくするには随分と苦労したな。生来の貴族に見えたのなら、よかつた」

「お父様も、まさかこんなに出世するとは思つてらつしやらなかつたでしょうねえ」

彼は軽く吹き出すようにして、これを笑い飛ばした。

あたし達より少し先を歩くコーディーが、ドアを開く。室内に数人の人影。

仕立て屋だろう。

そう思いながら眼を遣つて、次の瞬間にはドアノブを握つた小柄な侍従を突き飛ばしていた。

室内の人間はあたしに気付き、慌てて駆け寄る。だがほんのわずかこちらが早く、止められる前にドアを閉じる事ができた。

ドンドンと、扉を打つくぐもった音が内側から響く。このままでは、すぐに決じ開けられてしまうだろう。

つま先の触れそうな位置に、コーディネーが尻を着いて半ば呆然と驚いているのが眼に入る。そのベルトから、短剣をひったくるように鞘ごと抜き取った。

この挙動に、クライヴがさつと身構える。切られるかも知れないなど頭の端で考えながら、急いで両開きのドアの取っ手に短剣を差し込んだ。コの字形のノブ二つに、門の横木のように差したのだ。

つまり室内にいる人間を、通路側から閉じ込めた事になる。

見るからに良識家のコーネリアスが、呆気にとられながらも口を開き掛けた。この無作法な行いに何か言いたい気持ちは解るが、あたしだつて焦っている。

だから何を言われるより先に、塞いだドアを指差して上擦った声で喚いた。

「あの馬鹿を城に入れたのは誰！」

ヴィンセントに、コーネリアス。それからコーディネーとクライヴが、その場にいた。

この顔触れが一齐に首を傾げると言う貴重な光景は、もう二度と見られないだろう。面白すぎる。こんな状況でなければ、大笑いするの。

沈黙を破ったのは、クライヴのぼそりとした声だった。

「わざわざ呼んだ仕立て屋だ。通すだろ」

彼は護衛らしく、ヴィンセントの傍らで油断なく剣の柄に手を掛けていている。その赤い前髪に隠れた琥珀の眼を見ながら、あたしは唇を尖らせた。

彼が指摘したのは、問題の本質ではない。

「仕立て屋なら、ね。言つて置くけど、今この部屋の中に先日仕立て屋はいないわよ」

「まさか。コーディー？」

灰色の長髪を揺らし、コーネリアスが振り返る。翡翠の瞳を向けられて、若い侍従は蒼白になった。この来客は彼が招き入れたらしい。

「……申し訳ございません。エントランスで迎えた折に、皆が大きな荷物を抱えていて。生地や何やで……」

顔はよく確認できなかったのだろう。

青褪めた顔で、自分の失態が信じられないと言ふふうには呆然と呟く。そして事態をゆっくりと理解すると共に、眉を歪めて固く瞼を閉じた。後悔が、彼の胸に染みて行くのが見えていても解る。

そのコーディーから眼を移し、ヴィンセントが問う。問いながら、あたしの背中に手を添えてさりげなくドアから離れさせた。

「では、誰です？ 心当りがおありの様だ」

「その通りよ。知った顔がひとりいたわ」  
唇を噛む。選りによって、あの男が現れるとは。

武装した兵士がばらばらと駆け付けて、コーネリアスの指揮で包囲したドアに入ろうとしている。先程、コーディーが開いた戸の中に見た人影はせいぜい五、六人。部屋の前に待機する兵士は、軽くその三倍はいるだろう。

当然こうなるだろうと言う事が、解らないのだ。あの人は。

「マチルダ？」

促されて、あたしは頭を押える。余りに腹立たしくて、鈍い頭痛を覚えた。

「従兄弟よ」

そして、あたしよりずっと以前に捨てられた王族だ。

あたしとヴィンセント、そして彼の護衛であるクライヴは薄暗い廊下の端に立っていた。避難措置だ。少し離れた場所では、ちよつとした乱闘騒ぎになっている。兵士達がドアを開け、中の人間を捕らえようと抜き身の剣を振るっているからだ。

ヴィンセントは表情をスツと固くして、クライヴの顔をチラリと

見る。不思議だ。軍人と言うのはどうしてか、視線ひとつで酷く巧みに会話する。

「それは王の血筋と言う意味でしょうか」

「そうね。グレンは父の姉の子供だから」

「この城を占領して、我々が最初にしたのは王の血筋を残らず調べる事でした。ですが、グレンと言う名は……」

王族を逃がせば、後に反乱の核になり兼ねない。だからそれは、徹底的に調べられただろう。それなのに、グレンを見付ける事はできなかった。彼等はそれを不審がったが、こちらにすれば当然だ。うんざりと、あたしは深いため息をつく。

「グレンと言うのはね、二十年近くも昔に謀反に失敗した男なの。逃げおおせたはいいけれど、見付かったら即刻打ち首のお尋ね者になってしまって。恥が多いと言うので王の系譜から除名したのよ。王自ら、正式にね」

「恥？」

「驚異的に愚かなの」

いっそ軽い感動を覚える程だ。

この返事には、短く問うたクライヴが激しく息を吹き出した。体を折り曲げ、声を殺して震えている。笑っているらしい。

「謀反の理由は確か、父が左手でナイフを使うのは悪魔に魅入られているからだって主張だったわね」

父は生来左利きで、食事の時にはいつも左でナイフを扱っていたのに。

「宴の席で急に言い出して、誰も相手にしなかったのよ。そうしたら臣下も全て悪魔の手先に堕ちたと言って、後日城に攻め入って来たの。二個小隊にも満たない数で」

あたしが指で二の数を作ると、金と赤の主従は顔を背けて揃って肩を震わせた。

視線を移すと、あちらではすでに室内の制圧が終了しようとしている。廊下には、仕立て屋に扮した男達が腹這いに転がされている

のが見えた。

今回だって、たったあれだけの人数でどうするつもりだったのだろう。何をする間もなく捕まると、少し考えれば解りそうなものだ。でも、そこで踏み止まると言う選択肢を持たない。そんな考えあるなら、そもそも謀反なんか起してはいないだろう。

「ほんつと馬鹿」

呟く。

あたしの声は通路の一端からしか光の入り込む余地がない為に、もう一端に薄く凝った影の中にただ消えてしまっはすだつた。

けれどもそれは、影の中から現れた。

「自らの保身が為に、国を売ったか」

しまった。

真後ろからの声に、あたしは弾けるように失態を知った。

振り返る。

煌く白刃が薄闇を裂いて、あたしに向かって振り下ろされた。



(十)

(十)

愚かな男だと思った。

グレンは恐らく、ヴィンセントの命を狙っているのだと考えていたからだ。

けれども殺しに来たのがあたしなら、それは悪くない計略だった。この侵略があつたのを目的とするのなら、その正体を知る唯一の間が消えればどう？

意味がなくなりはいしないだろうか。

あたしの死と共に、エンジェリック・ブルーを今度こそ葬る事はできないだろうか。

「クライヴ！」

鋭い声が、その名を呼ぶ事で端的に命じた。

視界一杯に赤い色が広がって、それは目の前に背を向けて立つ。

あたしと、剣を振るうグレンとの間に割って入ったのだ。全身の血が、一瞬の内に冷えるのを感じる。これではまるで、あたしを守っているようではないか。

それとほぼ同時に背後から引かれ、あたしはヴィンセントの胸にぶつかった。

剣の交わる音がする。

駄目だ。

グレンの鉄剣、それも鋼と打ち合せているクライヴの剣は、明らかに青銅。交わること刃が折れ、今にも折れそうに悲鳴を上げる。これではもたない。

人には何かしら取り柄と言うものがあるらしく、グレンの太刀筋は見事と言う他にない。クライヴは護衛だ。それも北限の獅子を守る為の。だから勿論、剣の腕は確かだ。しかし二十年も野にあって、

否応なく磨かれたグレンの剣は、ただただ強い。

あたしを自分の陰に押し遣って、ヴィンセントもまた剣を抜いて備えた。

カシユ、と。

異質の音が妙に静かに耳を打つ。

剣の交わる音がぱたりと止んで、剣先が石の床を打って響く。クライヴの剣だ。しかし彼はまだ、手にしっかりと剣の柄を握っている。それは剣刃の中程から、すぱりと二つに分たれていた。

折られたのですらない。さっきの音は、鋼の剣がそのしなやかな鋭利さで青銅を二つに切り分けた音だった。

護衛の喉を捉えて空を裂く切っ先を、一足飛びに駆け付けたヴィンセントの剣が払う。守るべき相手に庇われて、クライヴは悔しげな歯噛みを隠さずに二人から飛び離れた。

クライヴは若い。恐らくヴィンセントよりも年下だろう。経験の浅い護衛には、強さだけが存在意義だ。その矜持が一瞬で打ち砕かれたのが、痛い程に解った。

あたしもまた、唇を噛む。明らかにヴィンセントの分が悪い。彼の剣はクライヴと同じく青銅だ。折られるのならまだしも、グレンはこれを切り取ってしまう。そうなれば激しく打ち合えないだけでなく、剣刃を力で押し合う鏝迫り合いさえ避けなくてはならなかった。

これは実力がどうと言う話ではない。武器の格が違い過ぎるのだ。敵に劣らぬ武器が必要だ。

例えば、鋼の。

思った時には、体が動いていた。はっとしたように、クライヴの手がこちらに伸びる。止める為だ。それをよけ、二本の剣が閃く横を身を低くして擦り抜ける。そしてあたしは廊下の端、グレンが現れた影の中に飛び込んだ。

あたしが何をしたか、正確に理解したのはグレンだけだったはずだ。彼は受け継いだ王族の血の為に、王城の秘密を承知していた。

飛び込んだ影の先は、細い通路だ。たつぷり布を使ったドレス程ではないが、広がったスカートの裾が左右の壁に触れて音を立てる。本当に、人ひとり通れる程度の幅しかない。

これは人知れず城内に張り巡らされ、どこにでも行く事ができた。金貨を詰め込んだ宝物庫にも、王が眠る寝室にも。ただしこの秘密の通路が使えるのは、王の血筋の者だけだ。

窓のない通路だが、明かりは要らない。通路の石壁は組み方に工夫があつて、石と石を微妙にずらす事でそうと知れずに外の光を取り込んでいるのだ。

あたしは急いで通路を駆ける。

突き当たりを左に行くと、すぐに左右の幅が膨らんだ小部屋のような場所に出る。その壁には剣や弓が所狭しと、飾るように掛けられていた。

その中から、ヴィンセントやクライヴに合いそうな剣を取る。腕の長さを考えて、ヴィンセントには少し長めのものを選んだ。

剣を手に急いで戻ろうとしたあたしの眼に、漆黒に塗った弓が留まる。壁に掛かったそれに指先を這わせ、弓弦を弾く。と、それは脆くぶつりと切れた。

踵を返し、元の道を駆け戻る。

「ヴィンセント！」

通路から飛び出すなり、呼んで手の中の剣を投げた。はつとしたように、彼は鉄剣を受け止める。

長くは待たせていないはずだが、剣を打ち振るっていればそんなものだろう。剣先を介して睨み合う二人は、その緊張を示すようにびっしりと汗をかいていた。

グレンの横顔が、怒声を放つ。

「お前は……どこまで祖国を裏切るつもりだ！」

戻ったあたしを、泣きそうな顔で待ち受けたコーディーが抱き締めた。解ってしまっただろうか。顔に出したつもりはないが、グレンの叱責はさすがに痛い。

だが、その通りだ。敵將に武器を渡す事は、背信以外の何者でもない。

コーディーをくつつけたまま、あたしはもう一本の剣でクライヴをつつく。

「あげるわ」

この剣で、主を守りなさい。そう言うつもりだったが、少し遅かった。

高い音。鋼の爆ぜる音だ。鋼はしなやかで粘りのある特性故に、小さな爆発を起したように衝撃を伝えて震えながら折れる。

取って返す白刃一閃。ヴィンセントの剣が、グレンの胸を正面から裂いた。

背後で、男達が悲鳴めいて呻く。すでに拘束された、彼の仲間達だろう。

剣を帯びた兵士が数人駆け寄って、膝を突いたグレンを囲む。取り落とした剣を蹴って離し、後ろ手に縄を掛けた。腹を真横に切られてはいるが、死ぬような傷ではないのだ。

「浅いわね」

「戦い慣れているらしい。咄嗟に身を引いたのでしょう」

確かに切られる瞬間後ろに下れば、傷は浅くて済む。頭で解つても、実際それができるかどうかは別の話だが。

あたしの声に、ヴィンセントは自ら手にした剣刃を見詰めつつ応じた。

しばらくしてやっとこちらに向けられた顔は戸惑うふうで、少し困っていたのかも知れない。

「見事な剣です」

「そりゃあ、王の為に鍛えられた鋼だもの」

言つと、いよいよ困り果てた顔になった。

「……裏切り者め」

石畳に引き倒された格好で、グレンが忌々しげにあたしを見た。その傍に屈み、顔を覗き込む。

「違うわ、グレン。裏切る事ができるのは、信頼された者だけだもの。あなたは、あたしを信じたりはしてないでしょう?」

「相変わらず小賢しい。悪辣なるを隠して王に取り入ったように、今度は敵方に擦り寄っておるのか」

「久しぶりに会ったのに、他に何か言う事はないの? お互い、嫌な年の取り方しちやっみたいね」

「一緒にするな! 我は祖国の未来を憂えればこそ、こうして立ち上がったのだ!」

「そうね」

同意を示すと、本人だけでなく周囲の人間は全て驚いたように眼を見張った。

「あたしを消そうとした事だけは、褒めてあげる」

「マチルダ! 滅多な事を」

「だって、そうだわ」

屈んだまま、ヴィンセントを見上げる。

「あたしが死ねば、リシエイドは目的の半分を失うもの。もう半分は製鉄だけど、これはアイディームの人間あつての技術でしょう。」

そうなつてしまえば、占領軍が民を虐げる事はある得ないはず」

「……いいえ。貴方がいようがまいが、アイディームの国土はもはや我が国の財産です。そこに住まう人間を、虐げはしない」

「そう願うわ」

固い表情で言うヴィンセントに、あたしは薄く笑って見せる。

それは、国家としての方針だろうか。それとも、ヴィンセントだけの方針だろうか。あたしには、疑問だった。

怪訝、と言うべきだろうか。

床の上に視線を戻すと、グレンは不審そうに眉を歪めてこちらを見ていた。この顔は、まさか。

「あらっ?」

あたしは口を指先で押える。予想外の事で、思わず大きな声になった。

「何を言ってる？ 我の狙いは獅子の首だ。国の頭を討ち取った者が、次の玉座に着くものと決っておるからな。お前はそこにおったから、ついでだ」

四十にもなるうかと言う男が、こんな事でよく今まで生きて来られたものだと思う。

「ほんつと馬鹿ね！」

侮蔑ではなく、これは怒りだ。期待した自分に腹が立つ。

「ヴェンセントはね、総督なのよ。解る？ 軍人なの。王じゃないの。代りがあるの。総督の首を取っても、後任の軍人が引き継ぐだけなの！」

もつと罵りたいところだが、ぐっと堪えて立ち上がる。そして拘束されたグレンの仲間達に向かって怒鳴った。

「この人に命を預けるなんて、どうかしてるわよ！」

反論はなかった。

(十一)

(十一)

王の血族にのみ許された秘密の通路は、初代の王が築城の折に遠いハルディンマゴから魔術師を招いて造らせた。

魔術の仕掛けは数百年経った今も生きて、王の血を継がぬ者にはそもそも入り口さえも見付けられない。ただ壁の片隅に、廊下の奥に、クローゼットの陰に薄く影が凝っているようにしか見えないそうだ。

その影の内に、細い通路が口を開いている。あたしにはそれが見えるのだけれど。

生来にして通路に入れる者が手を取れば、誰でも中に入る事はできた。だがうっかり手を離してしまうと、途端に迷う。そしてもう二度と見付からないか、出て来れたとしてもその人間は気がふれていた。

「だから、中に入るのはお勧めしないわよ」

「面白そうなのに。つまらんな」

腕組みをして話を聞いていたワイルダーが、落胆した様子で言った。

王の執務室だ。

大きなテーブルの上に、二本の鉄剣が置かれている。あたしが通路から持ち出して来たものだ。

それを囲んで、椅子に腰掛けたヴィンセント。その後ろにクライヴが控え、獅子の牙は珍しく二人共に同席していた。コーディーが皆に温かな飲み物を配って回ったが、グレンはカップを受け取れなかった。部屋の隅で椅子に固定されていたが、腹を切られているせいで手当てを受けたら中々元気だ。

この状態で一同の注目を浴び、あたしは問い質される事になった。

当然と言つべきだろう。あたしが通路に入った時、彼等には突然消えたように見えただ。それがまたふいと戻つて、しかも手には剣を持っていた。不審がらないほうが、どうかしている。

一通りの説明を聞いて、面白がるだけのワイルダーと対照的にコーネリアスが問う。

「通路を使えばどこにでも行けると言うのなら、城外へ出る事も可能なのでしょうか」

「勿論、通じてるわ。通路は元々、緊急事態に備えた設備だもの」  
最悪、城が敵に落された時には退路としての役割も兼ねる。城内が戦場になつた場合を想定した上で、あらゆる位置に武器を用意してあるのだ。

コーネリアスが困惑した顔を向けると、ワイルダーは喉を鳴らしてクツクツと笑う。

「王サマの裏道は、そつちのイトコ殿も使えるんだろ？」

「ええ……」

何が言いたいのだろう。

現にグレンは、あたしがドアを塞いで作った密室から脱出している。通路を使わず、廊下にいたあたしの背後に忍び寄る事はできないはずだ。

眉を下げて、ワイルダーが笑い声を立てた。

「だったら、仕立て屋になりすます事なんかなかったらうよ。裏道使つて忍び込んで、ヴィンスに夜襲を仕掛ければよかつたんだ」

言われて初めて、あたしはそつと背筋が冷えた。

灰色の牙がため息をつく。

「狙いが閣下の首だったならば、できたでしょうね。困った事に彼はヴィンセントとグレンの戦いを見ていたから、身に迫るような憂いだつたに違いない。」

グレンの腕は悪くなかつた。もしも寝込みを襲われて、青銅の剣だけで応戦していたらヴィンセントはどうなつていただろう。

恐れと不安と、憐れむような視線がグレンに集まる。



初めて思う。しみじみと、馬鹿でよかった。

「そのような事、承知の上だ痴れ者め！　だが闇討ちなどと、玉座につかんとする者の所業ではないわ。正々堂々討ち取ってこそ正當なるー……正當なるー！」

「グレン。無理しなくていいから」

失策の巧い言い訳が思い付かず、険しい表情で唸り出した従兄弟に首を振る。

「おいおい姫さん。他人事みたいな顔するなよ」

声を噛み殺してあたしを笑う。ワイルダーの言いたい事が解らずに、首を傾げた。

「他人事だもの」

「バカ言うな。姫さんだって裏道使やア、いつだって逃げ出せたって事じゃねエか。ずっとそれ黙つといて、いいタマだよなア」

「あら」

言われてみればそうだ。

城内のどこにでも通じる通路は勿論、ゲストルームにも口を開いていた。

つまりワイルダーの手を借りるまでもなく、あたしはこの城から逃げ出せたのだ。そのつもりはなかったが、素知らぬ顔で騙していたと受け取られても当然だ。

「ほんとねえ。あたし、怒られるのかしら」

「どうする？　ヴィンス」

「どうと言つても……」

急に水を向けられて、ヴィンセントは口籠もった。戸惑うふうにさ迷う視線が、テーブルで留まる。そこに載った二本の剣に。

ふと、思い付いたように言う。

「……とにかく、この剣はお返しするのがいいでしょうね」

「何故？　それは、あなたとクライヴにあげたのよ。使えばいいじゃない」

「申し訳ないが、鉄剣は好みません」

ヴィンセントは席を立ち、背を向けてしまう。その直前、チラリと見た彼の横顔は固く凍り付いてはいなかったろうか。

ふむ、と。

部屋の端で、グレンが小さく息を零した。それはまるで訝るふうだと、あたしは思う。

「でも、北限の獅子を守るのに青銅の剣では不足だわ」

何を考えているか、まるで見えない。あたしは後ろを向いた金色の頭に、真意を試すつもりで言った。

けれども、背中はずう。

「私は、真の貴族ではありませんからね。鋼はどうも身の丈に合わない」

「愚かな事だ」

断じた声はグレンだった。

リシエイドの人間は一樣に気色ばんだが、あたしが驚いたのはその指摘が外れていないと思ったからだ。

椅子に縛り付けられたまま、グレンはふんと鼻を鳴らす。

「獅子と讃えられておると言うに、ただ無分別な子供ではないか。

仮にも一軍を率いし者が、身の丈だと？ 頭は潰されてはならん。

何事があるかと、兵が一人でも残る内は生きねばならん。それが国を預る、民の長たる王の宿命ではないか。道具に怯えて命を軽んじるとは、愚かしい！」

「うん、うん。そうね、グレン。ヴィンセントは王じゃないけどね」

彼に言われるのは気の毒で、そして不本意だが、あたしも同じ事を考えていた。

「駄々をこねないで、ヴィンセント。何をこだわっているのか知らないけれど、あなたの命はあなたの部下全ての命に等しいの。彼等の生死はあなたの采配に掛かっているから。生まれも育ちも関係ないわ。自らを鋼に不相応と言うのなら、相応に生き方を改めなさい」

あたしとグレン。明らかに筋違いの大人二人から説教されて、年若い将軍は反論を飲み込んだ。黙り込んで頭を掻く姿は、本当に子

供みたいだと思う。

ふと、視線があたしの肌を刺した。それはやわらかな棘のようで、先を辿ると藍色の眼にぶつかった。ワイルダーは困り顔で、でも薄く笑って一見するとそうとは知れない。

けれども、先日の事があるからだろうか。これはお前の役目ではないと、責められているようにあたしには感じられた。

その間にも議論は進み、どちらにしる虜囚に武器の管理をさせる訳にも行かないだろうと言う事になった。素人が重い鉄剣を振り回したところで、厳しく鍛錬した軍人には敵うはずがない。だが、自刃はできる。

二本の剣はとりあえず、ヴィンセントの預りとなった。

そして話は、あたしをどうするかと言う議題に移る。

簡単に抜け出せると解った以上、今のままでは拙いだろう。だがこの城の中で秘密の通路が通じてないのは、あたしが閉じ込められていた地下牢だけなのだ。

そこは、グレンの場所になった。

結局あたしは変わらずゲストルームに落ち着いて、この扱いの差を知った従兄弟からは「魔女め！」と悪態をつかれてしまう。

ただし、監視の眼は増やされた。これからは誰かが必ず監視の為に室内に残り、ひとりきりになれる状況がなくなってしまったのだ。それは世話係と言う立場上、自然とコーディーの役目になるだろう。

しかし、大丈夫だろうか。彼はまだ十代の男の子と言う感じで、背丈もあたしと同じくらいだ。ちゃんとあたしを止められるかと、つい心配になってしまう。

この心配を感じていたのはあたしだけではなかったらしく、この部屋には何かのついでを装った来客が増えた。

「ねえ、監視を増やすより、あたしを鎖にでも繋いだほうが早いんじゃないの？」

コーディーの用意した午後のお茶を口に運び、小さなテーブルを挟んでワイルダーに尋ねた。彼は香ばしいコーヒーをふうふうと啜

り、ちょっと考えてから真面目そうな顔を作る。

「ああ、そう言う趣味だったか」

「趣味じゃないわよ。こんなんじゃ、すぐに逃げられるって言うてるの」

「その気があるなら、止めないぞ」

にやりと笑ってあたしを見るが、どうも本気にしてないように思える。

牙が雑談に来たと言うので、コーディーは席を外していた。あたし達が声も潜めずこんな話をできるのはその為だ。

「この間、あの人に……余り愛しい事を言うなと叱られたわ」

言って、窓の外に眼を遣った。

グインセントと、母の庭にいた時の事だ。あの言葉にまさかと思い、そしてやつぱりそうだろうかと揺れてしまった。

「そりゃ重症だ。何を言っただ？ グインスにそんなセリフ吐かせるなんざア、よっぽどだぞ」

「知らないわよ。いきなり言われたもの」

そう言ったグインセントが嘘のように優しい顔付きをしていたので、あたしは却って酷い不安を覚えたのだ。

「ねえ、やわらかになっただと思わない？」

「……グインスが？」

「そうよ。最初、あたしはあの人を恐ろしかったの。特に、あの姿がね。見詰められるだけで、不安になっただわ」

「変ったと」

「思っただ」

ワイルダーはカップを置いて、首を支えるように頭の後ろで両手を組む。天井の辺りに視線を上げて、何でもない事のように言った。

「まア、アイツは姫さんに惚れてるからな。アンタの前じゃ、そうなるんだらう」

「気安く口にしてくれるわね」

「正直なもんでな」

「……破滅ね」

「あア」

ワイルダーが危惧するのはこれだろう。

攻め滅ぼした国の女に心を寄せるなんて、あつてはならない。国事の根幹を固める為に、貴族は婚姻での結び付きを貴ぶからだ。

それでも政治的な力があれば、どんな批判も表立ってなされはしない。だがヴィンセントは軍人で、下級貴族のそれも庶子だ。もしもこれが醜聞にでもなれば、今の地位も危ういのかも知れなかった。「ねえ、ワイルダー。何だか面倒な事になったから、あたしは逃げ出す事にするわ」

あたしはテーブルに頬杖を突き、窓の外を見ながら言った。

(十一)

(十二)

その機会を窺う為に、あたしは数日を無為に過ごした。

今はと言うと、ゲストルームに備え付けのデスクでコーネリアスが書き物をしている。どうやら、婚約者への手紙らしい。

「熱心ねえ」

言いながら、灰色の髪が掛かる肩越しに覗き見る。と、彼にしては珍しく慌てふためいて手紙を隠した。

「姫君！」

「けち。ちよっとくらい見せてくれもいいじゃない」

唇を尖らせ、拗ねたふうに言ってみる。だがあたしは致命的に演技が下手らしく、コーネリアスの翡翠の瞳をわずかに細めさせただけだった。

盗み見るのは諦めて、他の紙束と一緒に手紙が大切にしまわれるのを眺める。

「婚約者の女性はお幸せね。そんなに手紙を下さる男性なんて、珍しいもの」

思った事を正直に言ったが、彼は戸惑うように眼を伏せて言葉を選んだ。

「そう……でしょうか。そんなふうに思っていてくれるなら、良いのですか……」

「ああ、そうね。あなた、随分お相手を待たせてるんですって？ 逃げられるわよ」

「……誰ですか、余計な事を姫君のお耳に入れたのは」  
勿論、ワイルダーだ。

それをばらして叱られるのを見ても面白いかと思っていたら、開け放した入り口に二人分の人影が差す。

「やめてください!」

「ちよーどいいんだって、この高さが」

嫌がるコーデイーの頭に肘を載せ、一緒に入って来たのはワイルダーだ。逆の手を上げ、「よオ」と軽薄な挨拶をよこした。

「やれやれ、口の軽い男のお出ました」

「あら、やつぱり解るのねえ」

あたしとコーネリアスが頷き合うと、二人は話が見えないと言うふうに怪訝そうな表情を見せた。その後ろから、更に声が追ってくる。

「ワイルダー! あんた、自分の立場を解ってるのか?」

それは声を荒げたヴィンセントだった。

普段この人が大きな声を出すのは珍しいので、少し驚いて見詰めてしまう。あたしの視線に気が付くと、一瞬だけ表情を改めて「失礼」と短く断った。だがワイルダーに移した眼は、すでに厳しい。

「師団長なら、それらしくしてくれ。旅団長達はあんたを探し回るのに忙しくて、全く仕事にならないそうだ」

「ちゃんとしてるぞ、オレは。なア、コーデイ」

「知りませんっ」

「いいから早く行け!」

肘の下の侍従にそっぽを向かれ、ヴィンセントに小突かれながらワイルダーは渋々部屋を出て行った。

「あ、閣下!」

見張るうとでも言うふうにはワイルダーに次いで退室するヴィンセントの背中を、コーネリアスが呼び止めた。

「申し訳ありません。兵の宿舎の件でご相談したい事が」

「ああ、任せる」

言葉が終わるか終わらないかの内にあっさりと言われて、コーネリアスは少し面食らったような顔をした。

内容に関わりなく、返答はそれと最初から決っていたかのようなうだ。「問題ないだろう?」

「……承知致しました」

ヴィンセントが去っても、彼は誰の姿もない戸口に向いたまま思考に沈んでいるようだった。

「信頼されておいでなのね」

「だと、良いのですが」

呟きの意味を、確かめる猶予はなかった。テラスの側から、硝子をコツコツと叩く音が響いたからだ。

慌てて駆け寄るコーディーを制し、掃き出し窓を開けながらコーネリアスが窓外の人影に問う。

「何をしている、ワイルダー」

「逃げてきた」

「呆れたな。子供の習い事ではないのだぞ全くだ。」

コーネリアスは言葉通りの呆れ顔で、短く息を吐いてデスクから紙の束を取り上げた。あたしに目礼し、部屋を出て行く。

師団長を探していると言う部下達に居場所を知らせるか、それともワイルダーの代りに仕事をしに行ったか、と言うところだろう。

どちらかと言うと、後者だと思う。

ヴィンセントは、師団を二つ伴ってアイデームに入った。二人の牙がそれぞれ師団長を務めていると言われていたが、ワイルダーがこの調子では実際師団を纏めているのはコーネリアスひとりではないだろうか。

彼には気の毒だが、一方で仕方ないとも思えてしまう。恐らくワイルダーは究極に実戦向きで、こうした状況での細々とした諸事の処理には不向きだろうから。

ヴィンセントも優れた將軍ではあるだろうが、何しろ若い。気の回らない事も多いに違いないのだ。

だからコーネリアスは、あらゆる場面において頼られているはずだった。

なのに、不思議だ。あたしにはあの人、心細さに震えているよ



うに思えて仕方ない。

「いい仲間を持ったわね、ワイルダー。ちゃんとお礼くらいしなさいよ」

「おオ、考えてあるぞ。アイツの結婚式ではオレが全裸で踊る予定だ」

それはお礼なのだろうか。

「コーディー、茶ア入れてくれー」

言われて、あたしの世話係は顔をしかめる。余程ワイルダーが苦手らしい。その様子が面白くて、あたしは笑いながらコーディーに頼む。

「お願い。あたしもお茶にしたいわ」

「はあ、では……」

不承不承丸出しの顔で支度に向かう。その姿が可愛くて、あたしとワイルダーは必死に声を殺して笑い合った。

「で？ 何かご用だったかしら」

「それだ。ちよつといいか？」

お茶を用意するのは中々に手間だ。まず、湯を取りに城内に一か所しかない炊事場まで降りなくてはならない。コーディーはしばらく戻って来ないだろう。

それを承知の上だったのだと、示された先を見て思った。

「姫さんの荷物だ。これだけありゃ、当分は大丈夫だろ」

先程、ワイルダーはテラスから入って来た。マナーの悪い男だとは思ったが、あたしは二回目だったからそれ程は驚かない。

でも、一体いつ用意したのだろう。テラスの端の柱の陰に、大きな袋がゴロリと隠れて転がっていた。

どうやら、城内から逃れた後で必要になりそうな着替えや日用品を揃えてくれたらしい。

「アンタの裏道にでも隠しとけよ。今夜、コーディーに薬飲ませとく。眠ったら、すぐに行け」

「なるほどね。了解、師団長」

勿論からかうつもりで言ったけど、ワイルダーもそれを承知で遠慮なくあたしの頭を小突いて笑った。

言われた通りに秘密の通路に荷物を隠し、部屋に戻ると感心したように迎えられる。

「ほんとに消えるな！」

「そうみたいね、あたしは解らないけど」

通路は常人の眼に映らない為、出入りする瞬間は消えたり突然現れたりして見えるらしい。

ワイルダーは、うずうずと呟く。

「やっぱ入ってみてエ」

「駄目」

「いいじゃねエか！ どうなってんのか見たいんだよ！ 手さえ離さなきゃ平気なんだから？」

「え、ちよつと……馬鹿っ！」

ワイルダーが強引にあたしの手を取ったので、残った腕で慌てて天蓋ベッドに縋り付く。ベッドの縁の四方から突き出た柱は、本来薄布を吊るす為のものだ。大男との引っ張り合いに耐える強度はないだろう。

ギシギシと、今にも壊れそうな音を立ててベッドが揺れる。

「やだつたら！ やめてよ！」

「ちよつとだけだつってんだろ」

「駄目だつてば、無理よ！」

「一緒なら、ムリじゃねエ」

「こんな事……。どうなるか解っているの？ 命を懸けるとでも言うつもり？」

「アンタを離れたら、だろ？ 離さねエから安心しろ」

「あのねえ！」

「……何をしているんですか！」

ガシャンツと陶器の割れる音。次いで、銀のトレーが床に落ちて高い音を立てた。

戸口に立ったコーディーが、ダツと駆け寄って繋がった手と手を引き剥がす。震える腕であたしを抱き締め、両目一杯に涙をためながらワイルダーに言い放った。

「最低です！ 見損ないました……っ！」

「……待て」

誤解だとしても言いたげに伸ばされたワイルダーの腕は、コーディーに払われる。

いい子だ。こんないい子に薬を盛って、騙すような真似をするのかと考えただけで胸が痛む。

そんな事を思っていたら、訂正するのがすっかり遅れた。

ワイルダーはコーディーから思い付く限りの罵倒を浴び、その様は不憫と言うより笑いを誘う。

ここで過ぎす最後の一日は、こうして至極なごやかに暮れた。

そしてこの夜、あたしは何者かの襲撃を受けた。

(十三)

(十三)

眠らずにいた。

監視の為に、壁際の椅子にはコーディーが腰掛けている。彼が眠るのを待って、城を抜け出さなくてはならなかったからだ。

月が細くなっていて、いつかの夜のようにには眼が利かない。全くの闇に近かったけれど、実際はそうではなかった。細い月と星の光が夜の空気にうつすら溶けて、窓から室内に紛れ込む。

そう知ったのは、闇の中に一層深く黒い闇を見た時だ。

テラスに繋がる硝子の扉が静かに開き、闇の塊がその体軀を滑り込ませる。それは人の形をしていた。だが果たして本当に、二本の足で歩いたのだろうか。それは足音もなく亡霊のようにベッドに付き、分厚いマントをはためかす。影の中から男の手が現れて、横たわるあたしの体に伸ばされた。

ベッドから転がり落ちるように逃れるのと、黒い人影がよるめいたのはほぼ同時だ。

「コーディー！」

思わず叫ぶ。

一瞬にして全身が冷えた。眠っていたはずのコーディーが、侵入者に向かって体当たりしたのだ。

あたしは落ちた床から慌てて跳ね起き、ベッドを挟んだあちら側に駆け寄った。そこでは小さな人影が、たやすく引き倒されるところだった。

「お逃げください！」

駆け寄るあたしを責めるように侍従は言っつて、再び侵入者に立ち向かおうと身構える。

コーディーには悪いが、どう見ても無謀だ。相手はこっちよりず

つと大きな体を持って、そして酷く場慣れしていた。

幾らあたし達が非力とは言っても、騒がれたら少しは焦りそうなものだ。なのに、そんな素振りには欠片も見せない。それは余裕のようであり、気味の悪い不安を掻き立てるものでもあった。

騒ぎを聞き付け、兵が駆け付けける事を警戒していないのだろうか。ドアの外には今だつて、二人組の当番兵が立っているのに。

あたしは後ろからコーディーの腕を引き、素早くドアに取り付いた。両開きの扉を開いた瞬間、納得する。そうか、だから、男は慌てる必要がなかったのだ。

廊下には灯火があつた。それを背に受ける格好で、もうひとつ。マントを着けた黒い人影。それはフードを目深に被り、表情を闇の中に沈めていた。

足元には、倒れ伏した二人の兵士。ピクリとも動かないそれは、すでに息絶えているだろう。

束の間、胸の中を圧倒的な絶望が占めた。

「わたくしを捨て置いて、どうぞお逃げください……！」

あたしの肩を掴み、コーディーは強い口調で囁いた。その声で、我に返る。自分ひとりではないのだ。この子を、巻き込んで死なせるのは耐えられない。

立ち尽くしたわずかの間に、背後にはもうひとりの男が迫る。あたしはベルトの辺りに手を当てて、コーディーを突き飛ばす。と同時に体を反転させて、真後ろに向き直った。

男はさつと身構える。突き出したあたしの手に、コーディーのベルトから抜き取った短剣が握られていたからだ。

当然たやすく止められる。ナイフを握った腕を掴まれ、あたしは即座に武器を手放す。その手で逆に男の腕を捉えると、上体を引き付けて真正面から膝を蹴った。体重を乗せて踏み付けるように蹴った為に、男の膝は異音を立ててグニヤリと曲がった。

その体が床に崩れるより前に、あたしはコーディーの手を取ってクローゼットの陰に飛び込んだ。その先に、秘密の通路が開いてい

る。

「ここまで追って来られないはずだ。通路に入ってしまったら、思わずその場にへたり込んだ。」

ドキドキと、早鐘のように胸が鳴る。それと同時に熱いのか冷たいのか解らない感覚が、今更に体中をぐちゃぐちゃに混ぜた。

高ぶって熱を持った頭で思う。これでよかった？ 本当に？ 他に遣りようがなかっただろうか。何よりあたしは、コーディーをこの中に引き込んでしまった。

握り締めた手の先を確かめたいと思ったが、輪郭も臃なこの闇の中では無理な話だ。

「あの者たちは……」

手の先の声に、あたしはシツと鋭く息を吐いて戒める。

通路に生きる魔術の力は姿を隠してくれてはいたが、音までは打ち消してくれない。今の声が届いたか、戸口に立っていた男が部屋に踏み込みこちらに近づく。

そこは通路の入り口だったが、まるで見えない壁に阻まれてもいるようだ。伸ばした手が、あたし達の目の前でヒタリと止まった。あたしはコーディーを両手で捕まえ、足音を立てないよに注意を払ってその場を離れる。

「あの者たちは、何者でしょう」

しばらく歩き続けたところで、コーディーがそう口を開いた。周囲は少し、明るくなった。どこかの部屋か廊下に灯された明かりが、石壁の隙間から入り込んでいるのだろう。

「さあね」

何者か？ それはあたしも教えて欲しい。

手を引いた格好のまま振り返ると、不安げな顔がうつすらと見え  
た。

「ですが、城内に忍び込んでマチルダ王女を狙うなんて……」

「狙う、ねえ。殺すつもりはなかったみたいよ」

コーディーの頸からタイを取って、繋いだ手にぐるぐると巻き付

ける。うっかり離してしまいはしないかと、ずっと冷や冷やしていたのだ。あたしが手を離してしまったら、この子はたちまち出口のない迷宮に囚われてしまう。

「そんな事、分かるものですか。さっきだって王女がとめてくださらなかったら、どうなっていたか」

「あつちが油断してたのよ。護身術程度の抵抗で、どうにかなる程やわな相手に見えなかったもの。殺すのが目的なら、ずっと簡単に終っていたはずよ。二人共ね」

だから目的は最初から、あたしを無傷で連れ去る事ではなかっただろうか。

これは頭の端にずっとあった疑念だが、口には出さず胸にしまった。もしも考え通りなら、あの侵入者達は躊躇なくコーディーを殺しただろう。丁度、廊下に倒れた兵士達のように。

奴等に取って、命の価値は等しくないのだ。

あたしと、あたしの頭の中にある情報。それさえ手に入ればいいのだと直感した。

無意識の内に唇を噛む。

どうして、今夜だったのだろう。もう一日遅ければ、あたしはこの城にいなかったのに。もう一日早ければ、きっと眠ったあたしを簡単に攫う事ができたのに。

考えたくない推測が、苦く広がる。

「……とにかく、ヴァインセントの所へ行きましょう」

「ハーディー將軍の？ なぜそんな」

あたしの提案に、意外そうな返答がある。その反応には、却ってこちらが驚かされた。

「おかしい？ 危険な目に遭ったのだから、誰かの力を借りるべきだわ」

「よろしいのですか。そんな事したら、もうお逃げにはなれませんが」

あっさりと言われたので、一瞬、会話の途中でするように何げな

い相槌を打ちそうになった。けれども、ちゃんと考えて。

「コーディーは今、とんでもない事を言ったはずだ。」

あたしはがつくりと壁にもたれて、改めて納得する。そうだ。コーディーはそもそも、ワイルダーに薬を与えられて眠っていないければならないのだ。

「ああ……、そうよ……。そうよね。コーディー、何で知ってるの？」

「申し訳ございません。なにぶん、小細工の苦手な方ですから……。飲み物を渡された瞬間に絶対おかしいと思ってしまっつて」

「目に浮かぶわ……」

薬入りのカップを手にし、挙動不審なワイルダーが。

「何を考えておられるのかまでは推察しかねましたが、この荷物を見てやつとマチルダ王女をお逃がしする計画だったのだと納得いたしました」

「あら」

言つて、コーディーは空いた片手で重そうな袋を持ち上げて示した。ワイルダーが用意して、昼間の内に通路に隠した逃亡用のあの荷物だ。

「どうやら通路に飛び込んですぐに見付け、ずっと片手に抱えていたらしい。道理で、歩くのが遅いと思つた。」

「でも、それなら尚更ヴィンセントの所へ行かなくちゃね。あたしを逃がす訳には行かないでしょう？」

「危険にさらすと分かっているのに、ですか？ それは、ハーディ

ー将軍もお望みにはならないでしょう」

「……中々、賢いわねえ」

「恐れ入ります」

あたしはため息ではなく、気分を入れ替える為に大きな息を吐いた。

それから狭い通路の片側に手を突き、歩き出す。ヴィンセントの部屋ではなく、城の外へ出る為に。



コーデターの言う事は、いちいち的を得ているのだ。

あたしは今夜、城から逃げ出す予定だった。そこで重要になって来るのが、どうして今夜だったのかと言う事だ。

確かにこの逃亡計画の為にあたしは眠らずにいたのだが、それは果たして本当に侵入者達のマイナスに作用しただろうか。彼等は、恐らくプロだ。あたし達が逃れられたのは単なる幸運で、本来なら女一人が抵抗したところで大した問題にはなり得ないだろう。だとしたら、敢えて今夜だったとも考えられる。

計画をコーデターに看破されてしまうのは予定外だったに違いないが、ワイルダーはあたしを逃がす為に警備に穴を開けた。

その事を承知の上である男達が訪れたのだとしたら、その意味する所は余りに危険だ。

この憶測の通りなら、あたし達の計画を知る人間が侵入者達を招き入れたと言う事になる。

(十四)

(十四)

出口が近付くにつれ、息が詰まる程に悪臭が酷くなった。

「ここは……何ですか？」

「死体置き場よ」

通路の内側で、答えながら荷物の袋をこそごと探る。途中で調達した手提げランプが、床の上からそれを照らした。

靴と着替えが必要だった。あたしはベッドから飛び起きたままの姿で、絹の寝間着でおまけに裸足だ。通路の内はまだいいが、これから出て行くのは山のように死体が詰まれ、じつとりと湿った地下室だ。できる事なら、素足は避けたい。

「……とんでもない場所に、通じていますね」

「別の出口もあるわよ。でも、そっちは軍の施設だから。今はリシエイドに制圧されてて使えないの」

実はその他にも酒場に開いた出口であったり、娼館に向かう分岐もある。用途は詳しく追求しないが、いずれにしる閉ざした門扉の内側で、招き入れた覚えのない人間が夜明け前にいきなり増えればさぞ不審だろう。

その点、ここなら心配ない。死体は密告しないから。

「嫌なら、戻つてもいいわよ」

「お供いたします」

死体と聞いて気味悪そうに呻いた侍従は、そこだけは断固として宣言した。

実は、城の中にいる内にコーディーだけを通路から出し、置いて来ようかと考えていた。この子を巻き込む事はないと思つての事だったが、「侵入者を目撃したわたくしが、無事でいられる保障はありません」と、いやにきつぱり論破された。

だったら一緒に逃げるのがまだいいと言いつ張る理屈に巧い反論が思いつかず、結局連れて来る事になってしまったのだ。

荷物から探し出した衣服を身に着け、通路から出るとコーディーが明らかにほつと息を吐く。着替える間は手を繋いでいられないから、彼だけ先に通路から出していたのだ。

つまり、死体と一緒に待たせていた。

石造りの地下室には、死体の放つ饅えた臭いが充満している。呼吸をするのも苦痛な程だ。

「外で待つてもよかつたのに」

「まさか。そんな事はできません」

コーディーはランプを持って先に立つが、殆ど後ろ向きに歩いて注意深くあたしの足元を照らした。

「リシエイドの軍がこの王都に入る時、戦闘はなかつたと聞いていたけど」

「はい。その通りです。抵抗らしい抵抗はなかつたと……」

急に何の話が始めたのかと、コーディーは答えながら訝るように首を傾げた。

通路の口が開いているのは、地下室の一番奥だ。何しろ余りに多くの死体があるので、そこから階段まで、何も踏まないように進むのはかなり大変な作業だった。

チロチロと揺れる小さな灯火が、周囲のものを橙に染めて浮かび上げる。眼に入るのは、死体ばかりだ。それも日が経って変色し、奇妙に腹の膨れた死体や、爛れた唇の間から虫をぼろぼろと零しているものが多い。それが数え切れない程に積み上げられて、進路を塞いだ。

死体から染み出たもので、濡れた床。それを靴で踏みながら、あたしは内心で酷く驚き、混乱していた。

この死体置き場は、親族が葬儀の準備をする間だけ死体を保存する場所だ。だから通常、ここまで死体で溢れる事はないに等しい。

少なくともあたしが監禁される、十年前まではそうだった。

「……一体どうして、王女がそのような事をご存知なの？」

「どうやら考え事が全部声に出ていたらしく、先に行く背中は何とも言えない奇妙な顔をこちらに向けた。」

「城を抜け出すのによく使ったのよ。絶対ばれないの。」

「そりゃあ……まさか一国の姫ともあるう方が、このような場所に出入りなさるとは思いもいたしませんから。」

「やっと階段まで辿り着いて、コーディーは段の上に荷物を置くとき心底ほっとしたように息をついた。」

「確かにね。こんな場所なら、一度だつて使わなかったわ。」

「呟くと、今通つて来た場所を振り返る。」

地下と言つても、相当に広い。今はそのどれもが死体に隠れて見えないけれど、重い天井を支える柱の間に石の寝台が幾つも並び、壁際には石を削り貫いた巨大な水槽が用意されていた。

本来なら、多くても石の寝台に二つか三つの死体が載っている程度なのだ。数日の内に埋葬されると決つた死体は、そうして保存する。もつと長く置くものは植物の油で水槽を満たし、その中に浸された。

あくまでも一時保管の為の施設で、こんなふうには死体を打ち捨てる場所ではない。

考えられるとしたら、葬儀を取り仕切る者まで死んでしまったか、それとも死体の数が多過ぎて手が付けられなくなったかだ。しかし、リシエイドはこの地で戦っていない。

ではこの死体の山は、どうやってできたと言つのだろうか。

その事を思うと、胸の奥がじくじくと痛んだ。

「とりあえず、店が開くのを待つてコーディーの服を揃えなくちゃね。」

「えつ。いえ、わたくしはこのままで。」

「いかにも良家にお仕えしてます、つて言う、全身絹の出で立ちで？」

白み掛けた空の下、自分の体を見下ろして少年は困り果てたよう

に眉を下げる。

「目立つてしょうか」

「目立つてないと思ってるあなたにびっくりよ」

幸い、ワイルダールの用意した荷物の中には現金もあった。当面困る事はないだろう。

何をするにもまだ早過ぎる時刻だが、死体置き場のある場所は町外れだった。この辺りは鍛冶屋ばかりで、服を手に入れるにはもっと城下の中心に移動する必要がある。

コーディーを促して歩き出し、数歩も行かない内にあたしはふと足を止めて振り返った。空は白み、陽が昇ろうとしているのだ。なのに、この静けさはどうだろう。

鍛冶屋は夜明け前には起き出して、鎚を振るうものなのに。

不安を伴う違和感が、静寂の中に深くなってあたしの眉を顰めさせた。

街の中を歩くと、それはもつと顕著になった。まだ時間が早いから、人がいないのは仕方ない。だが閑散とした街並みは、どこなくうらぶれて見えた。その印象はレンガの舗装がガタガタに剥がれた道のせいかも知れないし、通りに面した建物で破れ掛けの鎧戸が風に軋むせいかも知れない。

王城の庭で感じた事が、もつと身に迫って実感された。滅んだのはひと月も経たない内の事なのに、この国はとっくに死んでいる。

\*

「アンじゃないか？」

服を探そうにもまだ店が開いてない。そこで、とりあえず早朝から遣っている食堂を見付けて入ったのだが、席に着くなりそう声を掛けられた。

オレンジ掛かった金髪に、深いグリーンの両目。どうも、覚えのある顔だ。昔はもつとひよろりと縦に長い印象だったが、すっかり

肩幅の広い大人の体になっている。

「……ああ、フィルね。驚いた」

「何を驚くんだよ。当たり前だろ、ここはオレの店だ」

「覚えてると思わなかったのよ」

フィルはわざわざ厨房から出て、あたし達のテーブルまで足を運んだ。懐かしそうに笑いながら、腰に巻いた前掛けで手を拭う。

「忘れるかよ、一緒に悪さした仲だ。しかし、ご無沙汰だったじゃないか」

「ちよつと国を出ていたの」

「へえ……まあ、無理もないな。悪いけど、シチューしかないぜ」

「来るの、早過ぎた？」

「いや、今はそれしかやってねえんだ。マシになったんだぜ、これでも。ちよつと前まで、豆のスープしか出せなかったからな」

それで構わないと頷くと、フィルは厨房に戻る。それを待ち構えたように、正面に座ったコーディーが身を乗り出してあたしに囁く。

「お知り合いですか」

「昔ね、よく来てたのよ。ここではアンと名乗っているから、気を付けて」

「ミドルネームでは、偽名にならないのでは……」

釈然としない様子でコーディーは言ったが、王族のミドルネームを承知している人間が市井にどれだけいるだろう。

「はいよ、お待たせ」

「ありがとう」

「で？」

テーブルにシチューを運び、フィルはすぐに去らず眉を上げてあたしに尋ねた。

「で、つて？」

「連れか？」

あたしの前の席を指す。

急に話題に上げられて、コーディーはギクリと強張った。それで

も黙っているのは、さすがに賢明だ。二人一緒に口を開くと、どこから嘘がほつれるか解らない。

「内緒にしてね。弟なの。奉公が辛いと泣くものだから、連れて逃げている所なのよ」

「それで大層な服着てんだな。目立つぞ、それ」

あたしの出任せに頷いて、フィルは絹の襟を指先で弾いた。コーディーはいよいよ小さく縮こまる。

「古着屋を探してるんだけど、この辺り、随分と変わったわね」

「こんなご時世だからな。リシエイドが来て、よくなったほうだ。

それまでは王様の石狂いのせいで、食料もマトモに手に入らななかつたんだぜ」

「石狂い？」

「知らないか？ エンジェルなんかかって宝石のせいで、アイディム<sup>①</sup>の王族はみんな狂っちゃったんだと。有名だぜ？」

まさか、そんな事になっているとは。あたしは驚き、コーディーを見た。すると彼は弱り切った顔を伏せ、居心地悪げにシチューのスプーンを舐めている。

なるほど、有名な話らしい。

(十五)

(十五)

最終的に、父の威光が及ばなくなつてしまつたのだらう。王の秘密が漏れると言うのは、そう言う事だ。

だが事情を聞く内に、それも仕方のない事だつたと思う。王はエンジニアリック・ブルーの搜索に全ての労力と財を注ぎ、他事には一切の興味を示さなかつた。それは民の生活であり、製鉄の保護でもあつただらう。

ついには、鉄鉱石の輸入さえもやめてしまつたのだ。鍛冶屋の並ぶ町外れの光景を思い出す。それは騒音と言う他ない、鎚を振るう音がまるでなかつた。

原料がなければ鉄は打てない。鉄がなければ、何も国外に輸出できない。そうしてやがて決定的に、財政が破綻したのだ。

この占領が父の芝居ではないかと、実は心の端でまだ少し疑つたところがあつた。それは完全に消え去つたが、それでよかつたと思う。民を苦しめるだけの王なら、必要ない。

「好きなの持つて行けよ」

フィルはあだし達を食堂の二階に案内し、物置みたいな部屋に通した。昔の服を探す為だ。

コーディーとあたしは同じ黒髪だつたから、弟と言うのは中々説得力があつたらしい。弟の為に目立たない服が必要だと言うと、なら昔の服がどこかにあるとフィルが提案してくれた。

「店があるから戻るけど、適当に探してくれ」

「ねえ、お父さんは？」

食堂は、父親とフィルの二人で遣つていたはずだ。他人がいきなり家捜しなんかしていたら、驚くだらう。

「ああ、死んだよ。隣にオフク口いるけど、ほとんど寝てるから気



にするな」

「……解った。ありがとう」

トントンと階段を降りる背中を見送り、仮初めの弟を残した部屋に戻る。

「合いそう？」

「あつ、入らないでください！」

戸口から覗き込むと、服ではなくて木箱を持ってきびきびと働くコーディーの姿が眼に入る。どうやら、片付けを始めてしまったらしい。

まず整理しないと、何がどこにあるか解らない。コーディーはそう主張したが、多分、気になって仕方がないのだろう。

手伝おうと思ったら、彼は頑としてそれを許さなかった。やれやれと入り口に腰を下ろし、雑然と広がった荷物達が次々に片付けられて行くのを眺める。

しばらくすると、慌てた足音が階段を駆け上がって来た。コーディーがはっと驚いて、急いであたしを背中に隠す。

「お前ら、何したんだ！」

ドカドカと入って来たのは家主のフィルで、あたしを庇う後ろ姿は明らかに力を抜いた。しかし乱入した本人はドアを閉めると、緊張した様子で声を潜める。

「客の話じゃ、リシエイドの軍が人を探してるんだと」

「あら」

身に覚えのある話に、あたしは隣と顔を見合す。

「で、探してるのが黒髪の二人連れ。特に黒髪で、グレーの眼をした三十女を探してるそうだ」

「やだ。仕事速いわねえ」

「マ……、アン！」

コーディーが危なっかしく戒めたが、フィルはすでに頭を抱えて屈み込んでいた。

「やっばお前らかよー！」

そうとは知らず、手配犯を家に上げてしまった食堂の主人。心中察して余りある。

他人事のように気の毒になってしまったが、正直、こんな状況は想定していなかった。

あたしを逃がすなら手配するのは致命的だし、密かに捕らえるにも邪魔でしかない。敵か味方が解らなくなってしまったが、どちらにしるワイルダーが止めるはずだと思っていたのだ。

「困ったわね。外歩けなくなっちゃった」

「悠長な事を……」

「いいか、絶対ここから出るなよ。窓にも近付くな。いいな？」

焦ったように言いながら部屋を横切り、硝子のない窓にカーテンを引いた。

「ファイル」

振り返って、彼は驚いたように眼を開いた。呼んだあたしが、眉を顰めていたせいだろう。

確かに、ここに留まるしか道はない。放り出されても、軍に突き出されても、結果は同じだ。だが、あたし達をここに置くと言う意味が、本当に解っているのだろうか。

「それと知って匿えば、言い訳は通らないわよ」

「じゃ、聞いてない事にする」

それで通用するのだろうか。あたしとコーディーは揃って首を傾げたが、その間にファイルはさっさと部屋を出て行ってしまった。ドアを閉じる直前に、「大人しくしてろ！」と念を押すのを忘れずに……信用して、いいのでしょうか

部屋の片付けを再開して、コーディーがぼつりと言った。

「さあね」

「さあって……」

「でも、アイディームの民は誇り高いわ」

アイディームは鉄鋼産業の国だ。その為に、自分達こそが国を支えていると言う自負がある。誇りある者は、自らに恥じる行いはし

ない。今は、それを信じる他になかった。  
けれども。

信頼に応えるのも人間なら、信頼を裏切るのも人間なのだ。  
ふと、コーディーが顔を上げた。やっと見付け出した古着の中から、着られそうなものを選んでいる最中だ。持っていた服を投げ出して、風に揺れるカーテンの隙間から外を窺う。

息を飲むのが見ていて解った。

「気付かれたようです」

「そう」

驚きはしなかったが、黒いものが胸に落ちて広がった。失望と言  
うべきだろう。

コーディーの隣から通りを見下ろすと、鎧を付けたリシエイドの  
兵士が見える。確認できる範囲では三、四人程しかいないようだ。  
すぐに踏み込んで来ないのは、援軍を待っている為だろうか。

しかしそれより妙なのは、肩のショールを胸元で掻き合せた気弱  
げな婦人が、その兵士達と連れ立っているように見える事だ。

と、あたし達の足の下からフィルが飛び出し、婦人に向けて怒鳴  
り付けた。

「何考えてんだ、オフクロ！」

すぐに婦人が悲鳴を上げる。兵士のひとりが、フィルを殴り倒し  
たのだ。これ以上騒がれる前に手を打ったのだろう。

だがあたしとコーディーは、何とも言えない表情を浮かべてお互  
いの顔を見た。

幼さの残る横顔が、ボソリと零す。

「これはちよつと、責められませんかねえ」

「そうねえ。お母様も、心配だったんでしようねえ」

フィルの母親は、隣の部屋で寝ていたはずだ。それなら、あたし  
達の会話が聞こえていたのかも知れない。

息子が、悪い知り合いに騙されているとも思ったのだろう。不  
安の余りにベッドを抜け出し、自ら情報をもたらす事で安全を買っ

たと言うところか。

冷静に考えれば進退極まった状況だったが、何だか気が抜けてしまった。どこかのんびりとしたあたし達の会話に、誰かがクツクツと喉を鳴らす。

はつと振り返った視界の全てに、黒い影が広がった。

これは知ってる。

絶望しか教えない、真の闇だ。

まるで悪い夢でも見ているように、昨夜の光景が目前に甦る。黒い影。黒いマントに身を包み、フードを目深に被った二人の人影。

それは、城で出会った侵入者達に違いなかった。

その証拠にコーディーが震える手であたしを掴んで、窓のほうへとジリジリ下がる。痛い程に掴まれた腕から、恐れと警戒が伝染しそうだ。

黒尽くめの片割れが、マントの中から長剣を抜く。それと同時に、もうひとりが何げない様子でこちらに歩いた。

人と言うものは……これから誰かを殺すはめになるだろうと言う時に、人間はこんなにも平静でいられるのか。

近付く男の黒いマントが足の運びにひらりと揺れて、あたし達は押されるように一歩下がった。

刹那。その隙間に、人が上から落ちて来た。

目の前に、突然に。どうやって？ 直前に、音がした。木を裂くような、タイルをめちゃくちやに割るような。きつと、そのどちらも正解だった。男達は、建物の屋根を破って入り込んで来たからだ。フィルの家には屋根裏がない。二階の天井には屋根を支える太い梁が走っていて、今は中々の穴がそこに開いて青い空を覗かせている。

だから突然飛び込んで来た二人の男は相当の高さを落ちたはずだが、いやに軽々と着地して、間髪入れずに黒い人影に突進した。頭に巻いた揃いの布が、素早い動きに翻る。

「姫様、こちらへ」

反射的に、ぎくりと体が強張った。

声は背後から聞こえたからだ。だがあたしとコーディーは部屋の端に背中を着けて、これ以上は後がない。

「どうか」

窓だ。硝子のない窓に外から取り付き、男がこちらに片手を伸べる。間近で見たその姿に、息を飲んだ。

後にも先にも、十年前の一度だけだ。

ただ一度あの夜に、眼にした姿がそこにある。

仲間と同じく頭に固く布を巻き、髪を隠してしまっている。けれども眉や睫毛は色を持たず、瞳はまるで燃えるような緋色だった。

頭に巻いた布を取れば、きつと見事な銀髪がその下に隠れているだろう。

「コーディー、行きましょう」

「しかし、その者が信用できるとは」

戸惑いながら不安を口にする。それにあたしは薄く笑った。もしかすると、唇が引き攣っただけに見えたかも知れない。

ある意味で彼等の出現は、黒尽くめの男達よりもあたしを緊張させた。

緋色の瞳、青みを帯びた凍て付く銀髪。

それは紛れもなく、氷壁の民の証だった。

(十六)

(十六)

腹を裂かれ、今にも息絶えんとしていた少女が教えてくれた事だ。この世で唯一、神からエンジエリック・ブルーを有する事を許された人々。そして同時に、悪魔に魅入られてしまった者達。

彼等を指して、氷壁の民と呼ぶ。

ヴィンセントを見知った時にも充分に白いと思っただが、それよりも白い。月明かりを宿したような、青白い手が伸べられた。この場から逃れる為には、それを取る他にない。

あたしは出会ったばかりの男の腕に抱えられ、殆ど落ちるように窓から飛んだ。

二階だ。どうするのかわかと思ったら、真下に馬車が走り込んで来るのが見えた。速度を落としてはいるが、止まろうとする気配はない。計ったようなタイミングで、藁を積み上げた荷台に着地する。と、何かで脛を強か打った。藁の中に、固い物がうずめてあるのだ。頭から落ちたコーディーが、すぐ隣で額を押えてのた打ち回る。

「アン！」

加速する馬車の後方で、声が上がった。走り続ける馬車を止める事もできず、成す術なく立ち尽くした兵士の向こう。通りに面した壁に縋り、何とか体を起してフィルが叫ぶ。

「すまない……！」

母親の事を言っているのだろう。でもそれは、彼が謝る事ではない。むしろ、詫びるべきはこちらだった。

フィルの家にワイルダーの荷物を置いて来たのを思い出し、あたしは彼に向けて大声で返す。

「荷物の中にお金あるから！ 屋根修理の足しにしてー！」  
言っている間にも、どんどんと距離が開く。まるで豆粒みたいに

なったフィルが「屋根え？」と素っ頓狂に上げた声が、最後によっやっとうに届いた。

ほっと肩の力を抜くと、共に馬車に飛び降りた男が御者と言葉を交しているのに気付いた。

「ノア。アルとルイスは？」

「あの二人なら大丈夫さ。予定通り落ち合えるだろう」

頭に布を巻いた男はノアと呼ばれ、当然のように請け合った。彼自身、そうあつて欲しい願っているのかも知れない。御者はそれに枯れ草色の頭で頷く。

見覚えのある色だ。

「バツカス……？」

思わず呟く。御者はちらりとこちらを一瞥し、少し笑って眼を戻す。それはこの十年、毎日見続けた顔に違いなかった。

ずっと、ただの下男だと思っていた。けれども今では、石の為に近付いた間者かも知れないと、疑いさえ持っていたのだ。

それが、どうしてここに。しかも、氷壁の民と一緒にいるのだろう。

あたしはすっかり混乱する。

再び口を開き、その疑問を投げ掛けようとした。正にその時、影が差す。

あたしに注ぐ陽光を遮り、人家の屋根から影が荷台に飛び移ったのだ。

馬車は道なりに進むしかない。角を曲がればロスが出る。その間に屋根の上を真っ直ぐ駆けて、開いた距離を詰めたのだろうか。

黒い色に身を包み、男があたしの目の前に降り立った。速度に乗った馬車の上で、向かい風がマントを攫ってはためかす。押えたフードのその下で、男の口がニヤと歪んだ。

頭で考える時間はなかった。だから、咄嗟の行動だったと思う。

自分の体を投げ出すように、コーディーがあたしと男の間に割り込んだ。その背中を、呆然と見る。

これ程まで、自分に失望した事はない。

あたしは、庇われてはいけなかった。自分よりもずっと若く、まだ幼いようなその背中に。隠れてはいけなかった。

理解したのは、コーディーが刺された瞬間だ。

黒衣の男は邪魔な虫でも叩き潰すかのように、何の躊躇も見せなかった。その剣は難なくコーディーの胸を突き通し、背中から飛び出た剣先があたしの服を少し引つ掻く。全身の血が凍るようとぞつと冷え、その癖に頭だけは浮かされるように熱を持って錯乱した。血が。

コーディーの血が、あたしの手の平を熱く濡らす。

それで沢山と言わんばかりに、男が剣を持つ手に力を込めた。抜こうとしているのだ。今は剣刃が栓の役目を果たしているが、抜けば血が溢れ、命は絶望的になるだろう。

思い至ると同時に、熱く凍えた塊のようなものが胃の底から湧き上がった。激しい怒りのようなそれが、あたしを突き動かす。

コーディーに素早く腕を回して抱えると、男と奪い合うつもりで突き刺さる剣をpushさえた。間髪入れず、ノアが黒衣の肩を痛烈に蹴る。不安定な藁の上に片膝と手を突いて送り出された打撃は、黒い人影をよるめかす。

だが、落ちはしない。

剣を手放した男を休ませる事はせず、跳び付くようにノアの拳が激しく打つ。一見こちらが押して見えるが、しかしどこか往なされているふうに思われた。立ち向かうノアの表情が厳しい。

深々と刺さる剣刃を動かさないよう注意しながら、コーディーを横たえる。頭の下に片手を敷き込む形になった。手の甲に、固い物が触れる。風で藁が飛ばされて、中にうずめた剣の柄が頭を覗かせているのだ。

「それを！」

手が伸びる。慌てて剣を引つ張り出して差し出すと、受け取ったのはノアではなかった。



では誰が？

黒衣の男ではない。フィルの家に残して来たはずの二人が、馬車の上に飛び降りたところだった。

はっとして、視線を移す。彼等は、もうひとりの男を止めていたはずではなかっただろうか。見れば、黒に身を包んだ人影が二つに増えている。

こちらはノアを含めて三人だが、苦戦しているのは明らかに緋い眼の民だ。黒衣の男達が両方ここにいると言う事は、二人掛かりでも止められなかったに違いなかった。

馬車で疾駆する城下の町は、長く高い塀で守られている。その四方には門があり、それを閉ざされてしまったらもう外へ出る事はできない。だから兵士達の報告よりも早く、あたし達は門を潜らなくてはならなかった。

その為に、速度を緩めない馬車はよく揺れた。足元が悪い。二本の足で立ち上がるのも難しいだろう。これでは、重い剣を持つ事が却って不利になるかも知れない。

他の武器はないかと必死に藁を掻き分けていると、何か靴の先をコツコツと叩いた。

「ルイス！」

ノアが叫ぶ。剣を手にした男が、頭の布を翻しながらこちらへと倒れ込んだ。こめかみを打たれたらしい。

とどめを刺そうと短剣を掲げ、黒衣の男はそこで初めてはっとした。しかし、間に合わない。その時にはもうすでに、矢はあたしの手から離れていた。

でき得る限りの素早さで、二の矢三の矢を次々放つ。四本目につがえた矢は、黒いマントを捉えて馬車の上から押し出した。

藁の中から掘り出した弓は、弦の張りが強かった。肩が軋み、指先が痺れる。それを堪え、もうひとりの男に向けて弓を引く。

舌打ち。

男は状況の不利を察知すると、自ら跳んで退いた。それ目掛けて

矢を放つが、胸の中心を捉えた矢を男は素手で止めてしまう。

切り払うなら、まだ解る。しかし素手で、空気をヒュルリと裂きながら飛来する矢を掴み取るとは。呆気にとられ、一瞬あたしは感心に似たものを抱いてしまった。

「追っ」

さつき剣を渡した、ルイスと言う男だ。倒れた体を素早く起して短く言う。馬車から飛び降りようとするそのシャツを、慌てて掴んだ。

「ここにいなさい！」

その間に、道に落ちた黒い影は姿を消す。

戸惑ったふうのルイスが屈み、ノアがあたしの頭を押えて低くさせた。その上すれすれに門の桁が通り過ぎる。

「バツカス」

「姫様のお考えだ」

馬を操りながら、背中では答える。

他の三人は、二十代半ばと言うところだ。その中でひとり年長のバツカスに、アルが意見を求めたのだ。

納得してない彼等に向けて、あたしは思うところを口にした。

「無駄よ。殺しても、意味がないわ。あれはただの手先だもの」

誰かに雇われた者なのだ。どうにか始末できたとしても、また新しく雇われた人間が現れる。状況は同じだ。危険を冒す価値はない。

「それより、コーディーを医者」

「できません」

ノアが憐れむような顔で、それでも譲れないときっぱり言った。

「……死ぬわ。放って置けば」

「すぐに追っ手が掛かります。できるだけ町を離れなくては」

「ノア！」

呼ぶと、彼は打たれたようにビクリと背筋を正した。

「……聞きなさい、ノア。嫌だと言っているの。あたしの為に死なせるのも、あたしの咎で死なせるのも。嫌よ。望みが聞けないと言

うのなら、今すぐあたしを放り出しなさい」

「姫様！」

アルとルイスが悲鳴染みた声を揃え、縋るようにあたしを見た。

「……姫様」

それとは違うニュアンスで、ノアが呼ぶ。眼を遣ると、頭も上げられずにいるコーディーがノアの袖を引いていた。

急いで傍に寄る。

道の石ころに馬車がゴトゴト揺れるのが不憫で、黒髪の頭をそつと撫でて遣った。

「コーディー？」

「どうか、このまま共に……」

「馬鹿ね。死ぬわよ」

弱々しい声にあたしが気色ばむと、ノアがそつと肩に手を置いて押しとどめる。

「姫様の御前を離れないと、心を決めているのです。どうか」

コーディーに代るように頭を下げ、他の二人もそれに倣った。

思えば、彼等自身もまた命を危険に晒しているのだ。それに気が付いてしまうと、何も言葉が出て来なかった。

……解らない。

どうしてそんな事をするのだろう。

あたしには、そんな価値はないと言うのに。

(十七)

(十七)

逃げ切る為に、幾らかの工夫が必要だった。

馬車に積んだ藁を少し捨て、中央を窪ませて穴を作る。そこにバツカス以外の全員が息を詰めて潜り込み、幌を被せて目隠しにした。こんな事で、兵の眼が誤魔化せるものだろうかと疑問に思う。だが、どうやら勝算があるらしい。

リシェイドの軍は二個師団、四万の兵を養わなくてはならなかったが、アイディームの食糧庫は空同然。そこでほぼ毎日、物資を満載にした馬車が王都とリシェイドの国境を中心に駆け巡る事になった。

何しろ手が足りず、物資の運搬には馬車を操れる農夫を雇う事も多いらしい。その農夫が王都に物資を届けた後で、空の荷馬車に家畜の飼料を積み込んで帰途に就く。それを装えば、疑いを受ける事もないと言つ訳だ。

「里に着けば、腕の良い本草師がおりますから」  
ぼそりと、ノアが口を開く。励ますつもりか、それとも自分に言い聞かせているのか。

本草師と言うのは、薬草などで病を癒す医師の事だ。けれどもその里まで、後どれ程あるのだろうか。

「……何をしているのかしらね、あたしは」  
コーディーの額に浮かんだ汗を拭って遣りながら、幌の下でひっそりと呟く。この子は、今にも息絶えてしまいかも知れない。なにあたしは何もできず、息を潜めているだけだ。

こんな子供に犠牲を強いて、あたしは。

陽が暮れるとルイスがひとり馬を駆り、先触れに行った。重傷の患者がいる。里でも準備が要ったのだろう。それはほぼ丸一日も

馬車に揺られ、やっと辿り着いた場所で知った。

小さな国だ。足の鈍い馬車とは言え、これだけ走れば国土の端まで来ているはずだ。もしかすると、リシェイドとの国境に近いかも知れない。

その厳しさを示すように、切り立った山肌は秋と言つのに白い衣を纏っている。その麓で、彼等は待ち構えていた。

一様に青みを帯びた銀髪で、緋色の瞳を持った人々。

驚かされたのは、誰もが瞳の中にあたしへの好意を滲ませている事だった。それは、親愛と言つても不足ない。

「姫様、よくぞご無事で」

氷壁の民を統べる長はデイトンと名乗り、伏せて重ねた両手の甲を額に着けて頭を下げた。それは恐らく、最高の敬意を表した歓待だったろう。彼に従つた人々は全て同じように礼を取り、それから急いでコーデイーに駆け寄る。

本草師だと言つ年嵩の女が指示を出し、男達がコーデイーを板に載せて運び始めた。氷壁の里は山深く、馬車は当然、馬でも辿り着けない場所だと教えられた。

馬車を捨てて来ると言つバツカスを見送り、これから踏み込む山を見上げる。木々の間に、そそり立つ岩肌が覗いていた。そうか、と思う。氷壁の民とは、岩壁も凍て付く程の厳しさの中で生きる民の事を言つのだ。

馬も寄せ付けないと言つ通り、里への道は険しかった。木々の間の下草を掻き分け、大岩の陰の細い隙間に身を潜らせる。あたしはすぐに息が切れて痛い程に心臓が鳴つたが、皆が代わる代わるに手を引いて、時に抱え上げて導いてくれた。

しかしコーデイーはもつと過酷だ。板に載せられた状態のまま、城の塔より高い岩の上に縄で引き上げられているのを見た。怪我がなくても、生きた心地はしなかつただろう。

辿り着いた氷壁の里は、美しい所だった。

天に届きそうに凍て付いた巨大な岩壁を水が伝い落ち、氷柱を作

ったその下で冷たい泉を成している。泉の傍には平らに開けた土地が広がって、並ぶ家々を背の高い木々が守るように取り囲む。

雪と氷に白く霞んだその風景は、幻想的ですからあると思つた。

その中のひとつ。本草師であるオーブリーの家にコーデーは運ばれた。それに続こうとすると、デイトンが呼び止めて若い女を引き合わせる。

「娘です。姫様のお世話を」

「サラと申します。何なりとお申し付けください」

十四、五と言つところか。サラは真つ直ぐな長い髪を揺らし、両手を額に着けて頭を下げた。

「悪いけど、必要ないわ。それより、コーデーの傍にいたいもの。行つてはいけない？」

急いたようにあたしが言つと、デイトンとサラは困つたように眼を交した。

「今はご遠慮下さい。心得のない者がいては、本草師の邪魔になるやも」

「ルイスをご存知でしたね。あれはオーブリーの息子ですから、心得があります。お連れの助けになるでしょう」

安心させるように微笑むサラに、あたしは驚きの眼を向けた。あの男が？

しかし一方で、納得もする。だから、先触れにはルイスが走つたのだ。本草の心得があると言つなら、コーデーの状態を正確に知らせる事ができただろう。

「とにかく、そのままでは風邪を引いてしまいます。どうかお召し替えになってください」

そう言つて、サラはあたしを長の家に押し込んだ。これは、最初の頃のコーデーを思い出させる。彼もあたしを着替えさせようと四苦八苦して、いつも困り果てた顔を見せた。

今は、サラが困り果てた顔をしている。

「ここは王都よりも北で、おまけに高地ですからとても寒いのです。

姫様に風邪など引かせては、みなに叱られてしまいます」

「じゃあ、上着だけちょうだい。それでいいわ」

「姫様！」

つくづく、最近をよく叱られる。

「お手伝いが邪魔なのでしたら、席を外します。でもそのかわり着替える前にお湯を使って、ちゃんと体を温めてくださいね」

「……そうね、いいわ」

その妥協案に、あたしは渋々頷いた。てきぱきと風呂の準備を整えて、サラはちよつと残念そうな微笑みを残して退室する。入り口に吊るした厚い布が彼女の背中を完全に隠してしまうのを待って、あたしは衝立の陰で服を脱いだ。

板を組み合せたバスタブに全身を浸すと、自分の体が想像以上に冷え切っていた事を知った。熱い湯に触れ、手や足の先から痺れるようにほぐれて行く。

ほっと、息が零れた。

正直、参った。こんな事になるとは、全く思っていなかったのに。エンジェリック・ブルーは、氷壁の民のもの。その情報の為に、彼等があたしを狙う事はあり得ない。その確信だけを根拠にして、共に来たに過ぎない。

ただし、その逆ならあり得るとは考えていた。あたしの持つ情報は、彼等を滅ぼし兼ねない危うさを持っている。それをあたし諸共消すと言うのは、中々道理に適った話だ。

だが、それでよかった。コーディーの命だけを乞えるなら、それでいい。

何より、彼等にはこの命を取る権利がある。

なのにどうして、こうまでして助けるのか。その理由が見えなかった。

気が付くと、湯が生ぬるく冷えていた。自分で感じるより長い時間、ぼんやり考え込んでいたらしい。

これでは却って体を冷やしてしまう。バスタブの中で立ち上がる

と、水気を拭う為の布に手を伸ばす。そのはずみに、衝立の陰から腕だけが肩近くまで飛び出してしまった。

小さな悲鳴。あたしではない。

「サラ？」

問い掛けると、動揺した声で返答がある。

「……申し訳ありません。声はお掛けしたのですけど……」

「ああ、ちよつとぼんやりしていたのよ。もう少し待ってくれる？」

油断した。サラは、あたしの体に付いた傷痕に驚いたのに違いなかった。

「お手伝いを」

止める間もなく、彼女は衝立のこちら側に滑り込んだ。もしかするとわざとそうしたのだろうか、後で思った。

「……裸を見られるのは、楽しくないわね」

「あつ、ごめんなさい」

慌てて伏せた眼に、少し涙が滲んでいる。

あたしに順序よく衣服を手渡し、濡れてしまった髪を拭う。サラは手を動かしながら、ずっと泣きそうな顔をしていた。

本当に泣いたのは身支度を終え、部屋の隅にある暖炉の前で髪を乾かし始めた時だった。

それも床に敷き詰めた絨毯と毛皮の敷物に手を突いて、まるで罪を詫びるかのように泣いた。

不安になる。あたしは一体、何をしかしたと言うのだろう。

伏せた背に手を置くと、恐縮するようにサラはもつと深く頭を下げる。

「許してください」

「何を？ あなた達は、あたしを助けてくれたのに」

「そんな！ 助けてくださったのは、姫様のほうです」

この言葉が、あたしの眉を顰めさせた。

「姫様！ 髪が濡れたままでは、風邪をひいてしまいます」

「デイトンの部屋はどこ？」



後ろからサラが追って来るのは解っていたが、構わず天井から吊るした布を掻き分けて探す。

長の家と言うから、氷壁の民の中でも最も立派な住まいなのだろう。まるで迷路だ。

壁に切った出入り口には扉がなく、代りに厚い布で仕切っている。だがそれだけでなく、壁や廊下の真ん中も布で仕切って空気を分ける工夫をしていた。広い屋敷の防寒は、どうやらこれらの厚布が主役のようだ。

何枚目かも解らない布を捲ると、そこにデイトンの姿をやっと見付けた。腰掛けたその前に、ノアとアルが立っている。

「姫様、髪が」

驚いたようにデイトンが立ち上がり、あたしを暖炉の前に促す。

デイトンはあたしよりも背が高い。それを見上げ、きっぱりと言った。

「あたしが十三人も殺したのは、あなた達の為ではないわ」

ついさつき、サラは泣いた。

自分達の為にあたしを辛い目に遭わせてしまったと、それを詫びて泣いたのだ。

デイトンは全て理解していると言つふうちに、緋い眼でこちらを見詰め返した。

「だが、結果的には同じ事。我々が危険を犯して為さねばならなかった事を、姫様がして下さった」

「秘密を守る事。そして、殺戮者を断罪する事」

長の言葉を継ぐのはノアだ。

「あたしは、殺戮者と親しく言葉を交したわ。石を手に取り、美しいものだと嘆息させたの」

吐き捨てるように言った。なのに、寄せられたのは氣遣わしげなまなざしだけだ。

「姫様」

「恐ろしかったのよ」

視線を受け止める事ができなかった。顔を背け、暖炉に眼を遣る。「それを美しいと褒めそやした自分が、父が、兄達が。引き裂いた腹から奪い取ったそれを、素知らぬ顔で王に差し出すティラスが、恐ろしくて仕方なかっただけだわ」

食い縛る歯の間から、涙の味を感じる。ああ、あたしは泣いているのかと、ぼんやり思う。そんな事で、償えるはずがないのに。

エンジェリック・ブルーには、鉦脈が存在しない。

故に、ティラスは氷壁の民を虐殺した。

何故なら奇跡の鉦石は、長い年月を掛けて人体の中で作られるからだ。

(十八)

(十八)

「手柄を立てて、王にお許しを頂きます。だからきつと、私の妻になつて下さい」

思えば、この言葉から始まったのかも知れない。

ティラスは頬を染め、母の庭であたしにそう囁いた。

けれども、どうやって？ ティラスは誉れ高い騎士ではあったが、

王の娘を妻にできる家格ではなかった。

だから彼がエンジェリック・ブルーを持ち帰った時、ある意味で一番驚いたのはあたしかも知れない。

オーロラに似た不可思議な輝きで心を奪う宝石は、国庫を潤す資源として申し分なかった。王は大いに喜んで、そのままなら望み通り娘を彼に遣つただろう。

ティラスは五十二個の宝石を献上した際、王の隣にいたあたしを手招いた。にっこりと笑つて、石のひとつを手の平に載せる。

それは仄かに温もりを持つようで、逆にひやりと体温を奪つて行くふうでもあった。手の中で転がる薄青い輝きに、あたしもまた心を捉われていたのだと思う。

冷水を浴びせられたように夢から覚めたのは、ティラスが石を持ち帰つて七日目の事だ。

その間に祝いの宴が連夜のように行われ、王は五つの石を選んで他国への進物としていた。

これは恐らく、後々を視野に入れた行動だ。他国の王室や貴族達の間でエンジェリック・ブルーが評判になれば、それは瞬く間に莫大な価値を持つ事になる。

その計算は、後に自らの頸を絞めた。エンジェリック・ブルーは最初に手に入れた五十二個を最後に、幻の宝石となつたからだ。あ

たしが、テイラス達を殺した為に。

「マチルダ様」

宴に向かう足を、暗い声が呼び止める。

あたしは首を傾げ、ふわりと広がるドレスの裾を気にしながらそこに屈んだ。回廊に立ち並ぶ柱の陰に、フィニアンが跪いていたからだ。彼はテイラスの片腕で、だから顔を見知っていた。

「どうかした？」

「お話したい事が」

「もう宴が始まるわ。そこで聞くのでは駄目？」

一応そう返したが、駄目だと言うのは解っていた。

あたしの知る限り、フィニアンと言う男は冗談の通じない、でも優しい人だった。

だからただ事ではないと、その眼を見て直感した。暗い、翳った眼。そわそわと落ち着きなくさ迷わせ、その癖何も見ていない。

伴っていた侍女達を先に宴へ向かわせて、あたしは人けのない庭にフィニアンと降りた。

それが、全ての運命を変えると知らずに。

夏だった。

息苦しい程の昼間の熱気が少し褪め、どこか寂しく、夢とも現とも付かない夏の夜の事だった。

その夜あたし達二人は城を抜け出し、ある屋敷に忍び込んだ。テイラスの家だ。

フィニアンは何かに怯えながら、勝手知ったる様子でどんどんと奥へ進む。使用人の眼を避け、足を止めたのは地下へ続く扉の前。油で満たしたランプを手に持ち、軋む階段をゆっくりと降りる。

その時になって、自分が本当には何も解っていなかったのだと思いついた。嘘だと思つた訳ではない。でも、それでも実感なんて、ひと欠片もなかったのだ。

「……だあれ？」

闇の中から声がする。

フィニアンがランプを掲げると、不安定に揺れる灯火に少女の姿が浮び上った。

思わず口を覆った手の下で、息を詰める。悲鳴は喉に貼り付いて、出て来なかった。

彼女は、両足の腱を絶たれているようだった。投げ出した足に深々とした傷があり、固まり掛けた血がこびり付いている。

流れ出た血の為に横たえた体がべったりと血に染まっていた。けれどもそれは足ではなく、腹の傷からの出血だろう。

肩で切り揃えたはずの髪が血で赤黒く固まって、もう元の色も解らない。

「だあれ？」

もう一度問う。幼さを残す声だ。実際、子供にしか見えなかった。その子供は、生け捕りの獣を入れる檻にいた。

恐ろしい事だと、王の庭でフィニアンは言った。実際その告白は恐ろしく、けれどもあたしは、本当には解らずにいたのだ。

理解できる訳がない。城の奥で絹にくるまれ、ずっと守られていたあたしに。絶望は、ただの言葉でしかなかったのに。

テイラスを始めとした十三人が行ったのは、虐殺だった。

何十人も人間を殺し、腹の中からあの美しい石を奪った。血と肉の欠片をせせらぎに洗い落とし、王の前に差し出したのだ。見返りに誉れを得る為に。

その誉れは何の為？

他の者は解らない。けれどテイラスが欲しがった栄誉は、あたしのせいではなかっただろうか。

眩暈と吐き気によるめいて、その場に膝から崩れ落ちた。震える声で、フィニアンに問う。

「この子は？ どうして、こんな所にいるの？」

暗い声は、淡々と答える。

「この者達に会ったのは、墓場でした。そうと知らず土から顔を出した石を見付け、持ち帰ろうとしたところを見咎められたのです」

その石は骨のようなものだから、置いて行けと。それは人の体でできたものだから、持ち帰ってはならないと。

言われて、ティラスは何を思っただろう。

「争いになり、故意か事故か……もう解りはしませんが、殺してしまつた。誰かがその腹に入れて、臓腑を引きずり出しました」切り刻んで、石を探した。

後はもう、解らない。殺して殺して殺して、集めた石は何個だろう。幾つかは墓を暴いて拾い上げたが、正確な数は誰も知らない。

とにかく沢山の老人を殺し、女を殺し、子供を殺した。不思議な事に老人以外、男はついぞ見掛けなかった。

子供がひとり、腹を裂いても生きていた。

村の場所くらいは解るだろうと、情報を引き出す為に連れ帰つたのだ。

「言わなかったの」

フィニアンの話に口を挟んで、少女はひっそりと微笑んだ。

「里の場所は、ぜつたい、教えてやらないの」

「……そう。偉いわね」

あたしは檻の傍に寄り、格子の間から血に固まつた頭を撫でる。

この小さな頭で、何をどう理解したのだろう。

「あなた達は、きつと誇り高いのね。だから、子供でも勇気があるんだわ」

「氷壁の民はね、神様に言えないことをしてはいけないの。だから……」

知らずに涙が溢れたが、自分が何を感じていたか、もう何も思い出せない。

喜怒哀楽のどれでもなく、ただ憎しみだっただろうか。

「ころしてくれる？」

幼い声で、少女は頼んだ。

「いいわ」

あたしは、ティラスの事を考えて言った。

「あなた達の秘密を知る人間は、皆必ず殺してあげる」

「白い髪とあかい目は、氷壁の民のしるしなの。だから、のこしちやいけないの」

だらりと血の中に落とした手を、ゆるゆると持ち上げてフィニアに伸ばす。手元のランプに照らされて、彼は悲痛に眼を閉じた。そして、ゆっくりと頷く。

二人の間には、あたしに見えない何かを通じ合っていたのだと思う。

フィニアンは檻に近付き、硝子のランプを叩き付けた。油が溢れ、炎が広がる。

「何をするの！」

生きているのに。少女を外に出そうとするあたしを止めて、彼は必死に訴えた。

「あれはもう、手を尽くしても死ぬでしょう。せめて、望む通りに死なせたい」

言われて、愕然とした。

少女が殺して欲しいと言ったのは、自分の事を指していたのだ。

あたしにはそれさえ解らなかった。

この騒ぎが伝わる前に、急いで馬を駆って城に戻る。テイラスと彼が率いる小隊は、宴の主役だ。必ず城内にいるだろう。

宴の席に戻ると、向こうが先にあたしを見付けた。

「マチルダ。どこにいるかと探しましたよ」

「ねえ、テイラス。あなたがしてくれた約束を、覚えている？」

巧く笑えているか、自信はなかった。だがテイラスは疑う事なく、ぱっと顔を輝かせる。

「もちろん」

「そう、よかった。父にお願いする前に、英雄とのお仲間の皆様は、あたしの為に特別なお話を聞かせて下さるかしら」

「喜んで」

答え、あたしの手を唇を落とす顔は、希望に溢れたただの男にし

が見えなかった。

程なく小隊の全員が集められ、あたしが用意させた小部屋に入った。小部屋と言っても、二十人は席に着く事ができるだろう。

テーブルの上にはワインを注いだ杯が十四、用意してある。

「まずは、あなた方の活躍を讃えます」

ワインを手に取り、高く掲げる。それに倣い、兵士達は掲げた杯に口を付けた。

それを確かめ、あたしとフィニアンはグラスを置く。飲んではいない。それは毒で満たした杯だから。

杯の碎ける音が次々に響く。毒を飲んだ者が取り落とした杯だ。燭台が倒れ、テーブルクロスを焦がしながら蝋燭の火が大きく燃えた。

少なくとも半数は毒に倒れていたが、全てではない。フィニアンが剣を抜き、仲間のはずの残った兵士に切り掛かる。

だが、相手が多過ぎた。ひとりで倒すのは無理だろう。

あたしは唇を噛み、秘密の通路に飛び込んだ。武器を備えた場所に走り、黒く塗った弓を取って駆け戻る。

通路は常人の眼には見えない。それは、内側にいる者の姿も見えないと言う事だ。

あたしは通路の出口近くで踏み止まり、最後のひとりが倒れるまで弓を引いた。



(十九)

(十九)

もう立っている人間がいなくなると、部屋の中に足を踏み入れた。弓を捨て、剣を拾う。もがいている男達の胸に、とどめの剣を刺す為だ。

ティラスはすでに死んでいた。

どうしてあたしに殺されるのか、理解してはいなかっただろう。肉を裂いた剣先が骨に当たる感触に、腕と一緒に頭が麻痺して行くようだ。他を殺してフィニアンの前に立った時には、酷く冷酷な気分染まっていた。

あたしも、王族のひとりなのだ実感する。冷たく、残酷で、眉ひとつ動かさず命を取れる人間なのだ。

だから解る。

父は、真実を知ってもあの石を諦めはしないだろう。

血と怨嗟にまみれていても、父に取っては国を潤す宝石としか映らないに違いない。

だが、民はどうなるのだろう。

呪われた石で養われ、知らずの内に魂を穢された人間は。その誇りは。

目の前で、フィニアンが自ら頸を掻き切った。ドレスの胸元までを返り血が染める。剣を投げると手近の椅子に腰掛けて、片手でテーブルに頬杖を突いた。

肘を載せた少し先に、杯がひとつ残っている。それを手に取り、中のワインをくるくるともてあそんだ。

飲んでもよかったが、結局そうはできなかった。この国がこの先どうなるか、見届けるのが自分の役目かも知れない。

炎の中で果てた少女に思いを馳せると、何故だかそう思ったのだ。

当時、あたしは二十歳だった。

あんな事をしたのは、できたのは、だからこそだったかも知れないと思う。

見落とす程には若くなく、諦める程は長けてなかった。

デイトンとこの話をした時、彼は深い皺の刻まれた顔に悲痛なものを滲ませて呟いた。

夏の事だった。

狩りの季節で、男達は出払っていた。誰も守って遣れなかったと、今もばつくりと開いたままの傷口を垣間見せた。

過去は変えられず、耐える他ない。けれども、これからを考えても問題は多かった。

エンジエリック・ブルーは、世の中に出てしまった。そうしたのは父だったが、ひとつだけ褒められる事があるとしたら、最初に贈った五つの他は石を国外に出さなかったと言う事だ。

アイデュームは製鉄の国である為に、商人としての側面も持つ。確かに五十個近い石を売れば、国庫は一時的に潤いはする。だが、それで終わりだ。

供給できないもので販路を得ても、続かないのでは意味がない。それよりも、安直に財を得てしまう事を父は警戒しただろう。

苦勞なく富めば、国の根幹である製鉄まで廃退してしまう恐れがあった。それを補う宝石は、たった五十程しか手元にないのだ。その遣り方では、未来がない。

最後には国力の低下でそれも意味を失ったが、石は国内に残っていた。どれ程美しい宝石であろうと、手に入らないものは廃れて行く。じつと息を潜めてそれを待つ他なかった。

「リシエイドに動きが」

その知らせを持って来たのは、数日振りに顔を見せたバツカスだ。

「揺れた、と言うほうが正しいかも知れない。大揺れだ」

「それじゃ解らないわ。どんなふうに揺れたのよ」

あたしは腕組みしたまま、呆れ顔でバツカスを見た。よくもまあ、これで王城に潜入なんかできたものだ。

氷壁の里に来て、二か月が過ぎようとしていた。季節はすっかり冬になり、外に出ればたちまちに頬がぱきはきと凍る。

行く当てもないからすっかり腰を落ち着けてしまい、何だかここに馴染んでしまった。

「姫様は俺に敵しいな」

バツカスがぼやくと、ノアが笑う。あたしの横ではデイトンも静かに笑んで、先を促した。

「それで」

「ハーディー將軍が本国の命令を蹴って、アイディームに留まってるそうです」

部屋の中から笑顔が消える。

バツカスは枯れ草色の頭を掻いた。

「それもエンジェリック・ブルーではなく、姫様の搜索をさせている様で」

「何故？」

「そこまでは」

デイトンの問いに、バツカスは肩を竦める。

あたしは首を傾げた。

「それが大揺れ？」

少なくとも、あたしには予測の内だった。

だからこそ、ぎりぎりまで逃げ出さず城に留まったのだ。王族が逃げ出せば、追っ手が掛かる。敗戦で弱り切った国を、これ以上混乱させる事もないだろうと。結局、城に留まるほうが混乱の種になりそうだったから、こうして出て来てしまったが。

釈然としないあたしに、バツカスが困ったように笑う。傷付いてくれるなよ、とでも言うふうには。

「やり方が、らしくない。姫様が鼻屑にしてた食堂があるでしょう」  
頷く。フィルの食堂の事だろう。

「姫様の行方を知るはずだと、店を焼き払うところまで行ったとか。噂ですが、牙が必死に止めて事なきを得たと」

「……それは、どうかしてるわね」

よくよく聞くと、他にも誰かを締め上げたとか、国中の黒髪の女を集めさせたなど。初めて聞く話をバツカスは明かした。今までは言っても仕方ないと、あたしには聞かせずにいたらしい。

「お呼びしたのは、それについてです」

言って、デイトンは体ごとこちらに向いた。

「あの石は、毒を持っている」

「毒？」

それは珍しいが、あり得ない話ではない。鉱石の中に毒性を持つものがある事は、知られた話だ。

言わんとするところが解らず戸惑っていると、察してノアが不足を補う。

「触れてどうこうと言う話ではありません。ただ、あの石をずっと傍に置くと、精神を蝕んで行く事が。極端な執着と、疑心暗鬼がその兆候です」

「数が増えれば、それだけ深く侵して行く。ですから、この里でも墓場は離れた場所に置かれています」

「それは、あなた達でも駄目なの？」

氷壁の民は皆、自分の中に石を持っているのに。

バツカスから眼を移して問うと、長が首を振る。

「我々に害はありはしません。だが、この里にはバツカスのような者もいる」

「例え一代でも混血すると、氷壁の特徴は失われると聞いています」  
銀髪ばかりに囲まれながら枯れ草色の髪の男は、あっさりとした調子で言う。

バツカスと彼の妹は曾祖父が里の外の人間で、その髪と目の色を

受け継いでいた。そう言うものらしい。

それはそれとして、あたしは伏せた顔を手で押さえた。

どうしてそれを早く言わないの！

そう罵りたくなつたが、ぐつと飲み込む。例えそれを知らされていたとしても、地下牢にいたあたしにできた事は何もなかった。

父の事を考えてしまう。人が変わったように、時と共に残忍に。父の変貌は、ただ欲に迷っただけではなかったかも知れない。

その事だけが、薄く心を慰める。

だがデイトンの話は、それだけで終わらなかった。

「国内に残っているはずの石は、どこにあるのかご存知だろうか」

「……どうして？ 大切な事？」

氷壁の民に取って、あの石は遺骸の一部と同じ事だ。大事なものには違いない。取り戻すつもりだろうか。

デイトンがあたしの視線を受け止め、頷く。

「リシェイドの将は、様子が違っているらしい」

「あっ」

そうか。

「……城内にあるわね、それは」

唇を噛む。

石が父の心を蝕んだなら、それは父の身近にあった。そして今のヴァインセントは、かつて父のいた位置に近い。

「王の執務室……」

呟くと、視線が集まるのを肌で感じた。床に視線を落とし、考えを巡らす。

ヴァインセントの持ち込んだ荷物で、すっかり彼の部屋になっていた。恐らく、あの執務室で過ごす時間が最も多かったのだろう。

だとしたら、石は執務室の周辺にある。それも、父の他には見付けられない場所。そうでなければ、とつくにリシェイドが石を発見しているはずだ。

「確証はないけど、探してみる価値はあると思うわ」

「バツカス」

ノアが呼び、連れ立って席を立つ。その二人を慌てて止めた。  
「どうするつもり？」

「探す価値があるのなら、行きます」

「馬鹿ね。見付かる所にはないわよ」

これでは話を通らないと、彼等の奇妙な顔を見て思った。

あたしなら、大切なものは秘密の通路に隠す。父もそう考えた可能性は高い。王族なら信用できると言う訳ではないが、単純に、出入りできる人数は減る。

だから本気で残った石を探すなら、あたしはもう一度あの城に行く必要があるだろう。

(二十)

(二十)

小さな手から離れた矢は、的を掛けた木にも掠らず雪の上に落ちた。

忍び笑いがくすくすと起る。

「はい、笑わないの。次はもう少し強く引けばいいわ」

頭を撫でて慰めると、弓を手にした男の子は真つ白な息を吐いてぱつと笑った。その子が列の最後に並び直すと、代りに先頭の子供が駆け寄って来る。

「いい？ 腕の力だけで引いては駄目よ。体全部が道具のつもりで、肩を意識して引くの」

今度の子供は少し大きかったから、最初に言葉で説明した。それに、列で待つ幼い子まで熱心に頷いている。それが可愛くて、あたしは少し笑ってしまう。

列には二十人近い子供達が並んでいたが、その全員が男の子だ。氷壁の里では男は皆狩りに出るので、弓の腕はいいに越した事が無い。そこで暇を持って余したあたしが、子供達に指導する事になった。目の前の子供に手を添えて、弓を引かせる。放った矢は、中心を少し外れて的に刺さった。その証のように、的にした木からトサトサと雪が落ちる。

小柄な射手は、しかし何だか納得できないと言う顔で首を傾げた。それを下からせて、あたしは分厚い外套を脱ぐ。着ていても弓は引けるが、それでは体の動きが見えにくい。

「いい？ 背中と腕がどう動くか、よく見ていてね」

大人用の大きな弓を取ると、的に向かう。矢を挟んだ指を弦に軽く掛け、頭より高く持ち上げる。腕は固定し、肩を軸にして引き下ろす。それで自然と、弓と弦が開く形に引く事ができた。

狙いを定めて矢を放すと、ひゆるりと小さな螺旋を描いて矢尻が  
的の真ん中に収まった。

「お見事です」

「ありがとう。昔から狩りは得意なのよ」

いつの間にか、子供達にノアが加わっていた。正確に言うと、列  
は崩れて子供達がノアの周りに集まっているのだ。

ノアは中でも特に小さな、枯れ草色の頭に手を置いてから輪を離  
れた。その子供は彼の息子だそうだ。バツカスの妹がノアの妻だと  
サラがいつか教えてくれた。

彼はあたしの脱いだ外套を拾い、着ると言うふうにし出して言  
う。

「長の家へ。報告があるそうです」

情報収集に出掛けていたバツカスが、大きな情報を持ち帰った。

「ワイルダーが死んだ？」

デイトンの部屋に入るなりそれを聞かされ、あたしは崩れてしま  
いそうになる。さっと寄ったノアとアルが両側を支え、椅子に運ぶ。

「理由は？ どうして死んだの」

「殺された様です。犯人は解らず、軍部でも探している最中だとか  
「冗談でしょ」

本気でそうは思わないが、口にせずにはいらなかった。椅子の上  
でうな垂れて、膝に載せた自分の手が眼に入る。指先の色が変る程、  
知らない内にきつく握り締めていた。

ワイルダーは獅子の牙で、そしてヴェンセントの師でもある。そ  
れを倒したと言うなら余程の剣客か、それとも卑怯な策を取ったか。

「どんな殺され方を？」

「姫様」

案じるようにノアが止めた。

あたしはそれに、邪魔をするなと首を振る。

「知らなくては。ワイルダーは強かったはずよ。計略によるものか、  
それとも純粹に剣の腕で負けたのか。重要な事よ」



「切り合って死んだようです。死体は城内で見付かりました」

「なら、相手にひと太刀くらいは浴びせたかも知れないわね」

剣の腕が確かで、そして城に上がれる人間。あたしは自然と、黒尽くめの二人組を思い出した。

あれを差し向けたのはワイルダーではないかと疑ったが、こうなると解らない。本当に無実か、仲間割れの可能性も捨て切れないが、どちらにしろ気掛かりなのは、ワイルダーを殺せる人間が城の中にいると言う事だ。

そしてワイルダーが無実だとしたら、それはヴィンセントの命も脅かすだろう。

考え込んだあたしの横で、デイトンは苦々しげに自分の判断を口にした。

「時期が悪い。石の奪回は少し待つ事でしょう」

「……だけど、不安だわ」

何が、とは言えなかった。自分でも明確には解らない。胸を圧迫するようなそれがいつまでも消えず、ただ、不安だった。

長の家を出て、本草師の所に向かう。

外套を脱いで戸口に下がった布を潜ると、寝台の上で黒い頭が寝返りを打った。

「アン」

どうやらやっとあたしが王女らしくないと悟ったらしく、彼はいつからかミドルネームを呼ぶようになった。

気付いて起き上がろうとするコーディーを制し、ルイスと目礼を交す。

「気分はどう？」

「ルイスがおおげさで、許してくれないだけです」

「今朝も熱を出したの？」

笑いを含んでルイスがばらす。眉を上げて見詰めると、患者は毛布の中に潜り込んだ。

コーディーは本草師の家に置かれていたが、付き添うのは母親の

オーブリーではなくルイスだった。

胸に剣を突き刺したまま、丸一日馬車に揺られていたのだ。正直、助かるとは思ってなかったらしい。だからこそ隠れ里とでも呼ぶべきこの土地にも運ばれたのだが、予想に反して彼は回復した。

喜ぶべき事だったが、扱いに困っていると言うのが実際のところだろう。

どう伝えるか迷ったが、結局、率直な言葉しか浮ばなかった。

「コーディー、ワイルダーが死んだわ」

「そんな」

眉を寄せて起き上がるうとする肩を、ルイスが押える。

「解らなくなってしまうたわ。あたしはワイルダーを疑っていたけど、その根拠は何だったのかしら。考えても、かも知れない、と言う程の理由しか、思い当たらないの」

「……そうですね。策略には、向かない人でした」

「だとしたら、他にいるわ。ヴィンセントを裏切る誰かが、それも彼のすぐ傍に」

仲間だと信じた人間を疑うのは、辛いのだろう。傷付いたように顔を曇らせたコーディーが、はつと顔を上げる。

「あ、ごめんなさい。お邪魔を……」

視線を追うと、布避けて戸口に立ったサラが、慌てて立ち去ろうとするところだ。

「構わないわ。あたしはもう行くから、替りましょう」

「でも」

「いいの。少し話したかっただけだから」

実際、これ以上会話も続かないだろう。

腰掛けから立ち上がり、寝台の傍を離れる。恐縮しているサラの肩に軽く手を置いてから、コーディーの部屋を出た。

すると、その後ろからルイスが付いて来てしまう。戸口の布に紐を巻き付け、開いた状態にしてその場を離れる。

不思議そうなたしに気付いて、ニヤと笑った。

「見てらんないんですよ」

「ああ……、そう。サラは、よく来るの？」

「いや、まあ。毎日ですかね」

軽い調子でそう言ったが、垣間見せた表情は困惑しているふうでもある。

ふと気が付いた。サラは、氷壁の長であるデイトンの娘だ。なるほど、これは困る。

「泣かせたら大変な事になると、今度脅して置くわ」

「……ですね」

ルイスは銀色の頭を搔いて、ふと表情を改めた。

「城に行くって話ですが」

「ああ……石を探しに？ それはなくなっただわ。デイトンが、時期が悪いと言って」

「行くなら、オレを連れてって下さい」

ギクリとした。見透かされた気がして。

真っ直ぐな、そして思い詰めるような眼に驚かされる。人好きのする軽やかさの裏に、こんな火のように熱い顔を隠していたのか。

「姫様がバツカスやノアを頼りにするのは分かります。だけど、オレも」

「待って」

遮る。そんな事ではなかった。

「ルイス、待って。話を聞いていた？ あたしは、行かないと言っただのよ」

「そうですか？」

「そうよ」

素知らぬ顔で嘘をついた。

あたしは、ひとりで王都へ向かうつもりだ。実際にワイルダーが死に、今もヴィンセントが危険なのだとしたら。じっとしている事はできない。

つくづく奇妙な縁だとは思うが、リシェイドに属するあの人達が

好きだった。思慮深く、そして情に篤い。結局あたしを甘やかしていたのは、年若い將軍だけではなかったと思う。

この国を治めるのは、ヴィンセントがいい。これはずっと考えていた事だった。あの人なら、アイデームの民を守ってくれるだろう。

死なせる訳にも、狂わせる訳にも行かない。

あの方は、あたしが未来を託す人だから。

(二十一)

(二十一)

内側に毛皮を貼った長靴を履いて、厚い外套の上に矢を収めた矢筒と弓を背負う。

真夜中、あたしは腰まで積もった雪の中に立ち、深いため息をついた。

甘かった。

言うなれば、ルイスは悪餓鬼だったのだ。裏をかくのが、やたらと巧い。

「一人で夜の山下りるなんて、無茶しますよね」

すぐ傍で、ルイスが言う。彼はあたしの腕を取り、逆の腕をアルに任せた。二人で息を合せ、雪の中から一気に引き抜く。

白状すると、雪の中に立っているのではなく、埋まっていたのだ。積もった雪はやわらかく、足を踏み出すとたちまちに腰まで埋まってしまった。

ルイスとアルが平然と雪の上に立っているのが不思議だったが、疑問はすぐに解けた。彼等は靴の裏に広い板のような物を結わい付け、体重を分散しているのだ。

「ずるいわ」

「だから、最初から連れてって下さいって頼んだのに」

白い息で文句を言っている間に、アルが黙々とあたしの靴に板を付けてくれていた。首を傾げる。

「ねえ、二人だけなの？ 他の人は？」

「いませんよ。ノアがよかったですか？ でもあいつ、子持ちだからな。誘ったら、ロビンにどやされる」

そう言うとアルと二人、声を潜めて笑い合った。ロビンと言うのがノアの妻らしい。

では本当に、彼等だけなのか。

「勝手に出て来たのね。あたしの手助けなんかして、デイトンに叱られるわよ」

「ですね。だけど、一人で行かせるほうがもつと悪い」

口の減らない男だ。

上着に入り込んだ雪を払っていると、ルイスは埋まった拍子にあたしが落としたランタンを拾い、火を吹き消した。呆気に取られる。明かりがなくて、どうやって道を探すのだろう。

「大丈夫」

驚いているあたしに、アルが上を指し示した。

見上げると、夜空に月が掛かっている。満月には足りなかったが、降り注ぐ月影が一面の雪に映り込んで幻想的に輝いていた。

「……美しいわね」

「その上、足元にも困らない。わざと月のある夜を選んだのかと思つてたのに」

意地の悪い事を言って、面白がるようにルイスが笑った。

道すがら聞くと、夜の山中で火は目立つのだと言う。その為に彼等はあたしを見失わずに済んだのだが、里の者が不在に気付けば後を追う目印にもなり得た。

ルイスとアルの同行は不本意だったが、どうやらこれは、ひとりでは麓までも辿り着けそうにないと悟る。

二人のお陰か夜明け前には山を降りたが、そこで直面したのはアルが馬に乗れないと言う事実だ。あれだけ身軽なら乗れるだろうに、扱えないらしい。

男二人よりは馬の負担も減るだろうと、あたしが乗せる事になった。馬には気の毒だが、潰すつもりで駆ければ夜には王都に着けるはずだと考えていた。

ルイスとアルが調達したのは中々の駿馬で、実際には陽が落ちる頃には王都が目視できる距離まで近付いていた。

このまま行けば城下を囲んだ塀の門に辿り着くが、その道から逸

れ、あたしは町の外にある教会へ向かった。ルイスの馬が慌てて後を追って来る。

二人には布を被せて容姿を隠させ、押し入るような勢いで巨大な教会に入り込む。するとあたしの顔を知る司祭が、真っ青になって悲鳴を上げた。

「マチルダ殿下！」

手近の椅子を蹴り、司祭にぶつける。

「神に仕える者らしく、慎ましやかに口を閉ざしておいで」

後に続くルイスが震えながら体を折り曲げ、「姫様かつこいい！」と絶賛した。

ここは古くから、アイディームの王家が支援していた協会だ。秘密の通路が通じている。その為に立ち寄ったが、ついでにルイスとアルの身なりも整えたかった。

怯える神職者達に準備を言い付け、インクに浸した櫛で銀色の髪を梳かす。人払いした静かな部屋で、彼等は黒髪に変身した。更にもの上から布を巻けば、まず銀髪とは知れないだろう。後の問題は、この緋い眼だ。

ふと思いついて、司祭を呼ぶ。

「告解の仮面を」

すぐに白い仮面が運ばれて来る。顔に当てて紐を結ぶと、目元を隠して鼻の部分が鳥のくちばしのようにになった。

これは身分を秘して神に告白し、許しを請う時に使われる。だが、眼の色も隠してくれるだろう。

準備はできたが、まだ時刻が早い。城に忍び込むのは、もっと夜が更けてからにしたかった。

余裕ができてしまうと、どうしても確かめたい事があった。教会に二人を残し、こっそりと城下へ向かう。

行ってみるとフィルの食堂は変わらずにあり、ほっと肩の力を抜く。焼き払うのは止められたと聞いていたが、全く無事かどうかは解らなかつたからだ。あたしのせいで店が潰れてしまつては、申し

訳ないどころではない。

そのままそつと立ち去ろうとすると、背後から肩を掴まれた。フイルだ。

「何をしてんだよ！」

潜めた声で叱り付けられる。確かにこんなにあっさり見付かっ  
いて、あたしは本当に大丈夫だろうか。

物陰に引き込まれて、ひそひそと話す。

「あの時は悪かった。オフクロが……」

「仕方ないわ。お母様も心配しての事だろうか」

「弟は？」

一緒にいたコーディネーを、そう説明していたのを思い出す。

「元気よ」

「そっか。あの、置いてった荷物な、言われた通り金は屋根直すの  
に使わせてもらった」

頷いて見せた。それは構わなかったが、荷物と言われて胸が痛む。  
あれはワイルダーが用意してくれた物だった。

「大丈夫だったのか？ 大事な物とか、入ってただろ？」

首を傾げて、フィルを見上げる。何だろう。お金と着替え以外に、  
何か入っていただろうか。

解らずに次の言葉を待っていると、フィルは仕方なさそうにボソ  
ボソと口にした。

聞いて、なるほどと納得する。それは言いにくかっただろう。男  
と言つのは、時に面倒だ。

そしてふと、疑問が浮かぶ。

ワイルダーは、そんなに気の利く男だったか？

一度教会に戻り、どこに行っていたのかと責められながら手を繋  
ぐ。

「いい？ 絶対に離さないでね。離れてしまったら、あたしにも助  
ける手段がないの」

両手の先、それぞれの男に言い含める。ルイスとアルは頷いたが、



こっちは不安で仕方ない。

コーディーの時のように繋いだ手を紐で結んでしまいたいの、彼等がそれを許さなかった。手を結ばれていては、咄嗟に動く事ができないと。

「だから、通路の中では手を離せないって言ってるのに……」

何が咄嗟なのだろう。二人が腰に吊るした長剣が、たまにガリガリと壁を掻く。狭い通路を殆ど横歩きのようにして進みながら、ぶつぶつと文句を言った。すると二人が仮面の顔を見合せて、クスリと笑う。

「笑い事じゃないわよ」

「だって、おかしいでしょ。ずっと山奥にいたオレらが、姫様と手なんかつないで城に行こうって言うんだから」

「おまけに、髪まで黒くてお揃いだ」

抑えた声で、アルが笑う。

「喜んで貰えたなら、よかったわ。本当は、黒髪の評判はすごく悪いの」

「そうですか？」

「ええ、死をついばむ鴉のようだとも言われたわね」

言ったのは、さっきの司祭だった気がする。

誰も否定する人間はいなかった。実際、あたしが人を殺した後だったからだ。

先頭を行くルイスに合図して、角を曲がる。下に伸びる階段を降り、通路の出口から外の様子を窺った。どうやら、見張りはいないらしい。

窓のない廊下に出る。隙間なく石を組んだその場所は、地下牢に近い。あたしが十年を過ごした地下牢は、確かに秘密の通路に通じていない唯一の場所だ。しかし、その傍まではこちらで忍び寄る事ができる。

足音に注意して、格子に手を掛けた。

「グレン」

思いの他に声が響いて、心臓が一瞬ひやりとした。

四角い地下牢には、隅に木と板を組み合せた寝台がある。その上からはみ出した足が、大儀そうに床に降りた。ゆっくりと上体を起し、年嵩の従兄弟は怪訝そうに顔を歪める。

「逃げたと聞いたぞ」

「戻ったの」

「魔女の思う事は分からんな」

「そう？ 単純よ。この国と、民を守るの」

囚われた男は、ふんと鼻で笑った。

立ち上がったかと思うと、さつと駆けて鉄格子を掴む。気圧されてしまった。グレンの左手は格子と一緒にあたしの手を捕まえて、逃げる事もできない。

ルイスとアルが素早く剣を抜き、格子の間から突くようにグレンを狙う。

「小賢しい言葉で、今度は我を惑わすか？」

「手伝って欲しいの」

賭けだったが、その価値はあった。グレンは強い。相手が何者であろうと、必ず戦力になるはずだ。

「生憎だな」

「グレン。事が終われば、あたしを殺してもいいわ。でも、聞いて。今止めないと、この国は跡形もなくなるかも知れないの」

確信はない。だがそれが、あたしが全身で読み取った感触だ。グレンは驚いたように眼を開き、そして頷いた。

「そうなるだろう」

「なら……」

胸の中に希望が芽生えたが、グレンは首を横に振った。そして利き手である右の腕を持ち上げて示す。息を飲んだ。

「剣が握れぬなら、用はなかるう？」

巻かれた布が、血を吸って赤い。その右手からは、三本の指が切り取られていた。

「ハルディンマゴの者がおるらしい。王家の通路を通るまじないだと言つて、持つて行きおつた」

「それは、男？ 二人ではなかつた？ 全身に黒衣を纏つた」

肯定するグレンを見て、あたしは絶望的な気分になる。あれがハルディンマゴの民なら、それは死の商人と呼ばれる者達だ。彼等の生業は他国からの依頼を受け、人の命やそれに等しい情報を遣り取りする事。魔術師の国と呼ばれる裏で、国家を支えている仕事だ。

この城に施された秘密の通路は、かの国の魔術師が作った。彼等なら、魔術を破る方法を知つていて不思議はない。

唇を噛む。それでなくても、黒衣の男達は手強い。秘密の通路まで使えるとあつては尚更に厄介だ。

でも、気付く。それはこちらの強みにもなりはしないか？

上着の下に忍ばせた短剣をベルトから引き抜き、自分の手に当てるとグレンに問う。

「指でいいのね？」

(二十二)

(二十二)

久々に訪れた城内は、驚く程に静かだった。

庭の木々を揺らす風は冷たいが穏やかで、この胸に吹き荒れる嵐のほうがか余程騒がしい。

あたしの存在に気が付いて、男は椅子の上で振り返った。息を詰めるような、ゆっくりとした動作だ。

その人影に、問い掛ける。

「また手紙？ 婚約者はお元気かしら」

唇だけで微笑んで、彼はペンを置く。またゆるりと立ち上がると、灰色の長髪が広い肩から滑り落ちた。

「ええ、とても。もうすぐ望みが叶うとあって、喜んでいる様です」

「そう……。ねえ、コーネリアス。教えてくれる？ あなたはいつから、祖国と仲間を裏切っているの？」

「こつ尋ねるのは緊張したが、予想に反してコーネリアスは楽しげに笑った。

「さて、いつだったでしょう。閣下やワイルダーを疎んだのは、最初からだった様に思いますが」

「だから、エンジェリック・ブルーを他国に売るのね」

「今度は姫君にお聞かせ願いましょう。何故、裏切ったのがわたしだと？」

世間話でもするように、彼は言う。

軍の中に裏切り者がいるのは解っていた。フィルの母親があたしの所在を密告した時、兵士よりも早く来たのは黒衣の男達だったから。

その直後にはノア達もやって来たが、あたしを見失った彼等が注意を払っていたのは軍の動きだ。軍の情報が、いち早く死の商人に

流れていたと言う事になる。

だがコーネリアスに辿り着かせてくれたのは、ワイルダーだ。

「頻繁に遣り取りされる手紙と、あの荷物ね」

「荷物？」

「あたしが城を抜け出す時、ワイルダーが持たせてくれたの。必要な物を全部詰めてね」

「そうでしたか」

今初めて知ったと言う顔に、あたしは思わず吹き出した。

「知っていたでしょ？　ワイルダーは、あの荷物を誰かに用意させたはずだもの」

「秘密なのには？」

「荷物の中にね、経水の為の下着が入っていたのですって。男の人は、普通そこまで気が付かないわ。ワイルダーなら、尚更ね」

あたしも最初は気付かずに、今日、フィルに教えられて知った。

経水と言うのは月のものの事で、普通女は家で大人しくして過ぐす。だが旅の途中などでそれが適わない時は、専用の下着で対応した。

あの細かい事の苦手な男が、そこまで気配りできるはずがない。誰かの手を借りたのだ。

「直接手伝った訳じゃなくても、ワイルダーが女の為に荷物を作らせたと言う話は伝わったはず。ここにいる二個師団は、殆どあなたが管理しているもの。情報は、必ずあなたの所に上がるでしょう？」  
そして、あたしの逃亡計画を知ったのだ。

「あたしが逃げ出す夜に合せて死の商人を送り込んだのは、ワイルダーに嫌疑を向ける為ね。お陰で、あたしはあの人を頼れなくなっ  
たわ」

「なら良かった。ワイルダーに首を突っ込まれては、面倒で仕方なかった」

「ワイルダーを殺したのはあなたね」

唐突に断じたので、コーネリアスは少し驚いているようだった。

これは最初からだったが、隠すつもりはないらしい。促すように微笑んだ。

「怪我をしているのでしょ？ 動くのが辛そうだね。ワイルダーはあなたを強いと言っていたけど、本当だったのね」

「最後の頃にはワイルダーも、わたしの真意に気付いた様でしたが……。意外ですね。あれが、そんな事を？」

「言っていたわ。結婚式には、裸で踊るのですって。婚約者なんていないのにな」

笑いながら言うと、コーネリアスも笑んで応えた。

故郷に残した婚約者と言うのは、頻繁に手紙を遣り取りする為の方便だろう。最初から、そんな女は存在しない。密かに手を結んだ他国の者と、恋文に見せ掛けた密書を交していたのだ。

そんな嘘まで作り上げて、彼には、引き返すつもりさえ最初からなかった。

「いつか言った事を覚えている？ 裏切る事ができるのは、信頼を受けた者だけよ。コーネリアス。あなたは、見事に皆を裏切ったわ」  
物陰から、仮面を付けたルイスとアルが躍り出す。

「さよなら」

言ったあたしの声と同時に、アルが構えた弓から矢を放つ。コーネリアスはそれを剣で切り払うが、その隙を突いたルイスが無防備な脇腹に剣先を向けた。

剣が肉を裂くよりも、一瞬速く。ルイスとコーネリアスの間に黒衣の男が現れた。二人目の男が、影に沈んだ通路の中から滑り出す。弓をあたしに投げて、アルがルイスに続いた。

背に負った矢筒から矢を抜いて、黒衣の男に狙いを定めて次々に弓を引く。だが時と共に、焦りが募る。あたしの放つ矢はどれも男達の黒衣を捉えたが、肉体を穿つ事はできなかった。手応えのないマントに勢いを殺されて、石畳の上にカラリと落ちる。

「腕の良い射手だとは聞いていましたが、大したものですね」  
ギクリと、心臓が跳ねた。

コーネリアスの声が、余りに近い。

「わたしの取引相手は、どうしてもエンジェリック・ブルーを手に入れたいそうですからね。大切な手掛かりを、殺しはしません。ですがそう抵抗されては、こちらにも考えがありますよ」

近過ぎる。コーネリアスの手は、すでにあたしの弓に触れていた。これでは射る事ができない。打つ手がない。

聞き分けのない子供を諭すように、翡翠の瞳があたしを見詰めた。なるほど。殺さない、と言う表現が彼らしい。死なない程度であれば、苦痛を与えるつもりがあると云う事だろう。

と、コーネリアスがはつとして、急いで後ろに跳び下がった。

その後を、白刃が一閃する。いや、少し掻いた。裂けた手の平から滴って、血が石の床にパタパタと散る。

「……閣下」

コーネリアスは笑ったが、獰猛な色がその表情に滲んでいた。

その血を吸って輝く剣は、あたしがヴィンセントに渡した鋼の長剣だ。

後ろ姿が、目前に現れる。冷たい金色が灯火の明かりに色付いて見えた。

「警戒は万全と言っ訳ですか」

コーネリアスは、失笑するように息を吐く。

彼の居室には兵士が雪崩れ込み、部屋の主と侵入者達に穂先を向けていた。それは、あたしやルイス達にも同じ事だ。

「ヴィンセント」

呼ぶと、アイスブルーの眼がこちらに向いた。言葉はない。眉を顰め、そして堪えるように、ただあたしを見た。

その顔が、少し瘦せたかも知れないと思う。

「知っていたの？ コーネリアスが、裏切っていると」

「……牙を屠る事ができるのは、牙だけだ」

ではウィルダの死が、疑惑を確信にしたのだ。

だったらヴィンセントは、コーネリアスをそれとなく監視しただ

る。その為に、あたし達の侵入にもいち早く気付いた。

「捕える。一人残らずだ」

「相変わらず、閣下は甘くて居られる」

嘲笑う声を合図に、悲鳴と怒声が渦のように湧き上がった。

「姫様！」

警戒を促す、ルイスの声。

その時には兵士達の腹を裂き、胸を突き、血を撒き散らす黒衣の影が間近にあった。ぶつかるといふようにあたしを抱えんとした腕を、鋼が力任せに切り落とす。

床にガチリと当たった剣をそのまま、下から上へと振り上げる。隻腕となった黒衣の男は、息を飲む間もなく下腹から喉までを鋭く切られて絶命した。

鋼の切れ味は、切られた本人も気付かない程だと比喻される。本当かも知れないと、初めて思った。血は、男が床に倒れてから吹き出した。

もうひとりの黒い影が、兵士を薙ぎ倒して距離を詰める。逃げ腰になった兵を掻き分け、アルが行く手を阻む。切り付けられた剣を避けず、腕で受ける。そのままぐつと踏み込んで、逆手に取った剣で黒衣の腹を横に裂いた。だが、浅い。逆に腹を蹴られ、腕を深く裂かれて退けられた。

そして男が素早くこちらに向かう。ヴィンセントはすっと体を移動して、それに備えた。その背後。

「ヴィンセント、駄目！」

高く掲げるように、コーネリアスの剣が彼の背を狙っていた。

あたしは自分の体をヴィンセントと背中合わせに重ねるように、剣の前に立ちほだかる。剣士は翡翠の瞳を見開いて愕然と見たが、刃を止める事はできなかった。

両腕で振るわれたコーネリアスの剣が、ヴィンセントとあたしの体を深く切り裂いた。



(二十三)

(二十三)

あたしは両膝を突いて崩れ、その背後にはヴィンセントが倒れ込んだ。

切られた肩が、燃えるように熱い。筋だけでなく、骨まで断たれているかも知れなかった。胸の中央から肩に繋がる骨を切られていたら、今この右腕は肉と皮でぶら下がっているに過ぎない。

「……ヴィンセント」

ズキン、ズキン、と傷口が心臓のように脈打って痛む。腕を引き摺り、倒れたヴィンセントの傍に寄った。

あたしは彼と体を重ねる形で同じように傷を受けたが、背が高いだけヴィンセントの傷は深かった。

咳き込み、あざやかな血を吐く。それを見て、ぞっとした。左肩の傷が、肺腑に達しているのだ。

視界が濁る。涙だ。泣いている場合ではないのに。ちゃんと見なくてはいけないのに。

あたしの涙と溢れた血が、ぼたぼたとヴィンセントの上に落ちて染みた。その胸が、息苦しげに上下している。

「ルイス！ お願い、診て！」

母親は本草師だ。ルイスにも、心得がある。それに縋って顔を上げたが、涙に濁る眼が捉えたのはコーネリアスの姿だった。

「無茶をなさる」

不機嫌に言っつて、傷付いてないほうの腕を取った。

「嫌！ ヴィンセント！」

「すぐに息絶えます。お忘れなさい」

引き摺るようにあたしを立たせ、コーネリアスは温度の感じられない声で言った。

そうなのだろうか。

そうだとしたら、悪い夢だ。目の前が暗くなる。

「ヴァインセント」

信じたくはないのに、呼んでも返事はなかった。

どうしてこんな事になったのだろう。

どうしてヴァインセントが倒れているの。

護衛はどこ？ 命を賭して彼を守るはずのクライヴが、どうしてこの場にいないのだろう。

ルイスが血塗れで倒れた体ではなく、あたしに向かって駆け寄ろうとする。が、それを黒衣の男が素早く阻んだ。剣を激しく打ち合う音が響く。

コーネリアスはついでのように二、三人の兵を切り捨て、腕を引いたまま秘密の通路に入って行った。傷を庇うアルが血に濡れた手をあたしに伸ばしたが、わずかに遅い。

彼等は通路に入る為であろうと、決して指は受け取らないと主張した。だからあたしの指は無事だったが、悔やんでいるだろう。その為にルイスもアルも、この中にまでは追って来られない。

目的地を知っているように、コーネリアスは薄暗い通路を淀みなく歩いた。それに手を引かれ、足を進めるたび激痛が走る。

もう動かなくなった右腕が、皮と肉を引きちぎるようにぶらぶらと揺れるのだ。息を詰め、悲鳴を噛み殺す。

それに気が付いたように、灰色の頭が振り返った。わずかに思案する様子を見せ、少し広くなった場所で立ち止まる。

この時、コーネリアスは恐れるふうもなくあたしから手を離れた。恐らく、グレンの指を持っているのだろう。

あたしを座らせると、自分の頰からタイを外し、脱いだ上着を迷わず裂いた。それを見るとはなく眺める。傷の為に朦朧と、熱を持ち始めた頭で背後の壁にもたれた。

本当に、この男は表の皮一枚だけ穏やかそうで、その下は解らない。

上着を脱いだシャツの下には均整の取れた肉体が隠れていると解ったし、小さな袋を結わい付けたベルトは、思いの他がっしりとした腰を締め付けている。鍛え上げた、兵士の体だ。

彼は裂いた布を手にとると、肩の傷口に巻き付けた。それから腕と胴を密着させて、布でぐるぐる固定する。それだけで、驚く程楽になった。傷口に集中していた腕の重さが消えた為だ。

応急処置のあざやかさに、思わず感心してしまう。

「あなたも、軍人なのね」

「軟弱に見える様ですが、一応は」

実にやわらかい表情を作って笑うので、あたしは訊いてみたくなつた。どうしても、解らない。

「何が不満だったの？」

彼には偽りだったとしても、信じ、そして頼りにされていたのに、ほんの一瞬、本当にわずかな間だけ、コーネリアスは瞳を揺らした。心を揺らしたのだと、あたしは感じた。

「貴方にも、お解りにならないとは」

静かな声だ。

「我慢ならないと思われた事は？ 国家を守って来たのは王であり、誇り高い忠節と、我々貴族の純血の筈。国事に、野良犬は場違いだ」  
頭がぼうつとした。話を聞いても、何も感じない。もう、感情が麻痺しているのだろうか。

「……それで、裏切ったの？ ヴインセントと、ワイルダーの身分が許せなくて？」

ヴインセントは下級貴族の庶子で、ワイルダーは完全に庶民の出だ。由緒正しい貴族の血しか認められないと言うのなら、その部下となる事も、肩を並べる事も、耐え難い屈辱となつただろう。

それでも、あたしには。

「解らないわ」

男は、理解されない事を嘆きはしない。

その代り、剣を取った。

鉄と鉄が激しくぶつかり、火花を散らす。そして離れた。

「ヴェンセント！」

呼んだ自分の声が、悲鳴染みて響く。

まるで亡霊だ。顔に掛かる髪の下で、薄青い瞳に幽鬼の炎がちろちろと燃えている。

切り離された骨と肉を無理矢理にくつつけ、肩と胴をきつく巻いていた。その布が真っ赤に染まって、血が滴り落ちないのが不思議な程だ。寄り掛かって歩いたらしく、後ろの壁にずっと赤黒い筋が残っている。

吐いた血の垂れる口の端を持ち上げて、彼は笑うように言った。

「切られても、異存ないなコーネリアス」

この深手を思えば、驚く程しつかりとした声だった。

残された右手に握る剣を、無造作に振り上げる。気力だけで振った剣だ。それは無情に、そしてたやすく往なされる。

「何故だ！」

悲痛な叫びだった。無駄と知りながら剣で切り付け、涙なく泣いているように見えた。

それさえ軽く受け流し、コーネリアスはふと動きを止めた。じつとヴェンセントの顔を見て、頭を振る。

「解りはしない。貴方には」

「仲間を殺し、祖国を裏切る理由をか？ ああ、解らない！ コー

ネリアス、ワイルダーは……」

「わたしの父は重臣で、今も王のお傍近くに仕えている」

打ち込んで来る剣を、コーネリアスは滑らかな動作で横に流す。ヴェンセントがバランスを失い、たたらを踏む姿にひやりとした。

この瞬間、余りにも無防備だ。

だが、牙は獅子を切らなかつた。自分の剣を杖のように床に立て、膝を突いてしまったヴェンセントを見下ろす。

「その長子であるわたしが、家格の低い、それも庶子の下に付いている。父の落胆は、それはそれは深いものでしたよ」

「お前の優秀さは、王もご存知だ。だから経験の浅い私の補佐に、お前が……」

「いいえ。王は、わたしをお認めになつてはいない。貴方の補佐と言う立場が、その証拠となるでしょう。……国の礎なれと教育を受けたのに、期待されないわたしは、どうすれば良いのでしょうかね」  
本当に解らないと言うふうには、コーネリアスは首を傾げた。上着を脱いだ肩から灰色の髪が流れ落ちて、背中に揺れる。

ああ、そうか。

この人は、寂しいのだ。

揺れて足掻いて苦しんで、もう、引き返せない。

「終らせましょう。失礼致します、閣下」

遊ぶ事に飽いた様子で、刃がヴィンセントに向けられた。彼はもう、動く事さえ満足にできない。

鋭く光る剣先が、抵抗しない頭の上に落とされようとしていた。

「コーネリアス」

呼んだが、彼はヴィンセントに向いたままの背中であつた。

これは、彼に向けた最後の言葉になるだろう。

「これからあなたがどうなってしまうのか、あたしには解らないけれど、これだけは覚えていてね。あなたを最も信頼し、認めていたのは……ヴィンセントであり、ワイルダーだつたのよ」

居場所はここだつた。求めていたものは、ここにあつた。

遠い王ではなく、父親ではなく。すぐ傍にいる仲間を、信じる事ができればよかつたのに。

きっとそれは、コーネリアスの欲しかったものをくれたのに。

あたしは上着の下で短剣を抜き、灰色の後ろ姿に切り掛かつた。

(二十四)

(二十四)

さつとこちらに向けられた剣を、ヴィンセントが鋼で止める。その隙に、あたしはコーネリアスのベルトから、固く結わい付けた小さな袋を切り取った。

男は翡翠の瞳を揺らがせて、息を飲む。

祈るような賭けだった。それに勝った事を知る。端に血の滲む袋の中には、グレンの指が入っているだろう。

かすかな音を立てて小さな袋が足元に落ち、灰色の髪をした男の姿が掻き消えた。風に乱れた煙のように。

呆気ない、瞬く程の事だった。

コーネリアスが、もう現れる事はないだろう。かつてこの中で王族の手を離し、行方知れずになった者達のように。少なくとも、あの聡明な男は戻って来ない。

あたしがそうした。

消える瞬間の、あの眼は一生忘れる事ができないと思う。

石の床に、大きな音を立てて鋼の剣が落とされた。はっとして、ヴィンセントを見る。

顔を背けていた。

片腕で這うようにそれに近付いて、血に濡れた胸を掴む。

「あなたは、どうしてこんな所にいるの」

怪我をしているのに。

死んでしまいかも知れないのに。

「どうして入れたの？ グレンの指をどうしたの？」

「指？」

それは本当に解らない様子で、やっと顔をこちらに向けた。瞳が、少し濡れていたかも知れない。いつも冷たげな薄青色が、どうし

ようもなく寂しかった。

「……グレンの指よ。持っていないの？」

「持っていない」

では、どうしてヴァインセントはこの通路に入れたのだろう。

手の先の血に染まった体に、ふと思い出す。彼がこの深手を負った時、あたしも彼の体に血を落としていた。泣き縋り、涙と一緒にその血の為に、ここにいる事ができるのだろうか。可能性はあった。だがやはり、離すのは怖い。

彼を掴む手を、ぎゅっと強く握った。

彼もまた片手で、あたしの頬に触れる。

「貴方を、死なせる事はできない」

「いいえ、ヴァインセント。そのほうが、きっといいわ」

あたしはいつも、死を招く。

そんな気がしていた。

「貴方が、この国を継ぐべきだった」

絞り出すような声。囁きに似たそれに、あたしは酷く驚かされる。今となってはそれも適わないが、正統な血筋で、賢く、何より民を重んじる。貴方が王となれば、奇跡のような国ができただろうに「惜しい事だ、と。いつかのように、大きな手で頬を包んで呟いた。あたしは手の平の熱を感じながら、戸惑った。それは逆だ。だって、未来を拓くのはヴァインセントだ。守るのは、この人だ。」

「この国を援けるのは、あなたよ。あたしでは駄目」

「私は……」

頬から、熱が去った。

その腕は力なくだらりと垂れて、指先を冷たい床に落としている。苦痛を堪えるように、固く眼を閉じた。

切なくて、堪らなくなる。

金の髪に指を差し入れ、片腕でその首に縋り付いた。触れる程寄せた唇で、心の内をさらけ出す。

「あなたがいいの」

彼もまた片腕で、あたしの体をきつく抱いた。

\*

広いベッドで目を覚ますと、隣にヴィンセントの姿を探した。

左側に眠る姿に、ほっとする。薬に浸した布の下で、胸が上下に呼吸していた。左手を彼の右手にそっと重ね、あたしはまた深い眠りの中に落ちて行った。

それを数え切れない程に繰り返し、ベッドの上で体を起せるようになったのは春に近い頃の事だ。

夢現の意識の中で、赤い髪を見た。クライヴだった。あたしはよく回らない頭で、彼を責める。

どこにいたの。ヴィンセントが死に掛けていたのに。あなたは、彼を守るのが役目ではなかったの。どうして、あの場にさえいなかったの。

クライヴは答えず、言い訳もせず、年の割りに大人びた微笑みを浮かべた。これではまるで、あたしが駄々をこねているみたいだ。

どこからかワイルダーが遣って来て、余り苛めてやるなと頭を小突く。

そこだけは、幸せな夢だった。

時間は充分にあったはずなのに、春になってもルイス達はまだ石を探していた。見付からないのだ。あたしは必ず通路の中に隠されていると思っていたが、何しろ狭く入り組んでいて、慣れない者には迷路と同じだ。

あたしの血が染み込んだ布を腕に巻いて、仮面を付けた氷壁の民がいつも城中を走り回っていた。

「罷免になつたぞ」

ある日、部屋を訪ねるなりクライヴが言った。

ヴィンセントの傷は深く、まだ起き上がれずにいる。あたしのほうは少しくらいなら歩けるようにもなっていたが、まだ同じ部屋で



寝起きしていた。

これは、警備上の問題もあった。

死の商人はひとり死に、ひとりは逃げた。仲間の遺体を抱え上げて逃げた男は、まだ行方が知れなかった。これからも、もう知る事はないだろう。そう言う相手だ。

だがそれは、依然として危機が去っていないとも言えた。コーネリアスと手を組んだ取引相手は、エンジェリック・ブルーをまだ諦めてはいないはずだ。いつかまた、手を出して来るかも知れない。そしてもうひとつは、石の影響と言うべきだろう。ヴィンセントが離そうとしなかった。極端な執着を、どうやらあたしに向けたらしい。

落ち着き払って椅子に腰掛けたクライヴに、あたしは驚きのままベッドの上で問う。

「罷免と言うのは、総督の職？ それとも、将軍？」

「この場合は、両方だな。牙のない獅子は用なしだそうだ」

「そうですか」

覚悟していたのか、ヴィンセントは静かに言った。だが、あたしは内心で慌てる。ヴィンセントが治めないなら、ではこの国は、どうなるのだろう。

「父に、拝領を願おうと思う」

クライヴが、きっぱりと言った。ずっと考えていた事を、今やっと明かすように。

「何を賜りたいと？」

「この土地を。あの人は上にも下にも息子が多い。少々の領地で落ちこぼれを厄介払いできるなら、喜ぶだろうよ」

「殿下」

それを耳にした瞬間、違和感の正体が見えた。

ヴィンセントが言葉を改めているのは、立場が元に戻ったと言う事なのだろう。

「殿下、ねえ……」

それは、王に連なる者の敬称だ。

赤い髪を揺らして、琥珀色の眼を細める。面白そうに、軽く笑った。

「騙して済まないな。獅子の配下にいたのは、軍事を学ぶためだ。他意はない」

護衛がリシェイドの王子と知れば、周囲の扱いも違っただろう。それを望まず、身分を秘していたのだ。それは理解できた。

それに、本当に危険な時にヴィンセントが彼を遠ざけた理由も。本人には不服だろうが、まさか勝手な裁量で王の子息を死なせる訳にも行かないだろう。

いつだったか、グレンからあたしを庇った事があった。あの時ヴィンセントはクライヴの名前を鋭く呼んだが、あれは守れと言う命令ではなく、止めろと言う意味だったのだ。

態度を改めるつもりは更々なく、あたしは赤い髪に気安く問う。

「だけど、いいの?」

「いい、とは?」

「エンジェリック・ブルーは、もう出ないわ」

琥珀の眼を、真っ直ぐに見た。

もしもまだそれを欲しがらなら、あたしは戦わなくてはならない。例えヴィンセントが、あちら側に付くとしても。それは酷く胸を疼かせ、痛む事ではあったけれど。

「本国には、もう報告してある」

クライヴは、声を噛み殺すように笑う。

「エンジェリック・ブルーと呼ばれる鉱石は、もはやこの国に存在しない」

「それは……どう言う事?」

「鉱石と言うのは、土の中から生れるものだ。そうだろ?」

にやにやと笑って、とんでもない事を言った。

まるであの石が、人体から生まれると知っているような口振りだ。あたしはしばらくそれに悩んだが、少し経ってルイスが吐いた。

「あ、それオレだ」

王の執務室で、片っ端から荷物を引つ繰り返している時だった。あたしはまだ手伝えず、椅子に座らされていた。役に立たないのは解っていたが、気になって様子を見に来ていたのだ。

会話を横で聞いていたアルとバツカスが、手に持った荷物をがたがたと落とす。

「何考えてるんだ！」

「ルイス、それは……！」

「ええっ？　だってあいつ、面白いぜー？」

「……軽薄……」

呟くが、耳に届いてはいないだろう。二人に詰め寄られているルイスの姿に、あたしは左手で頬杖を突いてため息を落とした。

ルイスが軽はずみに懸けたのは、一族の命運だ。下手をしたら、死に絶えていた可能性もあった。

助ける気にもならず、仲間達から暴行を受けている仮面の男をぼんやり眺めた。と、彼等の足元で敷石がガタガタと鳴っている。

「バツカス」

荷物を落とした時に、偶然浮き上がったらしい。バツカスが隙間にナイフを差し入れて、タイル状にカットされた床の石を剥がした。「姫様、当たりです」

幾つもの不思議に輝く青い宝石が、ビロードに包まれて輝いていた。

それは様々な大きさの石だったが、特にあたしの眼を引いたのは小指の爪程しかない石だった。恐らく、子供のものだろう。

「見付かったか」

たまたま通り掛ったように、クライヴが顔を出す。アルが取り出したビロードの中身を覗き込んで、呆れた声を出す。

「希少な宝と言うのに、こつこつ見せられては有難みがないな」  
わずかにむっと顔を曇らせたバツカスの目前に、握り込んだ手を突き出す。

「みやげついでだ。持って行け」

慌てて出したバツカスの両手に落とされたのは小さな箱で、中から転がり出て来たのはエンジェリック・ブルーだ。父はリシェイドには石を贈っていないが、他国から買い取ったものらしい。

「……宜しいのですか」

「いつそ王の手元にない方がいい。人が死なねば手に入らんのも気に入らんし、そんな物に狂われて国を潰されても敵わんからな」

バツカスは、礼儀をわきまえない男ではない。だがどうにも、クライヴの口振りに納得できないものを感じるようだ。素直に礼を言うのが悔しいらしく、苦虫を噛んだような顔で人知れず苦悩した。

またクライヴもそれを面白がってニヤニヤと笑うものだから、残りの私達は声を立てずに笑う事に苦労した。

「見付けたわ」

部屋に戻ると、真っ先にヴィンセントへと報告する。彼はベッドの上で、穏やかに頷く。

「それとね、コーディーの事だけど」

「何か？」

コーディーは、いまだ氷壁の里にいる。怪我は随分いらしいが、長の娘であるサラと恋人になってしまった。

「子供ができたのですって。あの子は、このまま山に骨を埋めさせるから。何と言っても、これは譲らないわよ」

決定事項として伝えると、ヴィンセントは声を立てて笑う。

「それは、勝ち目が無い。何も言わない事にする」

「そうしてちょうだい」

腰に手を当てて勝ち誇ると、枕の上で金色の頭が窓に向く。空を見上げたらしかった。

「子供だと思っていたら、あれも行き先が決ったか。行き先がないのは、私だけだな」

軍人としての地位を失った。体は深手を負って、治癒しても元通り動けるかは解らない。生き残った者で、一番の犠牲を払ったのは

彼だった。

「考えていたんだが」

「なあに？」

「私の体が治つたら、残りを探しに行かないか」

石の事だと、すぐに解つた。

父は五つを他国に贈り、中のひとつをリシェイドが買い取つた。

それは今、氷壁の民の手に渡っている。残りは四つ。

だが、ある物は王宮の奥深くで厳重に守られ、ある物は盗み出されて行方知れずになっている。探し出すとしたら、一生の仕事になるだろう。

あたしは、くすくすと忍び笑いを零した。

「叱られるわね、ワイルダーに。あの人は、あたしがあなたを墮落させると思ってたわ」

「叱る資格はない。貴方をランチに誘わせたのは、そもそもあいっだ」

「それもそうね」

言つて、ヴェンセントと一緒に窓の外に眼を遣つた。

青い空がどこまでも広がり、世界をひとつに包んでいる。その下を二人で行けば、きつと胸躍る旅になるだろう。

あたし達は互いに手を強く握り合い、思いを馳せて空を見上げた。

(了) / Copyright (C) 2010 mikumo.  
All rights reserved.)

(二十四) (後書き)

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

誤字脱字、ご意見などございましたらお聞かせ頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3816n/>

---

エンジェリック・ブルー

2011年3月7日16時10分発行